

第VII章 出土遺物の詳説

第1節 亀井遺跡における剝片生産技術

I はじめに

弥生時代における石器生産の実態は、近年酒井氏等の研究により解明にむかいつつあるが、剝片生産技術については、森の宮・喜志遺跡等の分析作業をのぞき、今までまとまった分析研究作業がほとんどなされていないといって過言でない。そこで今回亀井遺跡の整理作業を行うにあたり、亀井遺跡の弥生時代剝片生産技術に焦点をしづり、亀井遺跡石器生産の特性を見ていきたい。また石核及び剝片等の時期であるが、各遺構の所属時期等を踏まえ、弥生時代中期後半より後期前半の時期を想定して間違いないであろう。

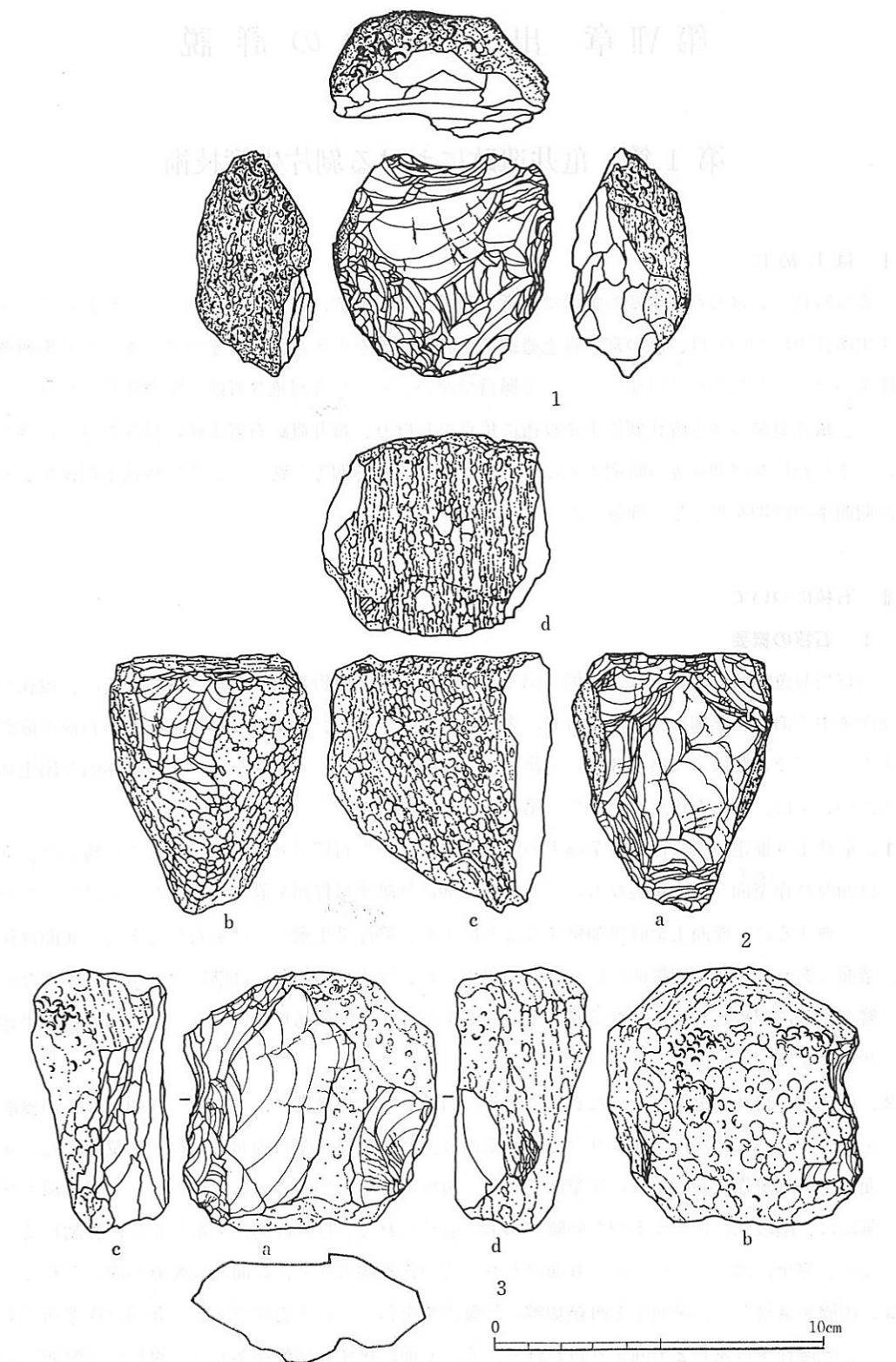
II 石核について

(1) 石核の概要

当報告対象地区においては、5例の出土が確認された。報告対象外の地区においては、現在整理作業中であり、詳細な実態は報告Ⅲに委ねたいのであるが、その中でも現在3例の石核を確認することができたので(第138図)を使い、この機会に報告しておきたい。なお具体的な出土地点については、他の石核と合わせて(第9表)に一括した。

1. 形状より推定して直径6~7cm大の円礫を素材とした石核である。石核としての構成は、素材面及び作業面という単純なものであり、特別に剥離平坦打面を設けることはしていない。要するに、礫面上を直接加撃することにより、剝片を生産している石核である。a面は作業面であり、複数の剥離面の切り合が認められ、縁辺部の剥離には階段状に止まる小刻な剥離が顕著に認められる。打点は礫面上の周囲を巡るように移動していく、そのため形状は半球状を呈する。
2. 亜角礫の自然礫を素材とした石核である。石核としての構成は、素材面(打面としての機能をもつ)及び2面の作業面となる。作業面は、c面に対し左右両面に対称して位置する。a面は主に剥離作業が行われた作業面であり、複数の剥離の切り合が認められる。縁辺部の剥離には、階段状に止まる小刻な剥離が顕著に認められる。打点は側縁を巡るように移動しているが、完全には巡っていない。b面はもう一方の作業面であり、数面の剥離痕が認められる。
3. 円礫を素材とし、礫面上を直接加撃し剥離作業を行っている石核である。a面は作業面であり、剥離作業は左右2方向より行われている。c面に接する剥離作業痕は、複数の剥離面の切り合が認められ、縁辺部には階段状に止まる小刻な剥離が顕著に認められる。なお打点部付

第三章 破片



第138図 他地区出土の石核 (②)

近には、作業面方向からの加撃により、階段状に止まる粗雑な打面調整を施している。d面に接する剥離作業痕は2面の剥離面よりなり、両剥離作業痕は作業面上において切り合わない。

(2) 石核の分類

石核の分類基準については、打面の位置及び剥片剥離方向により分類した。

石核を分類すると、大別して石核Ⅰ～Ⅲに分類することができる。以下分類案を説明する。

石核Ⅰ：円礫及び亜角礫を素材とする石核である。打面調整は主に施していないが、粗雑な調整を施している類例もある。打点は作業面の周囲を移動している。そのため作業面に残る剥離方向は多方向からの加撃による。残核の形態は、素材の形状をよく留めている。
(第84図1・第139図1～4・第138図1～3)

石核Ⅱ：扁平な剥片を素材として、素材の主要剥離面を作業面としている石核である。打面の転位は認められず、背面の礫面及び剥離面上を直接加撃している。剥離方向は、主に両側縁方向より長軸に対し直交するように施されている。そのため残核の形態は扁平な楕円形及び三角形状を呈する。(第49図64・第81図1～2・第140図1～3)

石核Ⅲ：節理に直交する剥離平坦打面を有する石核である。作業面は1面あるいは表裏2面存在し各々打面上及び素材面上を加撃面として、節理にそって、並列ぎみに剥離作業を行っている石核である。そのため残核の形態は、下面に素材面を残す扁平な板状を呈する。
(第141図・第49図63)

(3) 石核の観察

以上のように分類された石核をここでは(第139～141図)の石核剥離面構成図及び(第142図)の打撃方向度数分布図等を用い、石核の有する諸属性をより具体的に述べていきたい。そこで稿を進めるにあたり、石核剥離面構成図に用いている記号^(註4)(♀・↓・♂)、剥離面中の数字及び打撃方向度数分布図の説明をしておきたい。石核剥離面構成図に示されている記号は、剥離面相互の関係を表したものであり、剥離面に記されている数字は、剥離の順番を示している。なお図中に示されている剥離面には、縁辺部に施された小刻な階段状剥離等は省略している。以下記号を説明する。

「♀」一剥離面の切り合関係を示す記号であり、剥離の「新、旧」関係を示す。「○」印は、切り込んでいる剥離面を表し、「|」印は、切り込まれている剥離面を表わす。

「↓」一矢印の方向に向けて、剥離していることを示す。

「♂」一剥離の方向と、打点の所在を表す記号である。「↓」の方向は、剥離の方向を示し、「•」印は、打点の位置を示す。

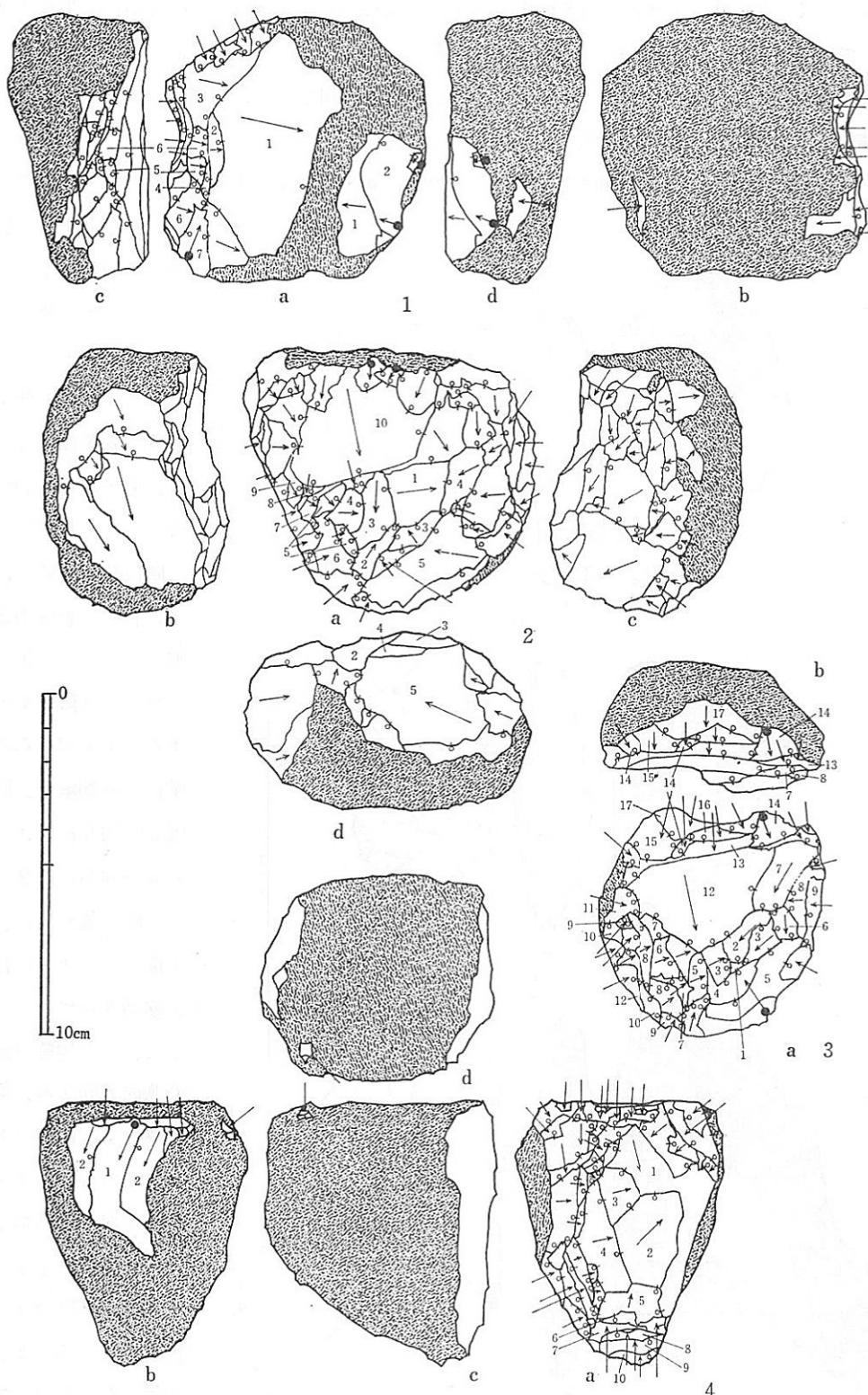
作業面に残る剥片剥離痕より観察できる、打撃方向の傾向を把握することを目的としたグラフ^(註5)が作業面打撃方向度数分布図である(第142図)。石核Ⅰに関しては、最終剥離時に使用された打面を基準に、中心を求めた。石核Ⅱに関しては、長軸線をc—g線に置きかえ中心を求めた。

そして、石核Ⅲに関しては、打面の両端を結ぶ直線を基準とし、中心を求めたため、長軸線がc—g線に置きかえられる結果となった。以下分類案に従い、説明したい。

a. 剥片剝離の進行について

石核Ⅰ（第139図）

1. 自然礫を素材とし、礫面上を直接加撃し、剝離作業を行っている石核である。その作業痕は、素材の一面に2面設けられていて、左右2方向より剝離作業が進められている。2つの作業剝離痕は切り合はず、そのため作業痕の新旧関係はわからない。c面側の作業痕より述べれば、剝離は素材の節理に沿うように、面1が剝離され、連続的に面2・面3と剝離している。剝離の方向はほぼ同方向である。それ以後の剝離は、さほど大きな剝片が剥ぎ取れたとは思えず、端部が階段状に止まる小さな剝離痕を残している。その間打点は左右に移動している。剝離の終末段階には理想的な目的剝片を得るための試みとして、粗雑な打面調整を施したり、作業面上端部にみられる剝離方向のまったく異なる複数の剝離を施したりして、新たな加撃点を探している。最も大きな剝離面は、面1であり、長さ37mm、幅66mmを計るこの剝離は、剝片のみを目的とするだけではなく、作業面作成を意図しているのであろう。d面側の作業痕は、3面の剝離面と1つの加撃痕よりなる。加撃痕は作業面に隣接し施されていて、加撃の力がおよばなかったものと思われる。作業痕の加撃方向は、c面側の加撃方向と逆方向であるが、同一軸線上にある。同石核は、石核Ⅰの初期段階の形状を示す石核である。2つの作業痕の剝片剝離作業が、進行すれば、2・3等の典型的な石核Ⅰの作業面の形状を示すものと考えられる。
2. 形状より考えるに剝片を素材にしたものとは考えられず、拳大の円礫を素材とした石核である。石核としての構成は、礫面（打面としての機能を有する）及び作業面という単純なものである。打点は全周を巡るように加撃点が移動している。番号は剝離の順番を示しているのであるが、同一条件を持つ剝離面が多数存在し複雑化するために、確かなものにのみ番号を示した。剝片剝離方向は、細分すると3方向に分けることができる。a作業面に残る剝離方向を分析すれば、b面方向からのもの、c面方向からのもの、上部からのもの等に分けられる。各々条件のよい加撃点を探すように打点を移動させている。また各剝離面を節理面との関係より観察すれば、半順目であり節理面を利用し剥ぎ取ろうとしていることがわかる。^(註6) b面は他の剝離面と異なり、剝離の切り合いはさほど認められず、その中でも比較的大きな平坦な剝離面が目立つ。a面中にはb面方向の加撃により剝離されている剝離面があり、b面が一時期打面として機能していた可能性をもっている。c側面方向からの加撃は複数の小さな剝離面よりなり、素材面付近の剝離は節理面に規制され、階段状に止まるものが認められる。素材面との境には粗雑な打面調整が認められる。
3. 形状より推定して、直径6～7cm大の円礫を素材とした石核である。石核の構成は、礫面（打面としての機能を有する）及び作業面という単純なものである。剝離の進行を順に追いか

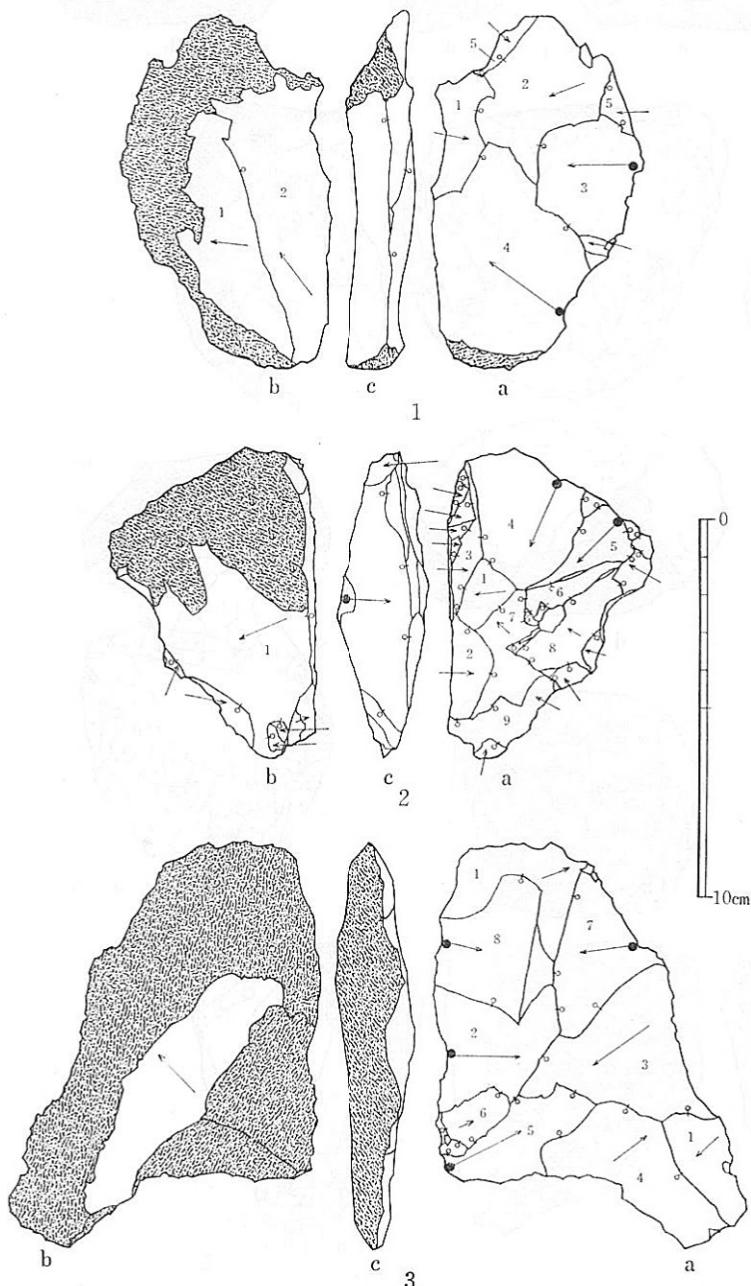


第139図 石核I剥離面構成図 (3/4)

けていく。最も古い剥離面である面1をわずかに残し、そこを切り込む剥離が、下半部に集中している。打点は下半部の周囲を巡るように移動して最終的には、上半部に移動している。また節理面との関係を観察すれば半順目であり、節理を利用しようとしているために剥離面の末端が、階段状を示す剥離が顕著にみられる。

4. 他の石核Ⅰと異なり、亜角礫を素材として選び、a・b両面に作業面をもっている石核である。

作業面より見れば逆三角形状を呈し、そのコーナーの稜線上を主に加撃している石核である。a面の作業面に残る剥離面を分ければ、中央に残る剝片剥離痕と、それを切り込む階段状剥離痕とに分けられる。剥離の順を追っていけば、①かなり大きな剥離である面1をまず上部からの加撃により剥離し、同剥離面を切り込むようにc面方向から面2～4の剥離を施した後、②下部のコーナーに打点を移動させている。そして、その剥離の後にc側面方向から、側縁を巡るように打点を移動させている。③そして、上部からの加撃に移り、最後に上部右コーナーの剥離で作業は終了している。②③の作業においては、コーナーをうまく利用して



第140図 石核Ⅱ剥離面構成図 (3分)

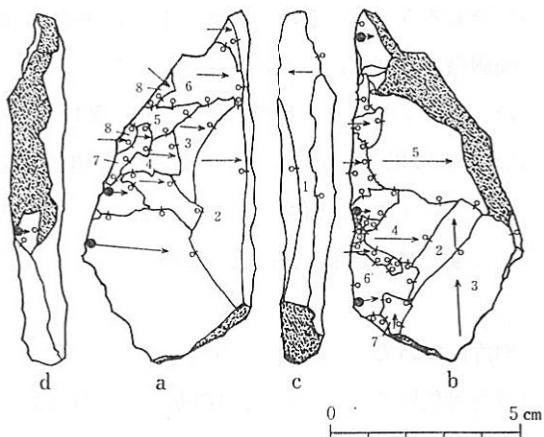
全周を巡るように剝離を施しているのであるが、その剝離が全周に至っていない。b 作業面には d 面を打面として少數の剝離面と 1 つの加撃痕が残る。b 面が作業面として適していなかつたのだろう。節理面より観察すれば、剝片剝離の方向は節理に対し順目であり、節理を利用して作業していることがわかる。

石核Ⅱ（第140図）

1. 剥片を素材とした石核である。b 面に残る面 1～2 は、素材剥出を目的とする連続的な剝離作業痕と思われる。b 面には、素材の剝離面として面 1 が認められ、剝離作業は右側縁方向より面 2～5 と剝離作業を進めている。そのため残核の形状は、扁平な橢円形を呈する。
2. 剥片を素材とした石核である。b 面に残る面 1 は、素材剥出を目的とした剝離作業痕と思われる。a 面には素材の主要剝離面である面 1 が認められる。剝離作業は、まず c 側面方向より進められ、側縁を巡るように打点が移動している。c 面には b 面方向からの加撃による折断面が存在し、作業面の打撃点をとばしている。節理との関係を観察すれば、半順目の剝離作業である。
- (註 6)
3. 明瞭な素材の剝離面は残さないが、形状より考えて剥片を素材とした石核である。b 面には節理面に規制をうけながらも、素材剥出を目的とした剝離面を残す。a 面には左右両側縁方向よりの加撃により、長軸線に直交するように剝離作業を行っている。そのため残核は不定形ながらも、長軸線を基準にして扁平な橢円形を呈する。節理との関係を述べれば半順目の剝離作業である。

石核Ⅲ（第141図）

a・b 両面に作業面を持つ石核である。素材に最初に加えた剝離は面 1 である。面 1 は打面として準備したものである。a 面は面 1 を打面として用いずに、d 面の礫面上を直接加撃している。剝離の方向は面 1 に直交するように剝離が進行している。打点は d 面の礫面上を巡るように移動している。b 面は a 面と異なり、面 1 を打面として用いて打点を移動させながら、d 面の礫面を切り込む

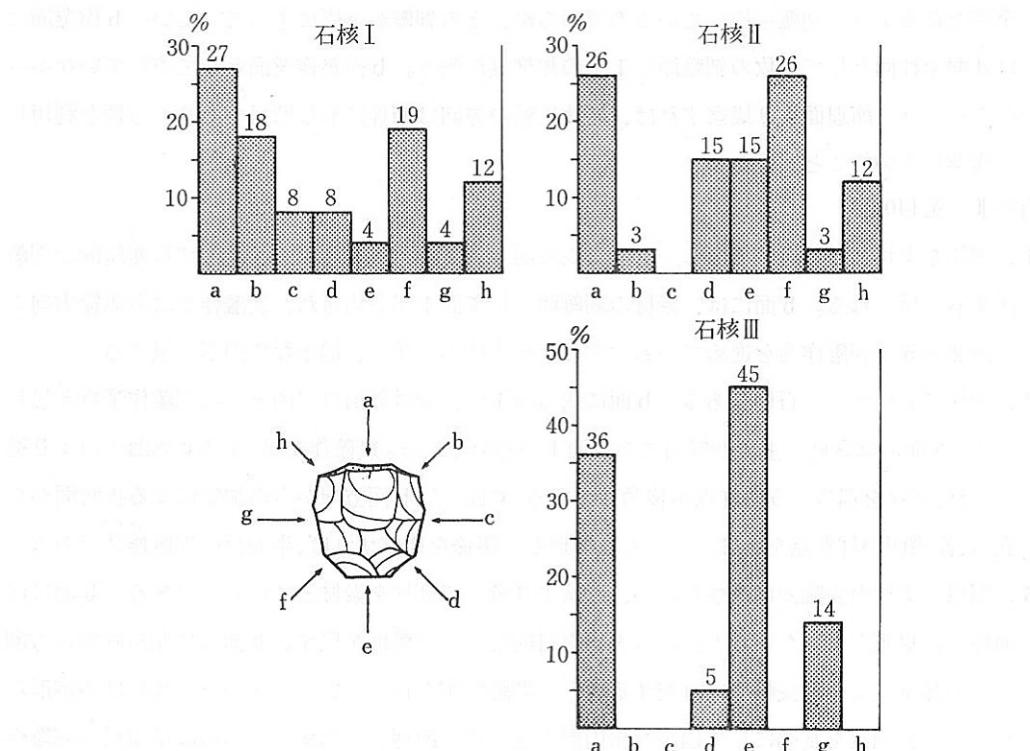


第141図 石核Ⅲ剝離面構成図 (1/2)

(註 6)
ように剝離作業が進行している。剝片剝離は節理をうまく利用し、節理に対し順目である。例外的な加撃方向による剝離面として、面 2～3 があげられる。剝離の最も初期の段階に剝離された面であり、面 1 より先行する剝離面である可能性がある。

b. 作業面打撃方向（第142図）

作業面の打撃方向をグラフ化すると（第142図）となる。石核Ⅰ類は、全周より剝離作業を施



第142図 石核作業面剥離方向度数分布図

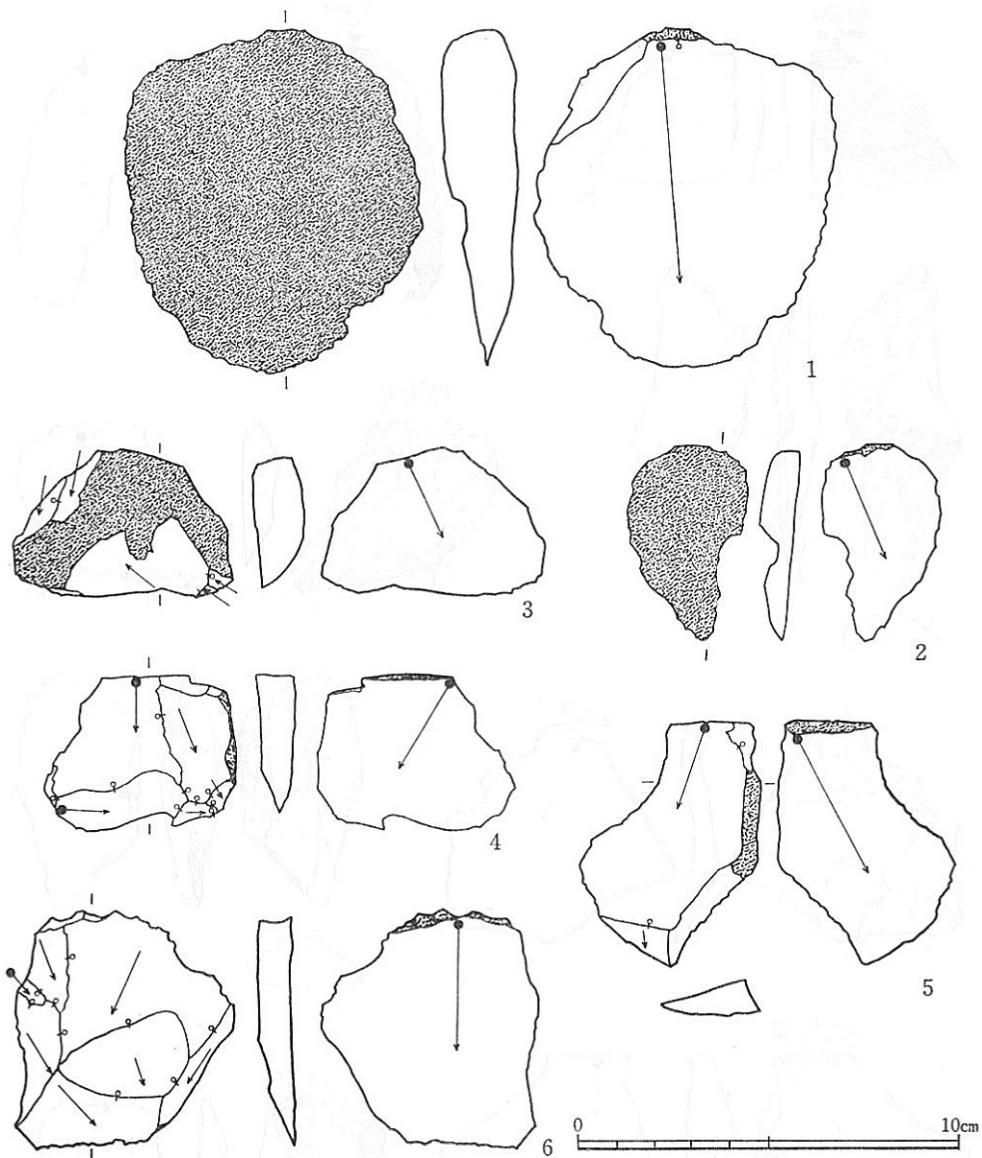
しているため、さしたる特徴はみられない。また a・b 方向に剥離が片寄るのは、最終剥離に近いからであろう。石核 II は、a 及び d～f 方向に剥離が集中しているが、それは長軸線を保つように両側縁より剥離作業を展開させているからである。その証拠に長軸線上である g・c 方向からはほとんど剥離は施されていない。石核 III は a 及び e 方向からの打撃が、群を抜いて多く、全体の中で 80% 以上の比率を占める。それは準備された打面からの加撃による a 方向からの剥離と、礫面上より打面に直交するような加撃による剥離とに 2 分され、またその剥離が打点を移動しながらも、並列ぎみに打面上を移動しているためである。

III 剥片について

当報告対象地区においては、473点の出土が確認され、その内計測可能な277点を資料操作の対象とした。また剥片と碎片との分離基準であるが、一括して長さ幅とも 1 cm 未満は碎片として資料操作の対象外とした。

(1) 剥片の分類

剥片の分類基準としては、打面が礫面よりなるものを I 類、打面が剥離平坦打面よりなるものを II 類とし、調整打面よりなるものを III 類とした。背面における礫面の有無によりさらに細分した。なお剥片の中には、板状の素材より剥離したと思われる数点の剥片が認められるが、点数が少なく、今回分類の対象外とした。以下分類を説明していきたい。



第143図 剥片 I 類剥離面構成図 (1/2)

I i 類：背面及び打面が全て礫面よりなる剥片である。

(第68図2・第76図44) (第143図1・2)

I ii 類：打面は礫面よりなるが、背面は礫面と剥離面より構成される剥片である。

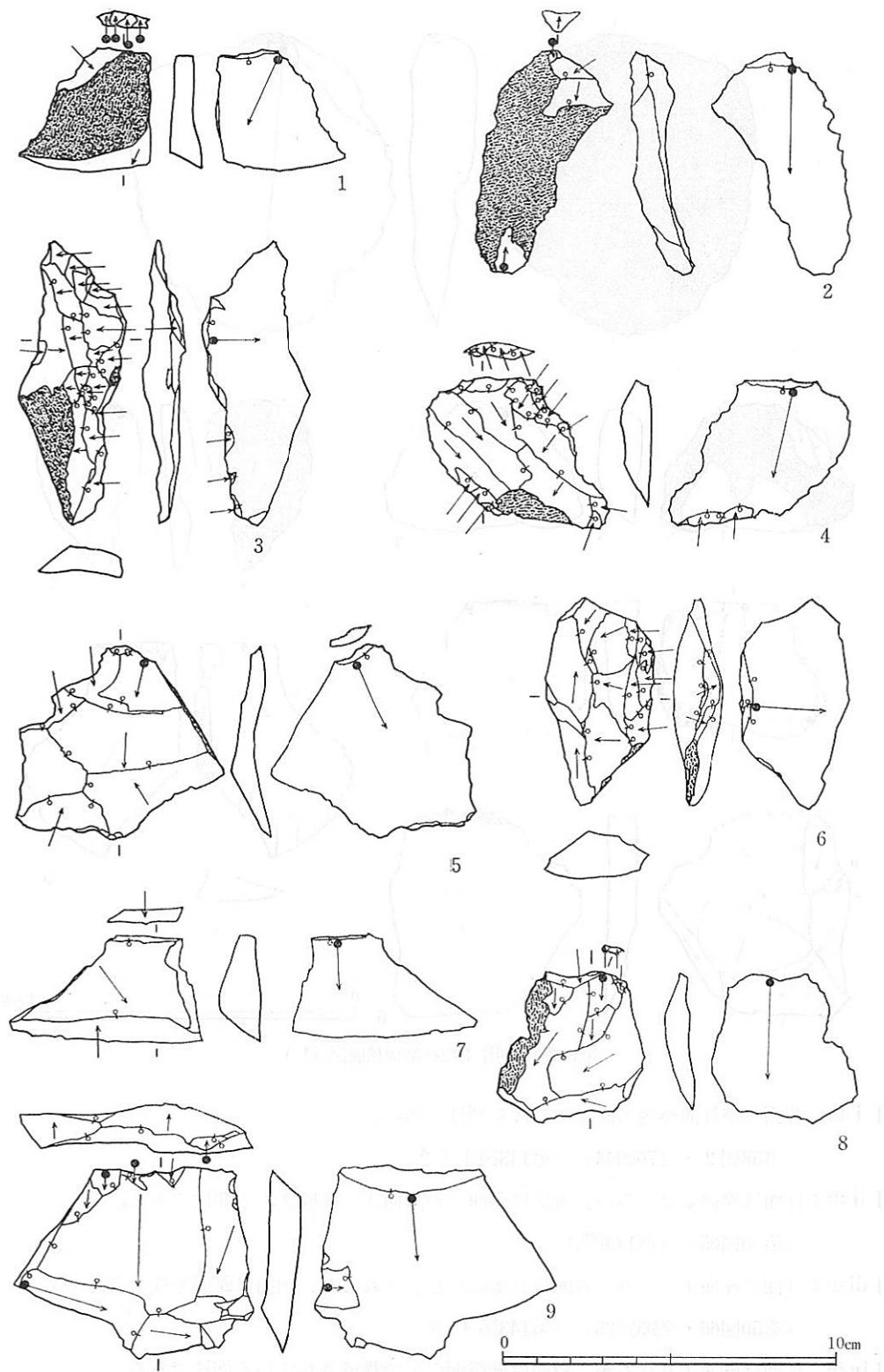
(第50図65) (第143図3)

I iii 類：打面は礫面よりなり、背面は剥離面で構成されるが、側面に礫面を残す剥片である。

(第50図66・第93図23) (第143図4・5)

I iv 類：打面は礫面よりなるが、背面は剥離面のみで構成されている剥片である。

(第77図45) (第143図6)



第144図 剥片Ⅱ・Ⅲ類剥離面構成図(12)

II ii類：打面は剥離平坦打面よりなり、背面は礫面と剥離面より構成される剝片である。

(第68図3) (第144図2)

II iii類：打面は平坦剥離打面よりなり、背面は剥離面で構成されるが、側面に礫面を残す剝片である。(第50図69・第82図3・第93図24) (第144図5)

II iv類：打面は剥離平坦打面よりなり、背面は剥離面のみで構成される剝片である。

(第51図71・第77図48・第130図2) (第144図7・9)

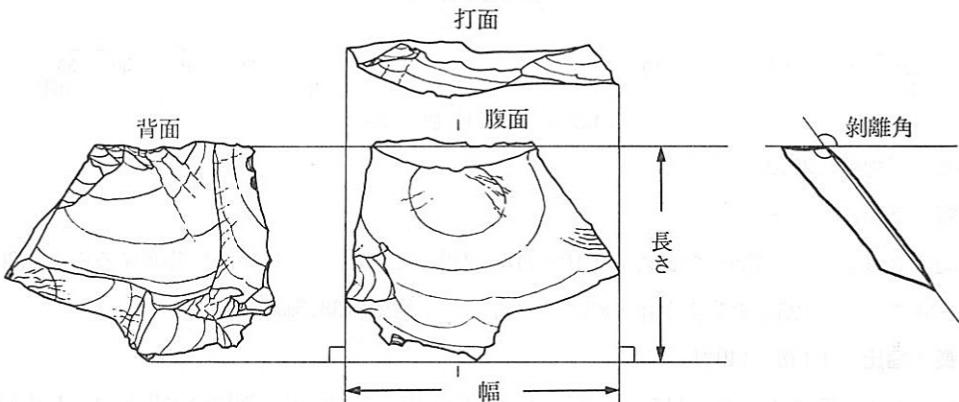
III 類：打面は調整打面よりなる剝片である。資料が少量であり、細分はこころみなかった。

(第50図67~68・第51図70・第64図4・第76図42・第82図5) (第144図1・3~4・6・8)

(2) 剥片の観察—数値的検討—

今回剝片の計算値的検討を行うにあたり、分析対象を剥離角・長さ・幅に限定し分析を行った。

(註7) また稿を進めるにあたり計測値の基準を(第145図)に示しておいた。以下順に説明していきたい。



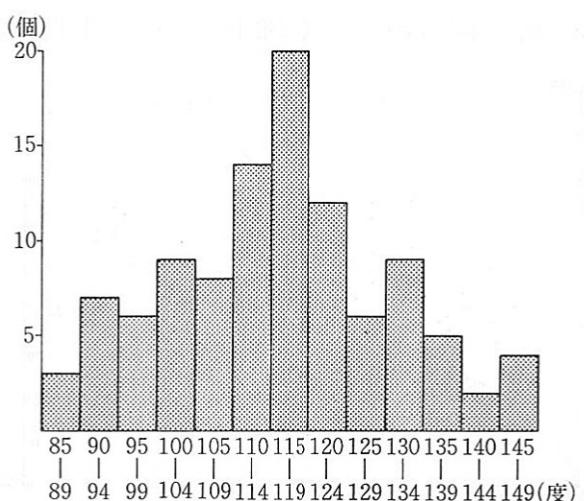
第145図 剥片計測位置模式図

a. 剥離角 (第146図)

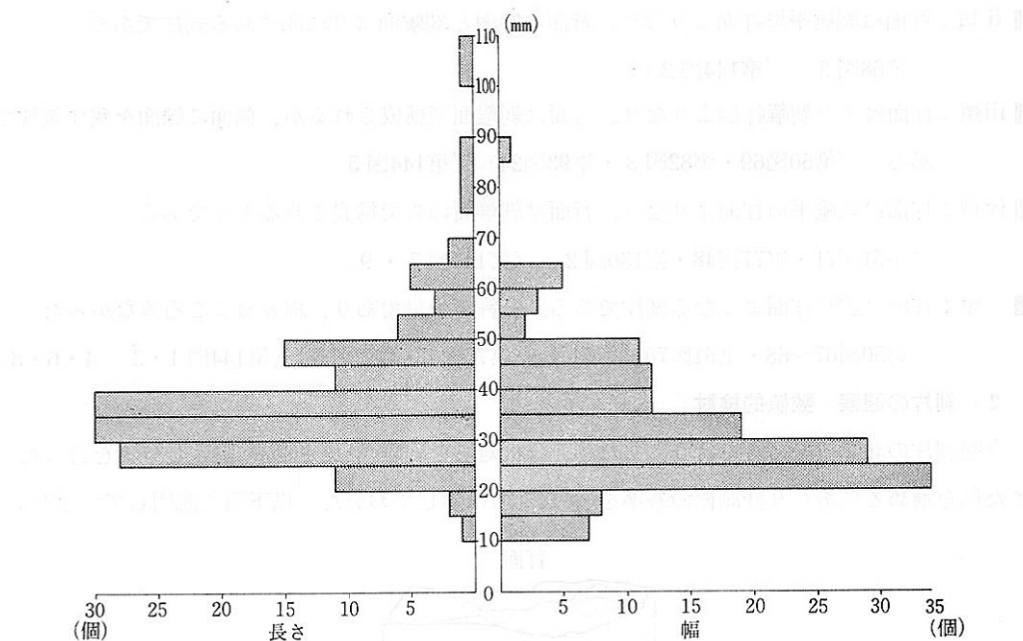
剝離角が計測できる剝片は、105点を数える。角度は、85~149度の間に分布する。集中的に分布するのは、110~124度の間であり、46点を数え、全体の44%を占める。また90度より120度までに分布する剝片は、全体の61%を占める。平均値は115.6度である。

d. 長さ (第147図)

長さが計測できる剝片は、142点を数える。長さは、10~90 mmの間に分布する。集中的に分布するのは、20~60 mmの間であり、117点を数え全体の82%を



第146図 剥片剝離角度分布図



第147図 剥片長幅値分布図

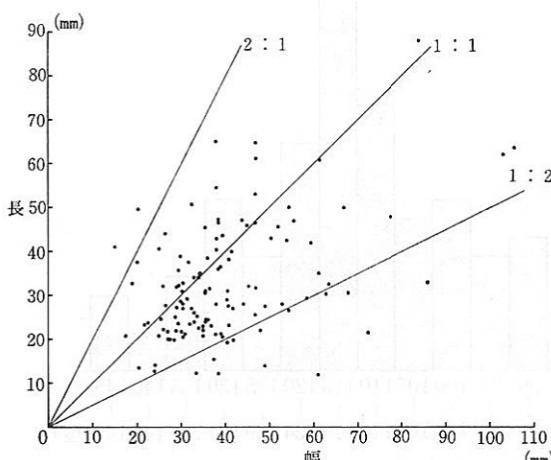
占める。平均値は32.2mmである。

c. 幅（第147図）

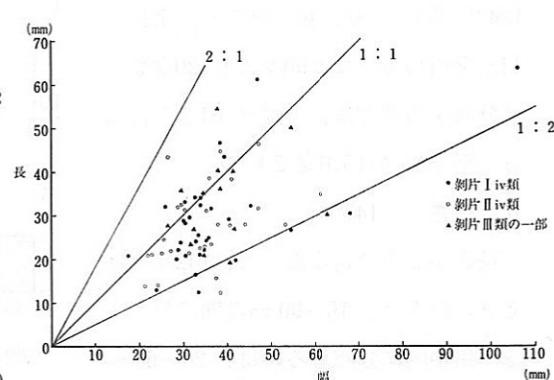
計測できる剥片は、150点を数える。10~110mmの間に分布する。集中的に分布するのは、20~50mmの間であり、125点を数え全体の83%を占める。平均値は38.5mmである。

b. 長／幅比（第148~149図）

長幅とともに計測できる剥片 117 点をグラフに表わした。その結果、剥片の主体が 1:1 の軸線より、1:2 の軸線の間にかたよっていることがわかる。これは剥片の幅が長さにくらべわずかに長い剥片が多いことを示している。また分布の中心は、長さ 2 cm より 4 cm 間、及び幅 2 cm より 5 cm 間の両者が交わる空間に集中している。同空間に集中しているのは、I iv、II iv 及び背面が



第148図 剥片長幅比分布図



第149図 目的剥片長幅比分布図

剥離面よりなるⅢ類の剝片であり、他の剝片にくらべれば比較的定形の剝片と言える。言い換えば剝片I iv、Ⅱ iv及びⅢ類の一部は目的剝片と言える。そのため他の剝片は、石核調整及び石器調整剝離により生じた剝片の可能性が強い。

IV まとめ

前項において、石核及び剝片の分析作業を行ったが、両者の成果を踏まえ、亀井遺跡における剝片生産技術を復原していきたい。

(1) 剥片剝離技術

亀井遺跡より現在までに確認できた石核は、わずかであるが、各々諸特徴を持ち、大別して石核Ⅰ～Ⅲまでに分類することができた。前項において各類の諸属性についてふれたが、とりまとめてみたい。

石核Ⅰは、形状より推定して、拳大の円礫あるいは亜角礫を素材として、主にその一面に作業面を設定し、礫面上あるいは、任意的な調整打面上を加撃し剝離作業を行っている。またその打点は、作業面の周囲を巡るよう移動している石核である。石核の構成を見れば、礫面（打面としての機能を有する）及び作業面という単純な石核である。石核Ⅰの剝離作業初期の状況をよく残しているものが、(第139図1)の石核である。1は、作業面を自然礫の一面に設定した後に、左右両方向からの加撃により、剝離作業を行っている。そして、剝離の最終段階には、剝離作業がゆきづまり理想的な新しい打撃点を探すため、まったく別の方向に打点が移動している痕跡を、よく留めている。そして、そのまま作業が進行していくと(第139図2・3)のような石核になるのであろう。言い換えると、石核Ⅰは、同一作業面内で剝離作業がゆきづまった場合、作業面再生作業簡略化のため便宜上打点を移動させたり、打面調整を行う石核とも言える。

石核Ⅱは、大型の剝片を素材としているところに、石核Ⅰと隔りがまず認められる。それは、作業面に残る素材の主要剝離面、及び打面上に残るネガティブな剝離面より推定される。すなわち石核Ⅱには、石核素材生産という工程が含まれているのである。また石核を作成できるような長幅9cmの大の大きさを有する(第143図1)のような剝片は、数点出土しているのみであり、またその剝片を生産できるような石核も確認されていない。そのため、石核Ⅱの素材は、他地域からの搬入によるものと考えるのが妥当であろう。石核Ⅱの作業面は、素材の主要剝離面側に設けられており、素材の背面を打面として両側縁より加撃している。またその剝離方向は、剝離方向度数分布図に示されたように石核の長軸線に直交するように剝離されていて、長軸線に平行するような加撃はさほど認められない。そのため残核の形態は不定形ぎみながらも、橢円形及び三角形状を呈する石核である。また視点を変えて石核Ⅱの形態及び技法を見れば、尖頭器状石器の未製品と類似する点が、しばしば見られる。(第135図)に示した尖頭器状石器未製品の製作工程を簡単に説明すれば、①まず腹面の成形がなされ、その後に②背面の礫面を削るよう剝離を施した後③両面に押圧剝離を施して仕上げている。このような技法により製作される石器であるため、

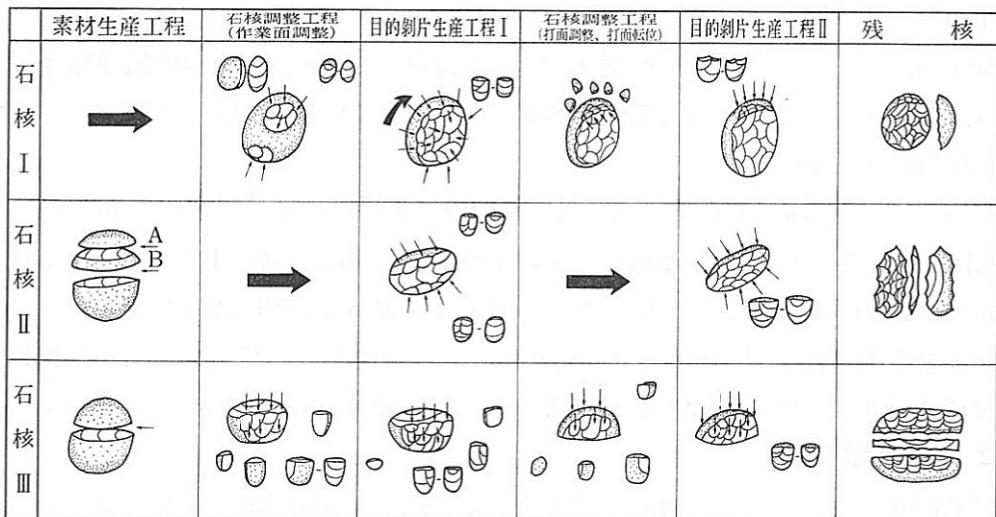
将来石核Ⅱの資料が増加した際には、尖頭器状石器の未製品との間に、分類しかねる資料が現わることが想定できる。そして、思考を進めると、石核Ⅱの残核類中に残核転用として、尖頭器状石器のツール・ブランクとなるものが存在する可能性を指摘できるだろうが、なにぶん資料が少量であり速断はできない。そのため可能性を指摘して今後の資料の増加を待つことにする。

石核Ⅲは、他の石核と異なり、石核素材製作時に設けた平坦な剥離面を打面として使用している石核である。その剥離は節理面に対し直交するように設けられている。石核の長さと幅は、平均すると4cmと10cmであり、その素材を想定すれば、かなりの長さと幅と厚さを持つ大きな剥片あるいは、分割礫を想定しなければならない。そして石核Ⅲの素材も石核Ⅱの素材と同様確認されている剥片の中には、その条件を満たす剥片は見あたらず、素材生産工程を他地域において行われでき上がった剥片、あるいは分割礫のみを搬入したものと考えられる。石核Ⅲの作業面は、一面あるいは表裏二面存在し、各々剥離平坦打面上及び下面の礫面上を打撃点として、節理に対し順次並列ぎみに剥離作業を行っている。またその剥離方向は剥離方向度数分布図(第142図)に示しているように、平坦打面に平行する長軸線に直交し、打面上、あるいは礫面上から打面転位を行いながら加撃されている。また石核の中には、同一作業面中で上・下両方向からの加撃による剥離が切り合う事例があり、石核Ⅲは、作業面再生作業を簡略化するための便宜上、打面転位を行っている石核といえる。その場合、同一作業面では同一方向の剥離で完結するのが、一般的なようである。(第141図)の石核の場合は、作業面を裏面に転位した事例である。また素材が異なれば、石核素材製作工程の便宜上打面が簡略化されることも考えられる。例えば、素材面に加撃点として理想的な平坦面が存在するような場合、改めて平坦な剥離打面を設けることは行わず、そのままその平坦面を使用する石核も、将来現われることも想定できるであろうが、同種の石核は、石核Ⅲの範疇の中でとらえられよう。石核Ⅲに類似する石核として、大福、桜ヶ丘第1地点土坑1等の遺跡より出土している石核の中に類似する石核が認められる。

以上のような剥片剥離技術を有する石核及び剥片の剥離工程を(第150図)に試みとして模式図にまとめてみた。この模式図は、現段階で推定できる工程図であり、今後の剥片剥離技術研究の一つの叩き台としたい。

剥片剥離生産の順序を、工程順に理解するために、工程を大別して、石核素材生産工程、石核調整工程(作業面調整)、目的剥片生産工程Ⅰ、石核調整工程(打面調整、打面転位)、目的剥片生産工程Ⅱ、合せて5工程に分割しましてみた。以下工程順に追ってみたい。

石核素材生産工程：素材生産工程を持つ石核は、Ⅱ及びⅢである。素材生産工程における資料は、現在確認できていない。そのため図中に表わした分割法は、石核に残る素材の剥離面より推定したものであり、今後の資料の増加を待ち検討していきたい。例えば、石核Ⅲの場合母岩を2分割するように表わしたが、3分割あるいは4分割する場合も考えられる。石核Ⅱの素材生産法は母岩に加撃を加え大型の剥片を生産する。図中においてはA、B2つの素材を生産するように表わしたが、それに規制されるものではない。



第150図 剥片生産工程模式図

石核調整工程（作業面調整）：作業面作成を意図した作業工程である。同工程の経過を経る石核は、石核Ⅰ、Ⅲである。石核Ⅰの場合、自然礫の一面を作業面に見て、礫面上を直に加撃する。その加撃により剥離される剥片は剥片Ⅰi類である。そして剥離が進行すると、Ⅰii～iii類の剥片が剥離されると考えられる。石核Ⅲの場合、石核素材生産時に剥離された平坦な面を打面として、打面上で並列するように打点を移動させながら、節理に対し順目により、作業面作成を意図した剥離作業を行う。この作業により生じる剥片は、剥片Ⅱi～iii類と考えられる。剥片Ⅱ類の平坦打面は、石核Ⅲの剥離平坦打面のなごりであろう。

目的剥片生産工程Ⅰ：この工程は、石器生産に使用する剥片の生産を意図した工程である。作業面上に存在する礫面を排除された石核Ⅰは、作業面の周囲を巡るように打点を移動させ剥離作業を進行させる。この作業は、作業面再生作業を便宜上省略化させている。またこの作業は、次の工程である石核調整が必要となるまで続けられる。この剥離作業より剥ぎ取られる剥離は、主に剥片Ⅰiv類と考えられる。石核Ⅱの場合、母岩より剥ぎ取られた剥片A、Bを石核素材としてその主要剥離面を作業面とし、左右両側縁より剥離作業を進める。そのため作業が進行すると橢円形の形態を呈する。この時剥離される剥片は、主にⅠiv類の剥片と考えられる。また素材Bより剥ぎ取られる剥片の中には、剥片Ⅱiv類も含まれる。作業面調整を終えた石核Ⅲは、同工程を継続するように剥離作業を続ける。この時剥ぎ取られる剥片は、主にⅡiv類と考えられる。

石核調整工程（打面調整、打面転位に伴う。）：目的剥片生産工程が進行すると、打面と作業面のなす角度はしだいに増大することとなり、剥離の進行に対して大きな障害となる。^(註12)そこでこの事態を回避するために、打面調整を施したり、作業面を他所に移動したりして、次の目的剥片生産工程に備える工程である。同工程を経る石核はⅠ及びⅢの石核である。石核Ⅰの場合は、打面部に任意的な調整剥離を施し打面を形成し剥片剥離を行ったり、(第139図4)の石核の事例の

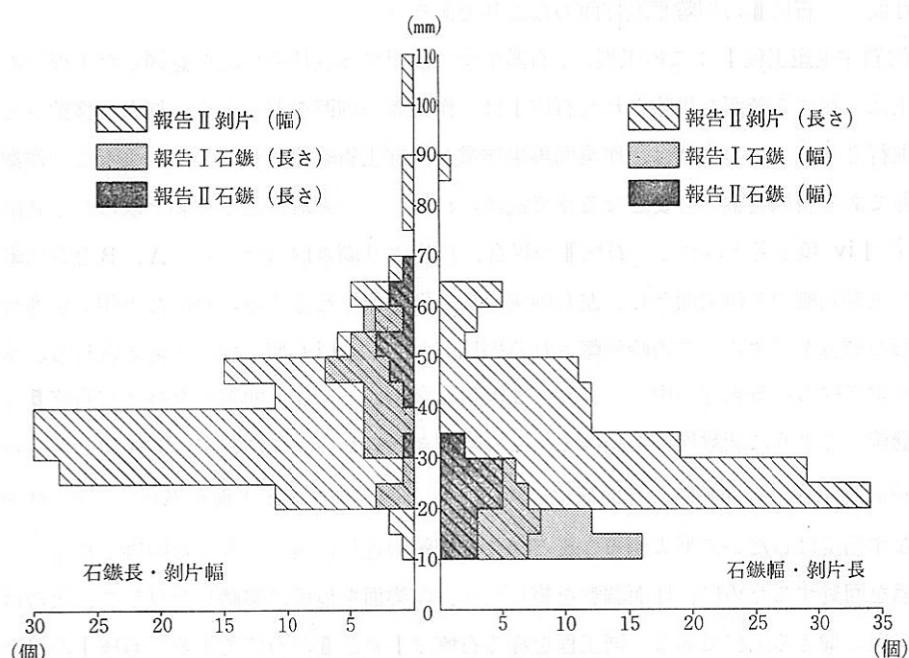
ように作業面を他所に転位し、目的剥片生産に備えている。また石核Ⅲの場合、同一作業面での剥離がゆきづまった場合、他所に作業面を転位し新たな作業面を形成する。その場合、旧作業面に對し、対称関係の位置を呈する位置に設置される事例が多い。作業面作成時には剥片 I i, ii類が主に剥ぎ取られるだろう。

目的剥片生産工程Ⅱ：石核調整工程を経た石核Ⅰ及びⅢの石核は、新たに設けた作業面及び調整打面上を加擊して剥離作業を進める。その時剥離される剥片は、石核Ⅰからは、剥片Ⅲ類が剥ぎ取られ、石核Ⅲより剥ぎ取られる剥片は、剥片 I iv類が主な剥片となるであろう。

以上亀井遺跡の剥片剥離技術についてかいつまんでまとめてみた。今後の課題として、詳細な時間的・空間的な検討が必要であるが報告Ⅲの整理作業を踏まえ今後検討を行っていきたい。

(2) 剥片の生産目的

剥片生産技術の復原で、石核同様に重要な資料操作対象となるのが剥片である。これらの剥片は、長幅の大きさにおいて石核の作業面の最大長幅内にほとんど納まり、亀井遺跡より出土した石核Ⅰ～Ⅲにより生産された剥片と思われる。また剥片の生産目的についてであるが、剥片と石器の関係を表わす一つの試みとして(第151図)を作成してみた。(第151図)は、剥片の幅と石鎌の長さの関係と、剥片の長さと石鎌の幅を表わした図である。この作業には、一つの前提条件がある。それは、剥片より石鎌を製作する場合、剥片の幅を石鎌の長さに置き、また剥片の長さを石鎌の幅に置きかえて石鎌を製作することが一般的ではないか、ということである。それは、石鎌に残る素材の剥離面を観察すればわかる。例えば、(第52図74・77、第81図50)の石鎌に残る



第151図 石鎌、剥片長幅分布図

素材の剝離面の打点の位置を推定すれば、石鎌の長軸と打点の関係は直交しているのである。この現象は、生産される剝片の中で横長状の剝片が多いためと言える。また石鎌を資料操作するにあたり、今回の報告点数では量的に少量であり、報告Ⅰの資料を加え検討することにした。^(註13) 2つの計測値より読みとれる事項について述べれば、石鎌の長・幅値は、剝片の長・幅値の中に納まっていることである。言い換えれば、これらの剝片より石鎌を製作することができるということを示している。もっとも剝片より石鎌を製作する時に調整剝離を施すために、若干石鎌の数値に上乗せしなければ本来の石鎌を製作した剝片の数値を求ることはできないが、これらの剝片より石鎌を製作したという仮説を否定することはできないであろう。そしてこれらの剝片を生産した石核Ⅰ～Ⅲは、石鎌を生産した石核と言える。また石鎌と同様に石錐に關しても、この石核より生産されたものと考えて差し支へはないであろう。

以上のように、亀井遺跡より出土した石核は、石鎌及び石錐を生産するための石核であることが判明した。またそのことより、亀井遺跡より出土した石核では生産できない石器の存在が、明らかになる。例えば石槍等の大型石器があげられる。整理作業途上の現段階において、石槍を製作できるような条件を満たす剝片は確認されていないため、他地域よりの搬入品と考えねばならない。それは、亀井遺跡の石器生産の二面性を肯定するものであり、亀井遺跡を含めた河内の弥生時代の諸集落間と、サヌカイトの原産地である二上山地域との比較検討が必要となるであろう。^(註14) これは、弥生時代の生産・流通・分配等の実態を解明するにあたり、非常に有効な方法となるであろう。またこの作業を進めるにあたり、石槍等を中心とした、サヌカイトの科学的な原産地同定が有効な手段といえる。^(註15)

最後に、本稿をまとめるにあたり、御教示を賜わった佐藤良二、森本 晋、蜂屋晴美、山中一郎の各氏に、末筆ながら記して感謝したい。

(註)

註1 酒井龍一「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』第21巻第2号 1974

「弥生社会の体系的理解に関する認識論」『大阪文化誌』第2巻第1号 1976

「弥生中期社会の形成—畿内社会の形成とその構造」『歴史公論』3.1978

「亀井遺跡の石器生産—畿内・弥生集落における一様相一」『亀井・城山』

大阪文化財センター 1980

註2 山中一郎「森の宮遺跡出土の石器について」『森の宮遺跡』難波宮址顕彰会 1978

森本 晋・蜂屋晴美「喜志遺跡79-1区土壇3の遺物について」喜志遺跡・東阪田遺跡調査概要Ⅳ

大阪府教育委員会 1981

註3 剥片剝離作業面については、略称として、“作業面”と呼ぶことにする。

註4 これらの表示法については、松沢氏により考察されている。

松沢亜生「石器研究におけるテクノロジーの一方向」『考古学手帖』 7・1959

「石器研究におけるテクノロジーの一方向(Ⅱ)」『考古学手帖』 12・1960

註5 剥離方向度数分布図については、『二上山桜ヶ丘遺跡』に用いられているものを参考にした。

松藤和人ほか『二上山・桜ヶ丘遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1979

- 註6 節理と石器の関係については、松藤和人氏による分析研究があり、その用語（順目・半順目・逆目）に準ずる。
- 松藤和人「再び“瀬戸内技法”について」『二上山・桜ヶ丘遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
1979
- 註7 計測値の基準は、林謙作氏の基準に準ずる。つまり、剥離角は、打面と打面から下ろした直線上での剥離の末端が打点をはさんでなす角度。長さは、打面の両端を結ぶ線上に上下両端を投射した距離。幅は、剥片の左右両端でもっとも飛び出した部分に打面からおろした垂線のあいだの距離である。
- 林謙作「第3地点第4文化層の出土遺物」「星野遺跡—朽木県星野遺跡
第3次発掘調査報告一」ニューサイエンス社 1970
- 註8 橋本正「石器の機能と技術」「日本の旧石器文化」1総論編 雄山閣 1975
- 註9 近く報告予定である、近畿道亀井遺跡より出土している石核Ⅲも、計測の範疇に入れた。
- 註10 近く報告予定である、近畿道亀井遺跡に、その類例が認められる。
- 註11 増田一裕「Ⅲ遺構と遺物—5 大幅遺跡の石器」「大福遺跡」奈良県立橿原考古学研究所 1978
- 麻柄一志 古森政次「第4章出土遺物、第2節土坑1出土遺物」「二上山・桜ヶ丘遺跡」奈良県立
橿原考古学研究所 1979
- 註12 柳田俊雄・藤原妃敏「瀬戸内技法と石刃技法—調査技術のもつ意味—」「旧石器考古学」23 旧石器文化談話会 1981
- 註13 高島徹・尾谷雅彦・寺川史郎・金光正裕・畠暢子・清原弘美「第V章—遺構及び遺物」「亀井・城山」大阪文化財センター 1980
- 註14 酒井龍一「亀井遺跡の石器生産—畿内・弥生集落における一様相—」「亀井・城山」大阪文化財
センター 1980
- 註15 二上山地域には、石槍の未製品を多量に出土する石器製作遺跡が確認されていて、今後同種の遺跡
出土石器との比較、検討が必要であろう。
- 高田勉「中谷遺跡」「ふたがみ」同志社大学旧石器文化談話会 1974

第9表 石核計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	出土地点	備考
第84図1・第139図2	413	I	78.85	55	442	サスカイト	H1、N7		
第138図3・第139図1	748	I	77.78	41	304	サスカイト	H4、SD-09E		
第138図2・第139図4		I	78.61	68	389	サスカイト	H7、SD-11E下層		
第138図1・第139図3	417	I	67.66	36	172	サスカイト	H7、SD-11E下層		
第81図1・第140図2	414	II	82.54	24	891	サスカイト	H1ブロック土層最下層		
第49図IV・第140図3	416	II	107.72	22	1.5	サスカイト	H2、SD-03		
第81図2・第140図1	473	II	93.56	18	8.6	サスカイト	H1、ブロック土上面		
第49図63・第141図	178	III	93.46	15	6.1	サスカイト	H1、SD-03		

第10表 剥片 I i類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	剥離角	重さ	石質	出土地点	備考
	630	50.6	32.4	7.8	143°	11.8	サスカイト	H1、ブロック土層	
第76図47・第143図1	682	88	84	20.7		149.7	サスカイト	H1、SX-02	
第68図2・第143図2	726			10.0		14.8	サスカイト	H1、SX-01	

第11表 剥片 I ii類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	剥離角	重さ	石質	出土地点	備考
第50図65・第143図3	012	42.5	59.5	12.1		28.5	サスカイト	H1、SD-03	
	257	20.3	49.5	7.3	126°		サスカイト	H1、SD-06	
	338	21.7	30.1	6.7	118°	4.5	サスカイト	H1、SD-04	
	452	31.1	40.4	10.2	132°	10.4	サスカイト	H1、SX-02	
	561	20.7	48.0	4.0		3.9	サスカイト	H1	

第12表 剥片 I iii類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	剥離角	重さ	石質	出土地点	備考
第50図66・第143図4	018	43	50.6	11.4	87°	23.7	サスカイト	H1、SD-03	
第93図23・第143図5	350	64.9	47.5	13.3		25.3	サスカイト	H1、SD-02	
	647	21.3	38	8.1	118°	4.8	サスカイト	H1	

第76図43

677	62	102.9	16.3	111°	88.3	サスカイト	H1、SX-02	調整痕あり
-----	----	-------	------	------	------	-------	----------	-------

第13表 剥片 I iv類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	剥離角	重さ	石質	出土地点	備考
	039	30.6	68		53°	23.8	サスカイト	H1、SD-03	
	128	28.9	30	5.0		2.3	サスカイト	H1、SD-03	
	128	22.4	25	4.9		2.8	サスカイト	H1、SD-03	
	128	25.7	34.5	4.1	128°		サスカイト	H1、SD-03	
	135	23.7	29.5				サスカイト	H1、SD-03	
	139	16	32.9	9.7	110°	4.2	サスカイト	H1、SD-03	
	144	29.5	31.9	8.4		8.1	サスカイト	H1、SD-03	

	145	20.6	30.6	6.5	87°	3.1	サヌカイト	H 1、 S D-03	
	155	46.4	38.5	9.5	86°	6.6	サヌカイト	H 1、 S D-03	
	157	21.8	35	7.4	123°	3.8	サヌカイト	H 1、 S D-03	
	183			8.5		8.9	サヌカイト	H 1、 S D-03	
	199	23.7	32.7	5.0	96°	3.5	サヌカイト	H 1、 S D-04	
	254	25.1	33.6	5.8	124°	3.7	サヌカイト	H 1、 S D-06	
	280	20	28.6	5.6	93°	2.7	サヌカイト	H 1、 S D-06	
	290	26.5	54.5	8.3	115°	8.8	サヌカイト	H 1、 S D-06	
	291			4.2		2.9	サヌカイト	H 1、 S D-06	
	313	33.9	33.1	7.5	127°	5.1	サヌカイト	H 1、 S D-06	
	334	23.9	35.5	8.7	139°	6.4	サヌカイト	H 1、 S D-04	
	336	12.6	33.5	9.4	116°	5.0	サヌカイト	H 1、 S D-04	
	339	28	28	7.5	118°	4.8	サヌカイト	H 1、 S D-04	
	428	22	29.2	14.1	55°	1.6	サヌカイト	H 1、 S X-01	
	433	28.9	40.3	9.8	92°	13.2	サヌカイト	H 1、 S X-01	
	435	24.4	36.1	4.8	111°	3.6	サヌカイト	H 1、 S X-01	
	436	33	30.5	6.6	107°	5.8	サヌカイト	H 1、 S X-01	
	441	43.4	39.5	3.8	91°	7.0	サヌカイト	H 1、 S X-01	
	451	63.3	105.5	15.8	88°	16.9	サヌカイト	H 1、 S X-02	
	455	33.7	34.2	11.4	83°	9.7	サヌカイト	H 1、 S X-02	
	459	20.7	17.3	3.3	143°	1.4	サヌカイト	H 1、 S X-02	
	465	30.6	28.4	3.4			サヌカイト	H 1、 S X-02	
	484			11.3		34.0	サヌカイト	H 1、 S X-02	
	484					68.2	サヌカイト	H 1、 S X-02	
	504	19.4	41.8	8.0	121°	6.7	サヌカイト	H 1	
	527	32.2	26	5.3	100°	4.7	サヌカイト	H 1	
	554			8.1			サヌカイト	H 1	
	588	32.3	45.5	3.5	127°	3.9	サヌカイト	H 1	
	597	21.3	34.1	7.6	115°	5.2	サヌカイト	H 1	
	603				6.3	136°	6.4	サヌカイト	H 1
	633						サヌカイト	H 1	
	638	31.5	36.6	5.2	102°	6.1	サヌカイト	H 1	
第 77 図45・第143図6	681	61	46.9	10.6		34.4	サヌカイト	H 1、 S X-02	

第14表 剥片 II ii類計測一覧表 (m/m · g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	剝離角	重さ	石質	出土土地点	備考
第 68 図 3・第144図2	136	28	35.5	4.0	121°		サヌカイト	H 1、 S D-03	
	156	24.3	36.1	9.6	110°	14.1	サヌカイト	H 1、 S D-03	
	345			4.7		2.9	サヌカイト	H 1、 S D-02	
	420	67.5	41.0	13.0	115°	16.0	サヌカイト	H 1、 S X-01	
	563			4.7		2.9	サヌカイト	H 1	
	568			9.7			サヌカイト	H 1	
	611			8.1		3.6	サヌカイト	H 1	
	637	22.3	25.9	25	77°		サヌカイト	H 1	

第15表 剥片Ⅱiii類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	剝離角	重さ	石質	出土地点	備考
第50図69	020	64.9	38	8.4	101°	22.0	サヌカイト	H 1、SD-03	
	048	46.9	44.1	5.6	115°	10.2	サヌカイト	H 1、SD-03	
	052	25.0	28.4	2.1	52°	1.2	サヌカイト	H 1、SD-03	
	057	37.3	31.7	6.5	127°	4.7	サヌカイト	H 1、SD-03	
	068	25.6	46.7	8.2	136°	10.5	サヌカイト	H 1、SD-03	
	090	41.2	14.9	9.0		11.2	サヌカイト	H 1、SD-03	
	101	13.4	48.3	9.4	104°	6.8	サヌカイト	H 1、SD-03	
	104	40.5	25	6	101°	4.8	サヌカイト	H 1、SD-03	
	121	47.7	35.3	9.9	101°	8.9	サヌカイト	H 1、SD-03	
	281	26.8	30.5	7.1	95°	3.2	サヌカイト	H 1、SD-06	
第93図24・第144図5	341	60.5	61.7	7.8		22.2	サヌカイト	H 1、SD-02	調整痕あり
	420						サヌカイト	H 1、SX-01	
	442	35.5	35.3	3.8	147°	4.8	サヌカイト	H 1、SX-01	
第82図3	472	47.1	55.3	16.8	124°	28.2	サヌカイト	H 1、ブロック土層	調整痕あり
第131図3	476	62.0	64.0	12.8	105°	46.5	サヌカイト	H 1、旧平野川包含層	調整痕あり
	479	39.0	30.2	6.9	116°	6.1	サヌカイト	H 1、ブロック土層	
	492	27.1	29.4	6.6	99°	7.5	サヌカイト	H 1、ブロック土層	
	567			7.1	86°	6.1	サヌカイト	H 1	
	614	22.1	48	5.7	134°	4.7	サヌカイト	H 1	
	652	23.2	41.2	8.4	73°	6.7	サヌカイト	H 1	
	696	53.1	47.6	13.6	114°	34.6	サヌカイト	H 1、SX-01	
	790						サヌカイト	H 1、ブロック土層	

第16表 剥片Ⅱiv類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	剝離角	重さ	石質	出土地点	備考
第51図71・第144図7	017	32.0	58.0	12.0	97°		サヌカイト	H 1、SD-03	
	032	38.3	41	6.3	116°	6.9	サヌカイト	H 1、SD-03	
	034	38.6	35.8	15.0	115°	5.7	サヌカイト	H 1、SD-03	
	058	21.9	27	6.3	98°	3.1	サヌカイト	H 1、SD-03	
	067	28.7	53.3	11.6	120°	20.6	サヌカイト	H 1、SD-03	
	111	15.5	37.4	5.1	120°	3.3	サヌカイト	H 1、SD-03	
	122	22.2	31.2	3.6	56°	2.2	サヌカイト	H 1、SD-03	
	131						サヌカイト	H 1、SD-03	
	134	35	61.3	9.7		16.5	サヌカイト	H 1、SD-03	
	136	26.4	26.3	3.1	114°		サヌカイト	H 1、SD-03	
	138	20.9	22	3.9	145°	1.6	サヌカイト	H 1、SD-03	
	151	44.8	38.5	10.0	121°	12.9	サヌカイト	H 1、SD-03	
	153	31	35.3	6.1	118°		サヌカイト	H 1、SD-03	
	179	24.5	25.5	5.5	131°	2.3	サヌカイト	H 1、SD-03	
	195	44.5	49.6	8.7	108°	19.0	サヌカイト	H 1、SD-04	
	267	22.8	34	4.2	111°	3.9	サヌカイト	H 1、SD-06	
	279	25.6	28.8	3.3	122°	2.4	サヌカイト	H 1、SD-06	
	314			7.0		7.1	サヌカイト	H 1、SD-06	

	331	44	26.5	9.0	127°	8.9	サヌカイト	H 1、S D-04
	362	29.0	22.7	3.4	132°	1.4	サヌカイト	H 1、S D-02
	427	31.7	47.2	6.7	107°	5.7	サヌカイト	H 1、S X-01
第 77 図48・第144図9	454	56.0	71.0	10.0	128°		サヌカイト	H 1、S X-02
第130図 2	475					88.8	サヌカイト	H 1、旧平野川
	482	32.5	29.3	5.0	130°	4.4	サヌカイト	H 1、ブロック土層
	485	25.8	33.2	4.1	103°	3.4	サヌカイト	H 2、旧平野川
	489	28	44.2	8.7	78°	9.8	サヌカイト	H 1
	506	27.8	40.7	5.0	101°	4.9	サヌカイト	H 2
	521	32.5	29.3	5.1	107°	2.9	サヌカイト	H 1
	526	23.1	34.8	5.3	117°	4.9	サヌカイト	H 1
	553	28	27.2	8.2	92°	6.8	サヌカイト	H 1
	573	14	24	5.4	138°	1.9	サヌカイト	H 1
	599	13.7	20.4	5.1	130°	1.5	サヌカイト	H 1
	602	30.8	30.8	5.1	108°	4.4	サヌカイト	H 1
	605	12.3	38.5	5.6	112°	3.9	サヌカイト	H 1
	670	23	37	6.4	47°	4.7	サヌカイト	H 1、S X-01
	676	21.2	25	5.0	91°	2.8	サヌカイト	H 1、S X-02
	685	15.2	27	5.1	112°	1.7	サヌカイト	H 1、S X-02
第 77 図46	796	40.0	78.0	8.0	115°		サヌカイト	H 1、S X-02

第17表 剥片Ⅲ類計測測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	剥離角	重さ	石質	出土地点	備考
第 50 図67	013	49.7	54.4	12.9	134°	30.9	サヌカイト	H 1、S D-03	調整痕あり
第 51 図70・第144図6	014	32.5	63.4	19.4	123°	25.8	サヌカイト	H 1、S D-03	
第 50 図68・第144図3	015	33.0	86.0	10.0	85°		サヌカイト	H 1、S D-03	
	035	30.6	62.8	8.2	107°	9.4	サヌカイト	H 1、S D-03	
	107	28	32.7	4.2	116°	3.7	サヌカイト	H 1、S D-03	
	129	21.4	39	4.5	116°	3.5	サヌカイト	H 1、S D-03	
	130	20.4	39.6	7.1	137°	9.6	サヌカイト	H 1、S D-03	
	136		5.8			4.8	サヌカイト	H 1、S D-03	
	159	48.5	28.3	5.9	108°		サヌカイト	H 1、S D-03	
	180	37.5	20.4	8.1	132°	9.5	サヌカイト	H 1、S D-03	
	194	19.3	40.6	11.8	84°	6.7	サヌカイト	H 1、S D-04	
	265	19.8	27	2.8	112°	1.3	サヌカイト	H 1、S D-06	
	267	22.8	34	4.2	111°	3.9	サヌカイト	H 1、S D-06	
	270	19.7	28	5.1	148°	2.7	サヌカイト	H 1、S D-06	
	288	36	38.3	9.2	94°	11.0	サヌカイト	H 1、S D-06	
第 68 図 4・第144図4	419	45.0	54.5	9.5	115°		サヌカイト	H 1、S X-01	調整痕あり
	445	23.3	31.7	5.8	118°	3.8	サヌカイト	H 1、S X-01	
第 82 図 5・第144図1	477	36.6	39.2			11.8	サヌカイト	H 1、ブロック土層	
	478	40.6	38.5	8.5	99°	20.5	サヌカイト	H 1、ブロック土層	
	522	27	41.5	3.1	139°	2.8	サヌカイト	H 1	
	576	27.5	25.4	3.8	123°	2.2	サヌカイト	H 1	
	577	34.5	34.8	6.5	93°	5.4	サヌカイト	H 1	

	598	21.7	35	5.2	117°	3.8	サヌカイト	H 1	
	601	54.6	38	5.6	117°	6.7	サヌカイト	H 1	
	613	35.3	29.5	4.9	110°	3.6	サヌカイト	H 1	
第 76 図42・第144図8	679	53.1	47.6	13.5	114°	34.6	サヌカイト	H 1、S X-02	

第18表 その他の剥片計測一覧表 (m/m · g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	剝離角	重さ	石質	出土地点	備考
第 51 図72	019	32.0	79.0		146°		サヌカイト	H 1、S D-03	
	041	26.9	24	20.1		21.8	サヌカイト	H 1、S D-03	
	042			6.3			サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	049			4.0			サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	051	20	29.8	7.4		2.4	サヌカイト	H 1、S D-03	
	059			8.5		3.0	サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	061			5.0		1.6	サヌカイト	H 1、S D-30	折断面が存在し計測不能
	081	18	36.8	8.2	121°	4.4	サヌカイト	H 1、S D-03	
	093			9.5		4.6	サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	099			8.2		8.7	サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
第 51 図73	105	12.0	61.0	18.0	149°		サヌカイト	H 1、S D-03	
	118			11.4		5.0	サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	126			11.1		9.0	サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	127	22.6	32.2	6.3		3.8	サヌカイト	H 1、S D-03	
	140			8.8		7.4	サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	141	35.2	29.6	5.6		5.1	サヌカイト	H 1、S D-03	
	142	43.3	33.3	5.8		6.9	サヌカイト	H 1、S D-03	
	154			4.0		2.8	サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	176			17.8		6.5	サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	181			4.3		2.6	サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	182			2.6		1.6	サヌカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	217			11.1		5.2	サヌカイト	H 1、S D-05	折断面が存在し計測不能
	318			14.7		26.7	ハリ質安山岩	H 1、S D-06	折断面が存在し計測不能
	450	31	29.6	8.4		10.1	サヌカイト	H 1、S X-01	
第130図 1	473	41.0	96.0	16.0	137°	56.0	サヌカイト	H 1、旧平野川包含層	
	474	50.0	72.0	15.0	107°	102.2	サヌカイト	H 1、旧平野川包含層	
第131図 4	478			9.4			サヌカイト	H 1、旧平野川包含層	折断面が存在し計測不能
	479	26.8	22.6	6.8		3.5	サヌカイト	H 1、旧平野川包含層	
	480	26.8	48.8	11.4		11.4	サヌカイト	H 1、ブロック土層	
	483			4.8		3.1	サヌカイト	H 1、ブロック土層	折断面が存在し計測不能
	484			13.4			ハリ質安山岩	H 1、ブロック土層	折断面が存在し計測不能
	486			3.9		2.8	サヌカイト	H 1、ブロック土層	折断面が存在し計測不能
	491			4.0		4.3	サヌカイト	H 1、ブロック土層	折断面が存在し計測不能
	550			9.2		3.3	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	551			11.1		4.9	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	554	49.5	35			13.5	サヌカイト	H 1	
	556			3.8		1.6	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	558			4.5		2.1	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能

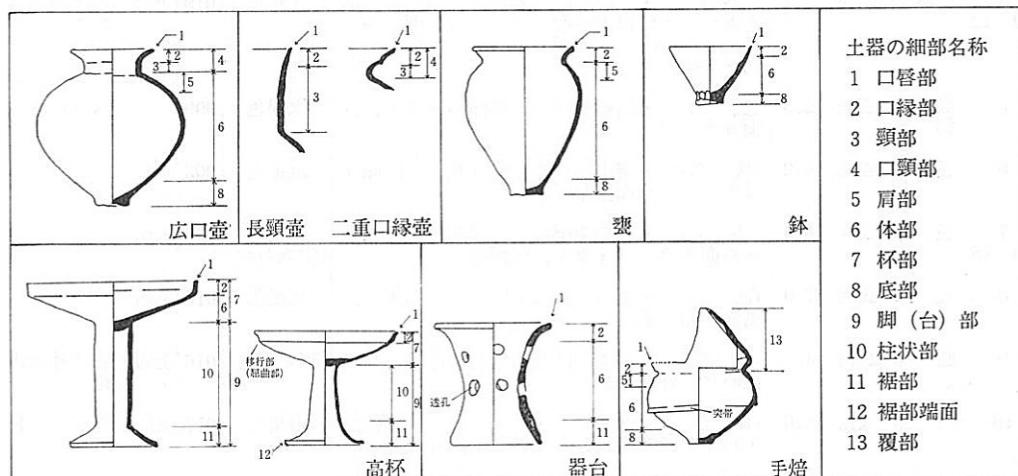
	570		2.5		0.9	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	583	26.8	22.6	2.2	1.2	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	587		5.9		4.9	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	604		8.1		4.4	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	606	28.3	23.6	4.6	143°	2.6	サヌカイト	H 1
	610		4.1		2.8	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	617		4.8		2.5	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
第 61 図	625	63.5	41.0	30.0	113°		サヌカイト	H 1、 S D-08
	629		6.2		6.9	サヌカイト	H 2	折断面が存在し計測不能
	635	21.8	20.3	3.0	123°	1.1	サヌカイト	H 1
	645		4.9		2.0	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	650		11.2		4.4	サヌカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	443		20.3		98.5	サヌカイト	H 1、 S X-01	
	471	50	67		124°	41.8	サヌカイト	H 1 旧平野川包含層
	545		10.2		20.4	サヌカイト	H 1	
	555	29.5	58.6	12.4	102°	26.7	サヌカイト	H 1
第 77 図 47	678	47.5	76.0	11.0	113°		サヌカイト	H 1、 S D-X02

第19表 石鎚計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	重さ	石質	出土地点	備考
第108図 86	169	54.2	22.0	9.9	10.5	サヌカイト	H 1、 S D-04	未製品
第 67 図 8	424	43.0	26.7	9.1	12.0	サヌカイト	H 1、 S X-01	未製品
第 69 図 7	464	48.1	31.2	11.7	17.3	サヌカイト	H 1 ブロック土層	未製品
第132図 6	467	64.4	29.7	12.3	23.5	サヌカイト	旧平野川	未製品
第132図 5	468	48.2	27.4	8.9	12.3	サヌカイト	旧平野川	未製品
第 69 図 6	669	69.0	31.4	20.1	37.8	サヌカイト	H 1、 S X-01	未製品
第 69 図 9	797	59.0	26.5	16.8	19.0	サヌカイト	H 1、 S X-01	未製品
第 52 図 74	002	55.1	16.1	8.3	6.2	サヌカイト	H 1、 S D-03	
第 52 図 77	003	39.0	23.1	4.6	3.4	サヌカイト	H 1、 S D-03	
第 52 図 76	011	29.0	13.5	14.0	5.7	サヌカイト	H 1、 S D-03	
第 52 図 75	019	50.6	12.3	5.7	2.8	サヌカイト	H 1、 S D-03	
第120図 46	310	55.1	15.0	4.7	3.6	サヌカイト	H 2、 S D-06	
第 69 図 10	421	32.3	16.0	4.0	1.9	サヌカイト	H 1、 S X-01 6号主体部	
第 78 図 41	457	51.5	24.0	6.9	6.0	サヌカイト	H 1、 S X-02 2号主体部	
第 83 図 7	475	60.0	24.0	9.7	18.0	サヌカイト	H 1、 ブロック土層	
第 70 図 14	680	61.5	23.1	6.7	12.6	泥岩	H 1、 S X-01	
第 78 図 50	675	36.5	26.1	3.9	3.8	サヌカイト	H 1、 S X-01	磨製石鎚
第 78 図 49	469	41.8	11.6	6.5	3.7	サヌカイト	H 1、 S X-02	

第2節 出土土器の観察

亀井（KM-H 1・2）遺跡出土土器のうち実測図を掲載し、かつ観察結果をここに報告する土器は280個体である。観察結果は以下に示す規準・要領で、表20～28に一括してまとめている。なお掲載土器の時代的内訳は、弥生土器273、土師器7である。



第152図 土器細部の名称

<観察事項と記載方法について>

(番号) 上段は遺構ごとの実測図番号。下段は左に図版番号、右に遺物写真番号を付す。

(器種) 壺の場合、広口壺・細頸壺・長頸壺・短頸壺・無頸壺等と機能差に由来すると思われる形態的特徴をメルクマールとする従来の呼称に拠っている。

(法量) 器高・口径・体部径・底径をcmで表示。

(調整・成形法) ○で項目を設けている。

(形態的特徴) ●で項目を設けている。文様も含む。

(色調) 外面の色調をしるしている。また、生駒西麓製の特徴をもつ場合はそれを明示した。

(土器番号) 土器それ自体にネーミングしている番号、及び原図番号である。

(備考) スス付着、黒斑の有無及び出土層位、取り上げ番号を記す。

次に、土器の細部名称については代表する各器種ごとに第152図に示している。

註1 観察にあたって以下の文献を参考としておこなっている。寺沢・森下・藤田・宮崎・松本「出土土器の観察報告」(『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書 第34集) 1980

第20表 落ち込み1出土土器観察表

項目番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
1 29-6	壺	口径 25.1	(口頸部) • 付加状口縁。口縁部ナデ。頸部に櫛描直線文	暗褐色	012	上層 黒斑あり
2 29-8	壺	口径 19.4	(口頸部) • 付加状口縁。口縁部ヨコナデ。頸部タテハケ	茶褐色	014	上層
3 29-9	鉢	口径 19.0	(口頸部) • 口唇円頭状。櫛描直線文4帯。内面ヨコヘラミガキ	茶褐色	013	上層 内外面スス付着
4 29-12	鉢	口径 23.2	(口頸部) • ぐの字状に外反し、口唇部に面をもつ。口縁内外面ヨコナデ(内面はハケ後)(体部)。外面ヨコヘラミガキ。内面タテのハケ状ナデ	灰褐色	019	上層 内外面スス付着
5	高脚杯部	底径 12.3	(底部) • 裙部外反。外面ヘラナデ、内面ヨコナデ	灰褐色	009	スス付着
6	底部	底径 6.2	(底部) • 突出したややあげ底。内面ユビナデ。側面指頭圧痕	灰褐色	003	
7 29-15	底部	底径 6.3	(底部) • やや突出し、わずかにあげ底。外面タテヘラミガキ、内面指ナデ	茶褐色 (生駒西麓)	002	上層
8	底部	底径 7.0	(底部) • 突出したあげ底。内面ナデ、側面指頭圧痕	灰褐色	016	上層
9	底部	底径 4.4	(底部) • わずかに突出したあげ底。内面ハケ、外面ナデ	暗茶褐色	016	上層 底部外面黒斑
10	底部	底径 8.6	(体部) • 外面ナナメヘラミガキ(底部) • わずかに突出したあげ底。内外面ヨコナデ	暗褐色	017	上層 外面スス付着
11 28-5	底部	底径 10.6	(体部) • ナナメヘラミガキ(底部)。内外面ナナメヘラミガキ • 突出しない平底	暗褐色	020	上層
12 28-3	甕用蓋	口径 15.9	(体部) • つまみ部よりゆるやかに外反。内面ハケ、外面ナデ		007	上層 ハクリしている
13 28-2	甕	口径 18.2 底径 5.9	(口頸部) • ゆるやかに外反。外面ハケ後ヘラミガキ(体部) • 倒鐘形。外面ハケ後ヘラミガキ (底部) • 突出しないややあげ底。外面指頭圧痕後ヘラミガキ	暗褐色	005	下層 全体スス付着
14 28-4	甕	口径 16.4	(口頸部) • ゆるやかに外反し、面をもつ、内外面ヨコナデ(体部) • 外面ヘラミガキ 内面ハケ	茶褐色 (生駒西麓)	008	下層 焼成やや甘い
15	甕?	口径 21.0	(口頸部) • ゆるやかに外反し面をもつ。内面ヨコヘラミガキ、外面ヨコナデ(体部) 内面ヨコヘラミガキ	暗褐色	015	下層
16	甕	口径 27.9	(口頸部) • ゆるやかに外反し面をもつ。内外面ヨコナデ(体部) • 内外面ヨコヘラミガキ	暗褐色	018	内外面ともにスス付着
17 29-10	甕	口径 27.9	(口頸部) • ゆるやかに外傾。内外面強いヨコナデ(体部) • 内外面ハケ後ヨコヘラミガキ	茶褐色	001	外面体部に黒斑あり

第21表 SK-03出土器観察表

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
1 36-2	壺	口径 15.1	(口頸部)・口縁部外面に簾状紋2帯。頸部外面に櫛描直線紋2と簾状紋1。口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面タテハケ。頸部内面ヨコハケ	暗緑褐色 (生駒西麓)	005	下層 全体に摩滅著しい
2 36-1	壺	口径 9.55	(口頸部)・口縁部は外傾し、口唇部は面をもつ。口頸部は直立して外反。口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面タテ方向、ハケ後タテ、ヨコ方向へラミガキ。頸部内面上半ヨコ方向ハケ状ナデ。頸部内面下半、タテ方向ハケメ状ナデ(体部)。体部外面、タテ方向ハケメ後タテヨコ方向へラミガキ。体部内面ナナメ方向ハケメ。体部内面上端ナナメ方向ナデ(しばり目痕あり)	淡黄褐色	007	下層 外面スス付着
3	鉢	口径 35.6	(口頸部)・外に開く体部から内巻する口縁部をもつ。口唇部外面に刻目を施す。(体部)・浅い椀状の体部。体部外面ヨコヘラミガキ	褐灰色	006 (2)	外面に炭化物付着
4	甕	口径 33.75	(口頸部)・付加状口縁。内外面ヨコナデ(体部)。外面斜ヘラミガキ。内面斜ハケ	暗緑褐色	008 (1)	外面スス付着
5	甕	口径 37.2	(口頸部)・垂下口縁。外面ヨコナデ。内面ヨコナデ(体部)。外面斜ハケ後、ヨコヘラミガキ内面斜ハケ後ヨコヘラミガキ	暗褐色	009	内外面スス付着
6 36-2	甕	口径 18.0	(口頸部)・口縁部は強く外反し、口唇部は面をもつ。口縁部外面ヨコナデ。口縁部内外面ヨコハケ後ヨコナデ(体部)・長脚の体部。体部の外面上半、内面ハケメ。体部外面下半へラミガキ(底部)・やや突出するあげ底。底部内面指頭圧痕	淡褐色	001 (8)(9)(10)(11)	底部にもススが付着していることがら支脚部を使用した
7	壺	底径 5.55	(体部)。外面ナナメのへラミガキ。内面タテハケメ(底部)・わずかに突出したあげ底。側面斜ヘラミガキ	淡黄褐色	002	下層 内外面スス付着
8	壺	底径 7.9	(体部)。摩滅(底部)・?・内面指頭圧痕明瞭	灰褐色		下層 底部のふち著しく摩滅

第22表 SD-05出土土器観察表

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
1 35-1	鉢	口径 33.15	(口頸部)・口縁部は内巻し口唇部は面をもつ。口縁部外面に凹線1条(強い横ナデか?)。口縁部内外面横ナデ(体部)・半球部の体部。外面横斜ナデ。内面上端横斜ナデ。内面縦ヘラ削り	淡茶褐色	003	Ⅲ層 (1) 内外面スス付着
2 35-2	甕	口径 33.45	(口頸部)・口縁部は外傾し口唇部に面をもつ。口縁端部に2本の擬凹線。口縁部内外面横ナデ(体部)・扁球形の体部。外面中央に押捺紋。外面上半斜ハケ。外面下半斜ハケの上から縦へラミガキ。内面上位あらい横ハケ。内面ハケナデ。内面上半下から上方向へラ削り	褐灰色	004	Ⅲ層 (2)
3 35-4	台付鉢	口径 12.5 器高 18.1 底径 10.0	(口頸部)・口縁部は外傾し口唇部に面をもつ。口縁部端面横ナデ(体部)・扁球部の体部。外面上半縦ハケの上から横及び斜へラミガキ。内面下半縦へラミガキ。内面上半横へラミガキ。内面中央部横ハケ。中央部に粘土紐の継ぎ目(底部)・円	茶褐色	005	Ⅱ層 (3) 脚部に黒斑

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
4 35-3	甕	口径 17.05 器高 30.35 底径 7.0	錐状の頸部・円板充填法。透孔22コ。 透孔の下に沈線1条・外面縦ヘラミガキ。 ・内面横斜ヘラ削り。端部外面横ヘラミガキ。 ・端部内面横ナデ	淡茶褐色	001	II層 (4) 内面体部中央にスス付着

第23表 S D-03 出土土器観察表

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
1	壺	口径 24.3	(口頸部)・垂下口縁・口唇部は面をもつ。 ・口縁部外面縦状紋2条。頸部は直立的に外傾。 ・頸部外面に縦状紋4条。口縁部内外面横ナデ。 ・口縁部外面下端斜ナデ。頸部内面横ハケとナデ(指頭圧痕)。 ・頸部外面調整不明	赤褐色	054	Iブロック V層
2	"	口径 20.4	(口頸部)・口縁部は内傾し口唇部は面をもつ。 ・口縁部外面波状紋2条。頸部は直立して外傾気味。 ・頸部外面に直線状の紋1条。 ・口縁部内外面横ナデ。頸部外面調整不明。 ・頸部内面横ナデ	淡茶褐色	042	V層 外面スス付着
3	広口壺	口径 21.9	(口頸部)・口頸部は外傾・垂下口縁。 ・口縁部外面に縦状紋と刻目。頸部外面に直線紋2条。 ・口縁部内外面横ナデ。頸部外斜ナデ後横ヘラミガキ。 ・頸部内面横ナデ後横縦あらいヘラミガキ	淡茶褐色	053	I層 スス付着
4	広口壺	口径 1.7	(口頸部)・直立的にのびた口頸部と外傾した口縁部・垂下口縁。口縁部内外面横ナデ。 ・頸部外面縦ハケ。頸部内面横ハケ後ナデ	暗緑褐色	052	I層 1ブロック
5 31-5	広口壺	口径 18.6	(口頸部)・口縁部は外傾。口縁部内外面横ナデ。頸部外面縦ナデ。頸部内部横ナデ	暗緑褐色	036	II層 (6)
6	壺		(口頸部)。頸部外面縦ナデ。頸部内面ナデと横ハケナデ。頸部外面縦状と直線紋(体部)・扁球形の体部。外面上半縦ナデ。 ・外面下半ナデ後横あらいヘラミガキ。内面ナデと横ハケナデ。外面に波状紋3条、直線紋、縦状紋、列点紋	橙褐色	032	
7 31-6	壺	底径 7.5	(体部)・縦長の球形。外面太いヘラミガキ。 ・内面ヘラナデ。口縁部に近い方の外面指ナデ。口縁部に近い方の内面指押えナデとしづり目(底部)・突出した平底。 ・側面指頭圧痕。外面指押えとヘラナデ。内面ヘラナデ	灰黒褐色	011	III層 (34)
8	鉢	口径 37.2	(口頸部)・垂下口縁。口縁部外面に縦状紋と刻目。口縁部内外面横ナデ(体部)。 ・外面に縦状紋3条。内面横ナデ。外面紋様間研痕	淡茶褐色	043	I層
9	"	口径 36.1	(口頸部)・付加状口縁・口縁部は内反。 ・口縁部内外面横ナデ(体部)外面ナデ(?)内面横ハケ	暗褐色	033	IV層 (37)

項目番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
10	高杯	口底 26.2	(口頸部)・口縁部は内傾し口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ。口縁部外面に暗紋(体部)。外面斜縦ヘラミガキ。内面横ナデ後縦のあらいヘラミガキ	暗灰褐色	049	I層
11 31-4	ふた	口径 9.8	(底部)・円錐状の脚部。透孔1対。端部外面横ナデ。外面ナデ(ヘラ削り状面取り)。内面(?)	淡茶褐色	030	I層 1ブロック
12 32-9	高杯	脚径 8.05 (復元)	(体部)・外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ(底部)・外反・透孔上8コ下9コ(焼成前に表から)。外面縦ヘラミガキ。内面ナデ(最下部横ナデ)。体部との継ぎ目に指押え	赤褐色	006	I層
13	高杯脚部		(体部)・内面ハケ目(底部)・円筒状の脚部・外反・外面縦ヘラミガキ。内面横ナデ・端部横ナデ	暗緑褐色	031	V層 (48)
14 32-8	高杯脚部	脚径 12.6	(体部)・杯部は大きく。外面ヘラミガキ(底部)・外反・透孔が不ぞろいな間隔で6コ(焼成前にあけた)。外面ヘラミガキ内面ヘラナデ。体部との継ぎ目の内面に指押え。脚部内面上部にしづり目痕。端部横ナデ	灰褐色	007	IV層 (5)
15	甕	口径 23	(口頸部)・受口状で口唇部は面をもつ。内外面横ナデ(体部)扁球形。外面縦ナデとハケ。内面縦横ヘラ削り	淡茶褐色	014	(41) 内外面スス付着
16	"	口径 11.2 (復元)	(口頸部)・口縁部はゆるやかに外反。口縁部は指頭によるつまみあげ。内外面横ナデ(体部)内面ナデと指押え	黒色(外面) 黒茶褐色と 綠茶褐色 (内面)	008	I層 外面にスス付着
17 33-11	"	口径 13.8 (復元)	(口頸部)・口縁部は外傾し口唇部に面をもつ。内外面横ナデ。口縁部外面指押え(体部)・球形の体部。外面ハケ。内面上部ハケ。内面中部横ハケナデ。内面下部縦ハケナデ	黒茶褐色	010	(12) 3ブロック
18 33-13	"	口径 13.6	(口頸部)・口縁部は外傾し口唇部に面をもつ。内外面横ナデ(体部)・長胴形の体部。外面表面剥離・部分的にヘラ削り。内面上半ヘラナデ。内面下半ハケナデ	黒褐色 (外面) 灰茶褐色 (内面)	009	(4)
19	底 部	底径 7.9	(底部)・やや突出したドーナツ底。外面一方方向ヘラミガキ。側面外面内面ナデ	暗緑褐色	022	
20	底 部	底径 7.4	(体部)・外面縦ヘラミガキ(底部)・やや突出した平底。外面一方方向ヘラミガキ。内面ナデ	暗褐色	023	I層
29	甕	口径 11.9	(口頸部)・垂下口縁・口唇部は面をもつ。口頸部は外傾。口縁部外面に簾状紋2条。頸部外面下端に簾状紋1条。頸部外面に直線状の紋様あり。口縁上端部内面横ナデ。口縁下端部外面指押え(つめの跡残す)。頸部外面縦ナデ後紋様間研痕。口縁部内面横ナデ。頸部内面しづり目痕	茶褐色	055	I層 N・7地区
30	広口壺	口径 16.6	(口頸部)・垂下口縁。口縁部内外面横ナデ。頸部外面縦ナデ	灰褐色	045	I層 N・7地区
31	"	口径 15.7	(口頸部)・口頸部は外傾・付加状口縁。口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面縦ハケ状ナデ。頸部内面横ハケ状ナデ(体部)。外面縦ハケナデ。内面ナデ	淡茶褐色	046	II層 O・8地区
32	短頸壺	口径 11.9	(口頸部)・口頸部は直し。口縁部は外傾し。口唇部は尖頭状。頸部外面ナデ。頸部内面しづり目痕	淡灰褐色	044	I層 N・7地区

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器 番号	備 考
33 31-3	短頸壺	口径 11.5 器高 27.2 底径 5.8	部内面ナデ。口縁部内外面横ナデ (口頸部)・口縁部外反・口唇部は尖頭状 ・口縁部内外面横ナデ。下位(体部との継 ぎ目あたり)に1条の刻目突帯。頸部内面 縦斜ナデ(体部)・中位のはる縦長の球形 ・外面上半縦斜ナデ。外面下半縦斜ヘラ削 り。内面上半縦斜ナデ。内面下半縦斜ヘラ 削り(底部)・やや突出した平底。外面 ナデ	淡茶褐色	056	
34	長頸壺	口径 11.8 (復元)	(口頸部)・直立する頸部・口唇部に面を もつ。口縁部横ナデ。頸部外面間隔のあ らいヘラミガキ・横ナデの上からヘラミガ キもある。内面(ヘラ)ナデ	灰茶褐色	012	II層 O・8 地区
35	"		(口頸部)・直立する頸部・外面ヘラミガ キ・内面指押えナデ	淡白褐色	013	II層 N・7 地区
36	細頸壺	口径 6.1	(口頸部)・口頸部は直立し・口唇部は尖頭 状・口縁部内外面横ナデ。頸部外面縦ヘ ラミガキ。頸部内面横ナデ。内面に粘土 紐の継ぎ目	茶褐色	027	II層 (2-3) 外面赤彩色
37 34-15	コップ 形土器	口径 8.5 (復元) 器高 8.3 (復元)	(口頸部)・口唇部は尖頭状・口縁部内外 面横ナデ(体部)・把手が対称についてい る・外面ハケの上からヘラミガキ。把手 にはナデの上からヘラミガキ・内面ヘラナ デ(底部)・突出しない平底。外面ナデ ・内面ヘラ	淡褐色	003	I 層
38 31-2	無頸壺	口径 5.0 (復元) 器高 7.9 (復元)	(口頸部)・口縁部はゆるやかに内斂・口 縁部外面細かいハケ・透孔(?) (焼成前に 表からあけた)(体部)・扁球形・外面ヘ ラミガキらしき細いヘラナデ・内面指押え ナデ	淡褐色	002	I 層
39 32-7	タコ壺	口径 4.4	(口頸部)・口唇部は尖頭状(体部)・内 外面ナデ・透孔1つ(底部)・まるい	淡茶褐色	016	I 層 N・7 地区
40	甕(?)	底径 2.5	(体部)・外面縦ヘラ削り・内面ナデ (底部)・やや突出したあけ底	淡茶褐色	015	II層 N・7 地区
41	鉢	口径 26	(口頸部)・口縁部は外傾・付加状口縁 ・口縁部外面に凹形浮文。口縁部外面と頸 部外面横ナデ。口縁部内面と頸部内面横斜 ヘラミガキ	淡茶褐色	037	II層 O・7 地区
42	"	口径 34.2	(口頸部)・口縁部は外傾・付加状口縁 ・口縁端部横ナデ。口縁部直下外面横ハケ (体部)・外面横ヘラミガキ・内面斜ハケ	暗褐色	034	I 層
43	有孔底部		(底部)・突出しない平底・底部中央に円 孔(焼成後にあけた)・外面縦ヘラミガキ ・内面ナデ	暗褐色	019	II層 N~O・6
44	把手付 底 部		(底部)・突出した平底でややあげ底氣味 ・外面縦ナデと横ナデ・内面ナデ・側面 指頭圧痕(?)	淡黄褐色	020	II層 外面スス付着
45	底 部		(体部)・外面縦ヘラミガキ・内面斜ハケ (底部)・やや突出したドーナツ底・内外 面ともナデ	淡黄褐色	021	II層 O・7 地区
46	高 杯		(口頸部)・垂下口縁・口縁部に突帯 ・口縁部端部内面横ヘラミガキ・口縁部外 面下端横ナデ・口縁部外面横縦ヘラミガキ ・口縁部内面横斜ヘラミガキ・口縁部突帶 横ナデ	淡茶褐色	051	I 層 N・7 地区
47	"	口径 28.6	(口頸部)・口縁部は外傾し口唇部は円頭状	暗灰褐色	050	I 層

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器 番号	備 考
			・口縁部内外面横ナデ (体部)。外面、縦、横ヘラミガキ。内面縦ナデ			N・7 地区
48	高 杯	口径 25.6	(口頸部)・口縁部は外傾し口唇部は円頭状。 ・口縁部内外面横ナデ(体部)・浅い椀状の杯部。外面、横ヘラミガキ。内面横縦ヘラミガキ	暗褐色	048	II層 O・7 地区
49	"	口径 23.75	(口頸部)・口縁部は内傾し、口唇は面をもつ。 ・口縁部外面横ナデ。口縁部内面、横ナデ後、あらい横ヘラミガキ	淡茶褐色	047	I 層
50 32-10	高脚 杯部		(体部)。外面ヘラナデ。内面横ヘラミガキ (底部)・裾部は外反・透孔2つ1対で3対。外面横ナデ。内面横ナデ(ヘラ痕ややあり)	灰褐色	005	I 層 N~O・7
51	高 杯 柱状部		(底部)・裾部は外反・円筒状の長い脚部。 ・外面縦ヘラミガキ。内面ナデ。裾部外面斜ハケと斜ヘラミガキ	暗褐色	026	II 層 (2-10)
52	"		(底部)・裾部は外反。外面縦ヘラミガキ。 ・内面縦横ヘラ削り	淡茶褐色	024	III層 N~O・6
53	"		(体部)。内面ナデ(底部)・外反。 ・外面縦ヘラミガキ。内面にしづら目痕	淡赤褐色	025	I 層 N~7
54	高脚 杯部		(底部)・裾部は外反し、端部は円頭状・ 脚部は円錐状。端部内外面ナデ。外面縦ナデ。 ・内面ナデ。沈線1条	暗褐色	017	II 層 (2-11)
55	"		(体部)。内面ヘラミガキ(底部)・円錐状の脚部・外反。 ・外面縦ヘラミガキ。内面ナデと粘土の継ぎ目あり。 ・端部内外面横ナデ		029	II 層
56	"		(体部)。内面縦ヘラミガキ(底部)・ 円錐状の脚部・裾部外反。外面縦ヘラミガキ。 ・内面斜ハケナデ。端部内面、横ナデ	淡茶褐色	028	I 层
57	甕	口径 17.6	(体部)・口縁部は外傾し、口唇部は面をもつ。 ・口縁部端部横ナデ。口縁部外面、あらい横ハケ。 ・口縁部外面に刻目。口頸部内面、横斜のあらいハケ。 ・頸部外面縦ハケ	淡茶褐色	039	II 層 O・7 地区
58	"	口径 18.0	(口頸部)・口縁部は外傾し、口唇部は円頭状。 ・口縁部内外面横ナデ(体部)・長胴形の体部。 ・外面斜ヘラミガキ。内面ナデ(?)	暗褐色	040	II 層 O・7 地区
59	"	口径 16.0	(口頸部)・口縁部は外傾し、口唇部に面をもつ。 ・口縁部内外面横ナデ(体部)・外面タタキ。内面指ナデ痕	暗褐色	038	II 層 O・8 地区
60	"	口径 11.9	(口頸部)・口縁部は外傾して、口唇は尖頭状。 ・口縁部内外面横ナデ(体部)・外面タタキ。内面指ナデ痕	淡灰褐色	044	II 層 N・7 地区
61 33-14	"	口径 11.3	(口頸部)・口縁部は外傾。内外面ナデ(体部)・肩のはらない縦長の球形。 ・外面縦ヘラミガキ。内面縦ナデ	淡茶褐色		II 層 N~O・7 地区
62 33-12	"	器高 13.5 口径 12.0	(口頸部)・口縁部は外傾し、口唇部に面をもつ。 ・外面横ナデ(体部)・長胴形。外面タタキ。内面ヘラ削り(底部)・きわめて突出したあげ底。 ・外面ナデ。内面ヘラ(?)	淡褐色	004	I 層

第24表 方形周溝墓及び包含層出土土器観察表

項目番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
1 73-6	広口壺	口径 20.9	(口頸部) ・口頸部はやや直立し、口縁部は外反・垂下口縁。口縁部外面に凹線 3 条。口縁部内面に列点文。口頸部外面に簾状紋 1 条。口頸部内外面横ナデ(体部)。外面に簾状紋 2 条。内面斜ハケ。外面横ナデ	茶褐色	007	S X-01出土 内面に黒斑
2	"	口径 15.3	(口頸部) ・頸部は直立し、口縁部は外彎・口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ。頸部内面横ナデ(?)。頸部外面下半縦ハケ(体部)。球形。外面縦ハケ。内面斜ハケ	淡茶褐色	005	内外面スス付着 包含層
3	"	口径 28.0	(口頸部) ・垂下口縁。口頸部は外傾。口縁部外面へ列点紋。口縁部内外面上端横ナデ。口頸部外面縦ヘラミガキ。口頸部内面ナデ。頸部内面に粘土紐の継ぎ目	灰褐色	008	包含層
4 37-7	"	口径 15.2	(口頸部) ・口頸部は直立的に外傾・付加状口縁に凹線 2 条。口縁部内外面横ナデ。頸部内面縦横ナデ。口頸部外面横ナデ	淡茶褐色	006	包含層
5	短頸壺	口径 11.3	(口頸部) ・直立する頸部に外傾する口縁部。口縁部外面に凹線 4 条。口頸部内外面横ナデ	淡茶褐色	011	S X-01出土 内外面に一部スス付着
6	"	口径 10.3	(口頸部) ・口頸部は外傾・口唇部は円頭状。口縁部外面、ハケ状横ナデ。頸部内外面ナデ	淡灰褐色	012	S X-01出土
7 37-9	細頸壺	体径 18.3	(体部) ・扁球状の体部。外面縦ヘラミガキ。外面中央部のみ横ヘラミガキ。内面ナデ(粘土紐の継ぎ目残す)(底部)・やや突出したあげ底。側面ナデ。外面ナデ	暗褐色	009	包含層
8 37-8	台付無頸壺	口径 16.2	(口頸部) ・口縁部は内傾。口縁部外面に簾状紋 2 条刻目かな(?)。口縁部内外面、横ナデ(体部)・外面に簾状紋 3 帯と幕状浮紋 4 条 1 組と 2 孔 1 対の紐孔。外面下半斜ヘラミガキ。内面上半横ナデ。内面下半斜ハケナデ	暗緑褐色	015	"
9	"	口径 14.9	(口頸部) ・口縁部内傾。口縁部外面に列点紋。口縁部内外面横ナデ(体部)・外面簾状紋 2 条棒状浮紋 3 条 1 対の上に刻目。外面下半横ヘラミガキ。内面斜ハケナデ後横あらいヘラミガキ	暗褐色	014	"
10	無頸壺	口径 15.65	(口頸部) ・口唇部は面をもつ・口縁部に 2 孔 1 対の紐孔。口縁部外面に凹線 1 条。口縁端部内外面横ナデ(体部)・外面中央に沈線 2 条。外面横ヘラミガキ。内面斜ヘラミガキ	赤褐色	013	"
11	鉢	口径 43.9	(口頸部) ・口縁部内傾。口縁部外面に突帯・口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)・外面ナデ。内面横ハケナデ	淡褐色	029	S X-01出土
12	高杯	口径 22.3	(口頸部) ・口縁部は直立し、口唇部に面をもつ。口縁部外面凹線 2 条。口縁部内外面横ナデ(体部)・外面上半横ヘラミガキ。外面下半縦ヘラミガキ。内面上半横ナデ後横ヘラミガキ。内面下半斜ヘラミガキ		044	S X-02出土
13	"	口径 17.6	(口頸部) ・口縁部は外傾し、口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)・内面縦ヘラミガキ。外面斜ヘ	暗褐色	040	S X-02出土 口縁部外面に黒斑あり、杯部内外面赤彩色

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
			ラミガキ			
14	高杯	口径 17.0	(口頸部)・口縁部は直立し、口唇部に面をもつ。口縁部外面に波状紋。口縁部内外面横ナデ(体部)。内外面摩滅	淡茶褐色	039	S X-02出土 口縁部上端に赤彩色
15	"	口径 17.2	(口頸部)・口縁部は外反し、口唇部は円頭状。口縁部外面に凹線3条。口縁部内外面横ナデ(体部)。内外面縦ヘラミガキ	淡茶褐色	038	包含層
16 37-4	"	口径 18.2	(口頸部)・口縁部は直立し、口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)・深い杯部。外面縦ハケ後ヘラミガキ。縦ヘラミガキ(底部)・円錐状の脚部。外面縦ハケ後ヘラミガキ。内面ナデ	淡茶褐色	031	外面スス付着 S X-01出土
17	"	口径 16.2	(口頸部)・口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)。外面縦ヘラミガキ。内面ナデ後あらい縦ヘラミガキ。半球状	暗褐色	042	S X-01出土
18	"	口径 13.95	(口頸部)・口唇部は尖頭状。口縁部内面に凹線二条。口縁部外面上半横ヘラミガキ。口縁部内面横ナデ(体部)・半球体。外面上半横ヘラミガキ。外面下半縦ヘラミガキ。内面横ナデ	淡黄灰色	041	S X-02出土 外面に黒色物質塗布
19	高杯 柱状部		(底部)・円筒状の長い脚部。外面摩滅。内面ナデ。裾部外面縦ヘラミガキ。裾部内面斜ハケ	暗褐色	036	外面スス付着 包含層
20	"		(体部)・外面縦ヘラミガキ。内面不明 (底部)・円筒状の脚部。内外面ナデ内面に2本の粘土紐。脚台部外面縦ハケ。脚台部内面横ハケ	暗褐色	033	S X-01出土
21	"		(体部)・外面縦ハケ後ヘラミガキ。内面縦ヘラミガキ(底部)・外面ナデ	淡橙褐色	045	杯底部内面黒斑 包含層
22	"		(底部)・円筒状の脚部。外面縦ヘラミガキ(かな?)	暗褐色	037	スス付着 包含層
23 37-5	高杯脚部	底径 11.4	(体部)・外面縦ヘラミガキ。内面ヘラミガキ(?) (底部)・円筒状の長い脚部。透孔3コ1対が3。端部内外面横ナデ。外面縦ハケ後ヘラミガキ。内面ナデ	淡茶褐色	034	S X-01出土
24	"	底径 7.7	(底部)・大きく外反して、端部は尖頭状。透孔?コ。外面縦ヘラミガキ。内面摩滅	淡茶褐色	032	S X-01出土
25	"	底径 12.1	(底部)・裾部は外反し端部は面をもつ。端部内外面横ナデ。外面ナデ。内面ナデと横ハケ	淡茶褐色	043	端部黒斑 包含層
26	"	底径 11.8	(底部)・円筒状の脚部・裾部は大きく外反し端部は面をもつ。端部内外面横ナデ。外面縦ヘラミガキ。内面横ハケナデとナデ	暗褐色	035	包含層
27	"	底径 14.45	(底部)・裾部は外反し、端部に面をもつ。端部内外面横ナデ。内面上端しづり目痕。内面横ヘラ削り。外面縦ヘラミガキ	淡茶褐色	046	内外面スス付着 包含層
28 37-3	器台	口径 34.6	(口頸部)・付加状口縁・口縁部は外傾。口縁部端部に凹線4条。口縁部外面に円形浮文。頸部外面に凹線8条。口縁端部縦ハケ後横ナデ。口縁部外面斜ハケ後斜ハケナデ。口縁部内面横ハケ後、横ヘラミガキ。頸部外面横ナデ。頸部内面横斜ヘラミガキ	淡黄褐色	030	外面スス付着 包含層

項目番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
29 36-1	甕	口径 29.5	(口頸部) 付加状口縁。口縁部は外傾。 ・口頸部内外面横ナデ(体部)・長胴形の体部。 ・外面ヘラミガキ。内面ナデ後、あらい横ヘラミガキ	淡黄褐色	021	内外面スス付着 包含層
30	"	口径 34.9	(口頸部) 口縁部は外反。 ・口頸部内外面横ナデ(体部)。 ・外面タタキ後縦ハケ。 ・内面斜ハケナデ。外面中央に刻目	淡茶褐色	019	S X-02出土 外面スス付着
31	"	口径 19.1	(口頸部) 口縁部は外傾し、口唇部は面をもつ。 ・口縁部内外面横ナデ(体部)。 ・外面縦ハケ。内面上端ナデ。内面縦ハケ	赤褐色	018	S X-02出土
32 36-2	"	口径 11.3	(口頸部) 口縁部は外傾し、口唇部は円頭状。 ・口縁部内外面横ナデ(体部)・肩のはった長胴形。 ・外面上端横ナデ。外面ナデ。 ・内面上端斜縦ハケ。内面斜らせん状ヘラ削り後あらい縦ヘラミガキ (底部)・平底。外面ナデ。内面斜らせん状ヘラ削り後、縦のあらいヘラミガキ	淡黄褐色	020	S X-02出土 外面スス付着
33	甕用蓋	—	(口頸部) 口縁部内外面横ナデ(体部)。 ・外面ヘラ削り。内面ナデ。 ・つまみ部外面ヘラ削り	淡黄褐色	022	口縁部内面スス付着 包含層
34	蓋	—	(体部) 外面縦ハケ。内面横ヘラ削り後、ヘラミガキ。 ・つまみ部内面しばり目痕。 ・つまみ部外面横ナデ	淡茶褐色	023	内外面スス付着 包含層
35	甕	口径 12.8	(口頸部) 口縁部は外傾して、口唇部に面をもつ。 ・口縁部内外面横ナデ。頸部外面横ナデ(体部)。 ・外面縦ヘラミガキ。内面横ナデ(粘土紐の継ぎ目残す)	暗緑褐色	016	S X-01出土
36	"	口径 15.4	(口頸部) 口縁部上端は直立し、口唇部は面をもつ。 ・口縁部外面凹線2条。口頸部内外面横ナデ(体部)。 ・外面タタキ。内面ナデ	淡黄褐色	017	包含層
37	"	口径 17.3	(口頸部) 口縁部は外傾し、口唇部は円頭状。 ・口頸部内外面横ナデ(体部)・長胴形の体部。 ・外面横ヘラミガキ。内面横ハケ後、横ヘラミガキ	暗褐色	027	"
38	底部	底径 6.5	(底部) 平底。外面ナデ(?)。内面不明	暗緑褐色	025	S X-01出土
39	"	底径 5.9	(体部) 外面縦ヘラミガキ斜ハケ。 (底部) 突出しないドーナツ底。内外面ナデ	淡灰黄色	024	包含層
40	有孔底部	底径 7.5	(体部) 外面縦ヘラミガキ(?)。内面ナデ(底部)・突出したあげ底。底部中央に円孔をもつ。内外面ナデ	淡茶褐色	026	"
41	甕	口径 32.15	(口頸部) 付加状口縁。口縁部は外傾。 ・口頸部内外面横ナデ(体部)。外面縦ハケ後ナデ。内面斜ナデ	淡茶褐色	010	S X-02出土

第25表 S D-02 出土土器観察表

1	長頸壺	口径 9.7	(口頸部) 口頸部は直立し、口縁部は外傾。 ・口唇部は面をもつ。口縁部外面に記号文。 ・口縁部内外面横ナデ。頸部内外面縦ヘラミガキ	暗褐色	020	
2 39-9	"		(口頸部) 口頸部は直立。頭部外面下端に突起(2周)。頸部外面縦ヘラミガキ。	暗褐色	007	

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器 番号	備考
			頸部外面突帶付近横ナデ。頸部内面ナデ(粘土紐の継ぎ目)			
3	細頸壺	口径 7.2	(口頸部)・直線的にのびる長い頸部で口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ。頸部外面縦ヘラミガキ。頸部内面ナデ(粘土紐の継ぎ目としづり目痕)	淡灰黄色	012	
4	"	口径 7.3	(口頸部)・直線的にのびる長い頸部で口縁部はわずかに外反・口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ。頸部外面縦ハケ後縦ヘラミガキ。頸部内面上端横ハケ。頸部内面ナデ(粘土紐の継ぎ目)	淡茶灰色	013	
5 38-6	"	底径 5.2	(口頸部)・口頸部は直線的にのびるがやや外傾気味。体部との境目の外面に刺突文(体部)・扁球形の体部。外面上半一部ハケ。外面中央部ヘラミガキ。外面下半ハケ後ヘラミガキ。内面上半指ナデ。内面下半ハケ(底部)・突出した底部。側面指押え。外面ハケ	黄褐色	003	
6	水差	口径 7.6	(口頸部)・口頸部は直立し、口縁部はやや外傾・口唇部は尖頭状。口縁部内外面横ナデ。頸部外面ナデ。頸部内面(粘土紐の継ぎ目2本)(体部)・外面縦ヘラミガキ。内面ナデ(粘土紐の継ぎ目1本)	淡茶褐色	010	
7 38-5	ミニチュア壺	口径 2.4 器高 5.05	(口頸部)・内傾し、口唇部は円頭状(体部)・内面ナデ(底部)・内面指ナデ痕	淡灰褐色	005	
8 39-10	装飾高杯	口径 30.6	(口頸部)・垂下口縁。口縁部外面に凹線2条。口縁端部内外面横ナデ。口頸部外面縦ハケ後縦ヘラミガキ。口頸部内面横ハケ後、あらい縦ヘラミガキとナデ	暗褐色	022	
9 39-12	高杯	口径 20.2	(口頸部)・口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)・半球体の体部。外面縦斜ハケ後あらい縦ヘラミガキ。内面横ナデ後あらい縦ヘラミガキ	淡黄灰色	015	
10 39-11	高杯 柱状部		(体部)・内外面縦ヘラミガキ (底部)・円筒状の長い脚部。外面縦ヘラミガキ。内面横ナデ。脚台部内外面ナデ	淡黄褐色	016	
11 38-1	高杯	底径 14.2	(口頸部)・口唇部は尖頭状。内燃氣味に立ち上がる。口縁部内外面横ナデ(体部)・浅い碗状の杯部。杯部内外面斜縦ハケ (底部)・円錐状の脚部・中突・透孔3コ。外面ナデ。内面しづり痕。端部内外面横ナデ。脚台部外面縦ハケ。脚台部外面ナデ	淡黄褐色	011	
12	高杯		(体部)・外面縦ヘラミガキ。内面縦ヘラミガキ (底部)・外面縦ヘラミガキ。内面ナデ	淡茶褐色	006	
13 38-2	高脚部	底径 11.8	(底部)・円錐状の脚部・端部に面をもつ。透孔3コ(焼成前に表からあけた)。外面ハケ(ハケ後、粘土を補充して脚と杯をつないでいる)。内面上半指ナデ。内面中央部しづり目痕。内面下半ナデ。端部内外面横ナデ	淡黄褐色	002	
14	"	底径 12.1	(体部)・内外面ヘラミガキ	淡黄褐色	009	

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
38-3			(底 部) ・円錐状の脚部 ・透孔3コ ・端面は円頭状。端部内外面横ナデ。外面は縦ハケ後、縦面取り状ヘラ削り。内面横斜ハケ。脚柱内面しづり目痕			
15	台付鉢	口径 20.4	(口頸部) ・口縁部は大きく外傾 ・口唇部は尖頭状。口縁端面横ナデ。口縁部外面斜ハケ後縦ヘラミガキ。口縁部内面横ハケ後、横ヘラミガキ (体 部) ・半球状の体部。外面縦ヘラミガキ。内面横ヘラミガキ後、縦ヘラミガキ。外面中央付近に粘土紐の継ぎ目	淡黄褐色	008	脚台端面に彩色
16	装飾脚部		(底 部) ・端面に面をもつ。内外面横ナデ。透孔?コ。透孔の周辺に波状紋	暗褐色	018	
39-13	底 部	底径 7.1	(底 部) ・突出した平底。内外面横ナデ	淡黄灰色	017	
39-15	"	底径 5.6	(体 部) ・外面縦ヘラミガキ。内面斜ハケナデ (底 部) ・突出したドーナツ底。外面ナデ。内面斜ハケナデ	淡黄褐色	019	
19	甕	口径 16.7	(口頸部) ・口縁部は外傾し、口唇部は円頭状。口縁部内外面横ナデ。頸部外面縦ハケ。頸部内面横ハケ (体 部) ・外面タタキ。内面横ハケ	淡茶褐色	021	
20	"	口径 14.5 器高 22.3 底径 4.6	(口頸部) ・口縁部は外反。口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ (体 部) ・肩のはる長胴形。外面平行タタキ(外面下部からタタキの方向がかわる)。内面上部細かいハケ(1.15cm巾で8条)。内面中央部太いハケ。内面下部やや細かいハケ。内面最下部ハケ (底 部) ・突出した平底。側面ナデ。外面一部ハケ(タタキ痕)	淡赤褐色 (内面、淡 黄褐色)	014	
21	"	口径 12.9 器高 10.9 底径 5.75	(口頸部) ・口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ (体 部) ・長胴形の体部。外面タタキ。内面縦ハケだが、ヘラ削り的なところがある。口縁部との境目の内面横ハケ (底 部) ・側面指押え	淡灰褐色	001	
22	"	口径 16.1 器高 17.8 底径 4.6	(口頸部) ・外傾し口唇部に面をもつ。口縁部外面沈線2条。口縁部内外面横ナデ (体 部) ・肩のはる長胴形。外面平行タタキ。内面上半ハケ。内面下半ハケナデ (底 部) ・突出した平底。側面ナデ。外面木の葉紋	灰褐色	004	外面ススが厚く付着

第26表 SD-04 出土土器観察表

1	広口壺	口径 18.8	(口頸部) ・垂下口縁。口縁部外面に簾状紋をその上に刺突。頸部外面に簾状紋2条。口縁部外面縦ハケ。口縁端部内外面横ナデ。口頸部内面横ナデ	暗褐色	063	IV層 口縁部外面に黒斑
2	"	口径 23.3	(口頸部) ・垂下口縁。口縁部外面に竹管文(彩色か?)。口縁部外面縦ヘラミガキ。口縁部上端外面ナデ。口縁部内面横ハケ後横ナデ。口縁部端面横ナデ	暗褐色	055	IV層 内面に黒斑
3	"	口径 15.3	(口頸部) ・垂下口縁。頸部外面に貼付突帶。口縁外面に波状紋、円形浮紋。口縁内面に粗い簾状紋、円形浮紋。口縁部内外	茶褐色	061	II層 (182)

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
4	広口壺	口径 17.4 (復元)	面横ナデ。頸部内面斜ナデ (口頸部)・垂下口縁。口縁部外面に円形浮紋3コ1組で?組(朱がぬってある)。口縁部に凹形浮紋のかけらあり。口縁部外面に擬凹線1条。頸部を肩部の境目に突帯(朱がぬってある)。口縁部内面横ナデ。頸部外面ハケ4条/cm	茶褐色 (内)黒褐色	017	V層
5 44-23	広口壺	口径 16.6	(口頸部)・垂下口縁。口縁部外面に竹管紋。口縁部外面横ナデ。頸部外面縦ハケ。頸部内面横ハケ	淡茶褐色	064	IV層 (329) 外面にスス付着
6 44-24	広口壺	口径 17.6	(口頸部)・垂下口縁。口縁部外面横ナデ。口頸部内面横ナデ。頸部外面縦ナデ	淡茶褐色	042	IV層
7	広口壺	口径 16.4	(口頸部)・垂下口縁。口縁部外面横ナデ。頸部外面縦ヘラミガキ。口頸部内横ヘラミガキ	淡茶褐色	054	IV層 (133) 外面にスス付着
8 40-3	壺	口径 13.1 (復元)	(口頸部)・垂下口縁。口頸部は外反。頸部外面に下手な竹管文3コで記号文。口縁部内面横ナデ。頸部外面ハケ。口縁部外面ハケ後横ナデ(体部)・長胴形。外面ハケの上からヘラミガキ。内面ハケ。頸部と体部との境目の内面指押えナデ	灰黄褐色	019	IV層
9 44-22	広口壺	口径 21.5 (復元)	(口頸部)・垂下口縁。口縁部・頸部外面ヘラミガキ。口縁部内面横ナデ。頸部内面ナデ	赤茶褐色	035	V層 (316)
10	壺	口径 13.9	(口頸部)・垂下口縁。口頸部は外傾。口頸部内面横ナデ。頸部外面に摩滅	淡茶褐色	079	V層 (107)
11	広口壺	口径 16.8	(口頸部)・外反し、口唇部に面をもつ。口縁部外面横ナデ。頸部外面縦ハケ状ナデ後縦ヘラミガキ。頸部内面斜ハケ	淡茶褐色	056	IV層 (265) 外面スス付着
12 40-4	広口壺	口径 15.7 (復元)	(口頸部)・垂下口縁。口縁部外面に凹線2条。頸部外面に記号文。口縁部外面横ナデ。口頸部外面ヘラミガキ。内面摩滅	淡赤褐色	032	IV層
13	壺	底径 4.4	(体部)・球形。外面上半縦ヘラミガキ。外面中央横ヘラミガキ。内面上半縦指ナデ内面中央横指ナデ。内面下半斜ハケとナデ	淡茶褐色	073	IV層 (113) 内面黒斑 外面スス付着
14	壺		(体部)・扁球形。外面上半縦ヘラミガキ。外面下半ハケメ後ヘラミガキ。内面上半ナデ(一部指押え)。内面下半ハケナデ(一部ヘラナデ痕)	黄褐色	034	II層 (12)(13) (18)(43)(46) 外面下半にスス付着
15 40-2	長頸壺	口径 12.4 器高 29.6 最大体径 18.0 底径 5.1	(口頸部)・口頸部は直立して外傾。口唇は円頭状。口縁部外面横ナデ。頸部外面ヘラミガキ。頸部内面ヘラナデ(痕あり)(体部)・扁球形(最大径は中位)。外面ヘラミガキ。外面最大体径部横ヘラミガキ。内面上半指押え。内面下半ハケ(底部)・やや突出した平底。外面ナデ(ヘラナデもある)	灰黄褐色	012	II層 (68)
16	広口 長頸壺	口径 22.3	(口頸部)・口頸部は直立し、口縁部は外反し、口唇部は面をもつ。口縁部外面横ナデ。口頸部外面縦ハケ。口頸部内面横斜ハケとナデ	淡黄褐色	037	IV層 (225) SD-02(3) 内面にスス付着
17	長頸壺	口径 10.8	(口頸部)・口頸部は直立し、口縁部は外傾し、口唇部は尖頭状。口縁部外面横ナデ。頸部外面縦ヘラミガキ。頸部内面ナデ	淡黄褐色	060	IV層

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
18	長頸壺		(口頸部) ・頸部は直立。頸部外面に記号文。頸部外面ヘラミガキ。頸部内面ヘラナデ (体部) ・頸部と体部の境目の内面にナデ指印え	淡赤褐色	030	
19 40-1	長頸壺	口径 9.6	(口頸部) ・口頸部は直立し、口縁部は外傾 口唇部は円頭状。口縁部内外面横ナデ。 頸部外面ハケ。頸部内面ナデ(一部ハケ) ・外面ほど表面剥離	淡白褐色	028	IV層 (207)
20	長頸壺	底径 4.5	(口頸部) ・頸部外面横ナデ (体部) ・球形。外面上半斜ハケ後ナデ ・外面下半縦ハケ。内面上端指ナデ痕。 内面中央横ハケとナデ。内面下半縦ハケ (底部) ・突出した平底。側面ナデ 外面ナデ	淡黄褐色	074	III層 (81)
21	細頸壺	口径 7.8	(口頸部) ・口頸部は直立し、口縁部は外傾 口唇部は尖頭状。口縁部内外面横ナデ。 頸部外面ハケナデの上をヘラミガキ。頸部 内面指印えナデ。頸部と体部の境目の内面 ヘラナデ	淡赤褐色	021	V層 (276)(280) (283)(285)(422)
22 42-14	蓋	径 13.1	(体部) ・天井部につまみのつくかさ形 ・透孔4コ(焼成前両方からあけた)。外面 ハケメ。外面端部横ナデ。外面指ナデ ・端部は円頭状	淡灰黄褐色	014	IV層 (224)
23 41-8	台付 無頸壺	口径 6.0 (復元) 器高 7.2 底径 4.4	(口頸部) ・口縁部内巻。口唇部は円頭状 ・口縁部に小紐孔2孔1対(焼成前に表から あけた) (体部) ・扁球形。外面ヘラケズリ。 内面指印え(一部ハケメ) (底部) ・きわめて突出したあげ底。透 孔13コ(そのうち3コは貫通せず焼成前に あけた)。底部内面指印え(上から刺突した時 の粘土のもり上がりあり)	灰褐色	016	III層 (74)
24	ミニチ ニア鉢	口径 5.0 (復元) 器高 3.2 底径 2.4	(口頸部) ・口唇部は円頭状。内外面指印 えナデ (体部) ・内外面指印えナデ (底部) ・厚い平底。側面ヘラ痕。外 面ナデ	灰褐色	029	
25 41-9	鉢	口径 12.0	(体部) ・外面難にハケ。内面ハケナデ ・外面下半指印えナデ (底部) ・突出したあげ底。側面指印え ・外面指頭圧痕	淡赤褐色	003	II層
26	"	口径 9.65	(口頸部) ・口縁部は外傾し、口唇部は面を もつ。口縁部内外面横ナデ (体部) ・やや肩のはる球形外面縦ハケ状 ナデ。内面縦ナデ	淡黄灰色	052	IV層
27	底 部	底径 4.5	(体部) ・外面ナデ。内面斜ヘラケズリ (底部) ・突出した平底でややあげ底氣味 ・外面ヘラ削り。内面ナデ	淡黄灰色	050	IV層 (23) 外面スス付着 底部外面黒斑
28	"	底径 4.9	(体部) ・外面縦ヘラミガキ。内面斜ハ ケ (底部) ・突出した平底。底側面ナデ ・内外面ナデ	淡黄灰色	068	III層 (76) 底部外面黒斑
29	壺 底 部	底径 7.0	(体部) ・外面縦ヘラミガキ。内面斜ハ ケ後あらい斜ヘラミガキ (底部) ・突出した平底。底側面ナデ ・内外面ともナデ	暗褐色	049	IV層 (222)
30	底 部	底径 5.1	(底部) ・突出した平底。外面ナデ。 内面くもの巣状ハケ	淡黄褐色	069	IV層 (221) 外面にスス付着
31	壺 底 部	底径 5.9	(体部) ・外面縦ヘラミガキ。内面縦と	淡黄褐色	042	V層 (307)(323) 内面黒斑

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
32	壺	口径 14.8	斜ハケ(底部)・突出したドーナツ底 ・外面ナデ(木葉痕)・内面縦斜ハケ (口頸部)・短く直立的な頸部 ・口縁部外 面凹線 1 条 ・口唇部は円頭状 ・口縁部内 外面横ナデ ・頸部外面縦ハケ後横ナデ ・頸部内面横ナデ	淡茶褐色	046	V層 (427)
33	短頸壺	口径 12.4 (復元)	(口頸部)・頸部は直立し、口縁部は外傾 ・口縁部外 面凹線 1 条 ・口唇部は円頭状 ・口縁部内 外面横ナデ ・頸部外 面指ナデ(体部) ・頸部と体部 の境目に刺突文 ・外面ヘラナデ ・内面指 押えナデ	淡赤黄褐色	027	V層 (286)(428) (433)(436)(430)
34	短頸壺	口径 12.3	(口頸部)・外傾して口唇部は尖頭状 ・口 縁部内外 面横ナデ ・頸部内外 面斜ハケ (体部) ・外面一部斜ハケ ・内面しづり 目痕指頭压痕	淡茶褐色	053	V層
35 40—5	短頸壺	口径 10.3 (復元)	(口頸部)・頸部は直立し、口縁部は外傾 ・口 縁部は円頭状 ・内面横ナデ(体部) ・扁球形 ・外面ハケ ・内面指ナデ	灰褐色	007	V層 最下層 外面にスス付着
36 44—25	短頸壺	口径 8.0	(口頸部)・口頸部は直立し、やや外傾気味 で口唇部は面をもつ ・口唇部に刻目(部分的に) ・口縁部内外 面横ナデ ・頸部外 面縦ナデ ・頸部内面横ナデ	淡黄褐色	059	V層
37 44—27	短頸壺	口径 12.2	(口頸部)・口頸部はゆるやかに外反 ・口 唇部は面をもつ ・口縁部内外 面横ナデ ・頸部外 面縦ハケ ・頸部内面横ハケ	淡茶褐色	057	II層
38	短頸壺	口径 11.2	(口頸部)・口頸部は外傾気味に直立 ・口 唇部は尖頭状 ・口縁部内面横ナデ ・口頸 部外 面横ナデ ・頸部内面縦斜ナデ	淡茶褐色	062	IV層 下層 (261)
39 41—6	短頸壺	口径 6.9 (復元) 器高 12.0	(口頸部)・口頸部は外傾 ・口唇部は円頭 状 ・口縁部外 面横ナデ ・口縁部内 面ハケ ・頸部外 面ナデ(体部) ・扁球形 ・外 面上半 ヘラミガキ ・内面上半 指ナデ ・内 面下半 ハケナデ(底 部) ・突出した平底 ・外 面一部 ハケ ・外 面ナデ	淡白褐色	015	IV層 (232)
40 41—7	短頸壺	底径 5.7	(口頸部)・直立した頸部 ・口唇部は尖頭 状 ・頸部外 面ヘラミガキ ・頸部内 面指ナ デ(体部) ・扁球形 ・外 面上半 ヘラミガキ ・外 面下半 横ヘラミガキ ・内 面上半 ナデ ・内 面下半 ハケナデ のハケ の ヘラ 痕 ・最大 体 径 あ た り に ハ ケ 後 ・粘 土 を つけ た あと あり		002	IV層 外面一部スス付着
41	台付 無頸壺	口径 9.2 (復元)	(口頸部)・口頸部は直立し、口縁部は外傾 し、口唇部は円頭状 ・口縁部内外 面横ナデ ・頸部外 面ヘラミガキ ・頸部内 面ヘラ 削り 的 の ヘラ ナ デ 後 ヘ ラ ミ ガ キ (体部) ・扁球形 ・外 面ヘ ラ ミ ガ キ ・内 面上 中部 (指) ナ デ ・内 面下 部 ハ ケ	淡褐色	011	IV層 (141)
42	壺		(体部)・やや扁球形 ・外面に記号文あり ・内面指 押 え	灰黄褐色	033	II層 (173)(159) (157)
43	器台	口径 26.4 (復元)	(口頸部)・口頸部は直立し、口縁部は外反 ・付加状口縁(?) ・口縁部内外 面横ナデ ・頸部外 面ハケ ・頸部内 面ナデ ・頸部に 透し穴 1 コ残る(焼成する前にヘラで削りと る)	淡白褐色 (外面ハケ のところだけ 灰褐色)	020	IV層 下層 (84)
44 41—10	器台	裾径 31.5	(体部)・直線的な体部 ・透孔 2 つ? ・外面にヘラ 描沈線 5 条 7 条 綾杉列点紋 5 条 ・脚柱部外 面上端中央 縦のあらい ハケ後縦へ	淡黄褐色	024	・外面にスス付着

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
			ラミガキ外。脚柱部外面下端のあらいハケ。脚柱部上面上斜ハケ状ナデ。脚柱部内面中央縦ナデ。脚柱部内面下端横ハケ状ナデ(底部)。・届曲して広がる。・端部は面をもちその面は上方に肥厚。・裾部に透孔2コ。・上端部内外面横ナデ			。乾燥時にヒビ割れをしたのか焼成時に2カ所粘土紐を貼付け補修している
45—34	高杯	口径 24.35	(口頸部)。・口縁部は直口し、口唇部は面をもつ。・口縁部内外面横ナデ(体部)。・外面縦ハケ。・内面縦ヘラミガキ	淡茶褐色	072	IV層
42—17	高杯	口径 25.3 底径 11.6	(口頸部)。・口縁部は外傾し、口唇部は面をもつ。・口縁部内外面横ナデ(体部)。・外面縦ハケ。・内面縦ヘラミガキ	淡黄褐色	026	II層 (161)
42—11	高杯	裾径 12.2	(体部)。・内外面縦ヘラミガキ(底部)。・円錐状の長い脚部。・透孔6コ。・端部は面をもつ。・端部内外面横ナデ。・内面ナデ(上端指ナデ)。・外面縦ヘラミガキ	淡赤褐色	025	N・4地区
48	高杯	口径 19.2	(口頸部)。・口縁部は直立。・口唇部は円頭状(体部)。・外面上半縦ヘラミガキ。・外面下半横つづいて縦ヘラミガキ。・内面ヘラミガキ(一部横ナデ)。・内底面に接合痕	灰黄褐色	005	IV層 口唇部に朱が残存
49	高杯	口径 23.8	(口頸部)。・口縁部はゆるやかに外傾。・口唇部は面をもつ。・口縁部内外面横ナデ(体部)。・半球状の体部。・内外面縦ヘラミガキ	淡茶褐色	071	
50	高杯	口径 14.7 底径 8.6	(口頸部)。・口縁部は内巻し口唇部は面をもつ。・口縁部外面に粘土紐残す。・口縁部外面と端面横ナデ(体部)。・浅い碗状の杯部。・外面ハケ。・内面ハケナデ(底部)。・円錐状の脚部(中空)。・透孔3コ1対か2対。・外面ハケ。・内面横ナデ	灰褐色	082	III層 (82)
51	高杯	口径 12.1	(口頸部)。・ゆるやかに内巻。・口唇部は尖頭状。・口縁部外面横ナデ。・口縁部内面斜ナデ(体部)。・内巻して立ち上がる。・外面縦ヘラミガキ。・内面斜ナデ	淡黄灰色	058	V層 (441)
52	高杯脚部	—	(体部)。・外面縦ハケ。・内面ハケとナデ(底部)。・外面縦ハケ後、あらい縦ヘラミガキ。・内面縦ハケ状ナデと横ハケ	淡黄褐色	043	II層 (36)
42—12	高杯脚部	底径 13.4	(体部)。・内面ヘラミガキ(底部)。・円錐状の脚部。・透孔2コ1対で3対。・端部は円頭状。・端部内外面横ナデ。・外面ナデ後縦ヘラミガキ。・内面上半部指ナデ痕。・内面中央部。・内面中央部斜ハケ	淡黄褐色	051	IV層 (147)
54	高杯脚部	—	(体部)。・内面ヘラミガキ(?) (底部)。・円錐状の脚部。・外面縦ヘラミガキ。・内面ナデ(粘土紐の継ぎ目を残す)	淡茶褐色	048	II層 (188)
55	高杯脚部	底径 11.4	(底部)。・円錐状の脚部。・透孔1コ。・端部内外面横ナデ。・外面縦ヘラミガキ(摩滅が著しい)。・内面ナデ(しばり目痕)	淡茶褐色	038	V層 脚台端部外面黒斑
56	高杯脚部	底径 9.65	(体部)。・内外面ナデ(底部)。・円錐状の脚部。・透孔5コ。・外面縦ハケ。・内面ナデ。・端部内外面横ナデ。・端部は円頭状	淡茶褐色	066	V層 内外面スヌ付着
45—36	高杯柱状部	—	(底部)。・円筒状の脚部。・外面ハケ後縦ヘラミガキ。・内面ナデ	淡茶褐色	040	III層 (196)
45—37	"	—	(底部)。・円筒状の脚部。・外面にら線状沈線2条。・外面縦ヘラミガキ。・外面下端縦ハケ。・内面ナデ	淡黄灰色	044	V層

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
59 45-38	高杯 柱状部	—	(底部)・裾部外反・円筒状の脚部の外面縦ヘラミガキ。内面ナデ	淡黄褐色	039	II層
60	高杯脚部	底径 6.65	(底部)・円錐状の脚部・透孔3コ。外面縦ヘラミガキ。端部内外面横ナデ。内面しばり目痕	淡茶褐色	045	V層
61	"	底径 7.6	(底部)・裾部外反・透孔2コ1対で4対。端部内外面横ナデ。外面縦ヘラミガキ。内面しばり目痕	淡茶褐色	067	V層
62	"	脚径 11.8	(体部)・外面ヘラミガキ。内面細かいヘラミガキ(底部)・エンタシスの脚部。円板充填法・裾部は外反・透孔2コ1対が3対(焼成前にあける)。外面ヘラミガキ。内面ヘラ削り(一部指押え)。外面端部横ナデ。内面端部ナデ	淡黄褐色	006	IV層 (260)
63 42-13	"	裾径 14.4 (復元)	(底部)・エンタシスの脚部・透孔3コ(推定4コ)(焼成前に表からあけた)。杯部と脚部の境目外面横ナデ。外面ヘラミガキ。内面3分ヘラ削り1/3しばり目。裾部外面上半ハケ。裾部外面下半ヘラミガキ。端部内外面横ナデ	淡白褐色	018	II層 (62)
64	"	高杯	(体部)・外面太いヘラミガキ。内面縦ヘラミガキ。内底面に朱痕。内底面一部に平行ヘラミガキ(底部)・エンタシスの脚柱部・裾部外反。円板充填法。外面太いヘラミガキ。内面指ナデ。裾部外面ハケ後ヘラミガキ。裾部内面指ナデ(ヘラ痕)	茶褐色 (緑っぽい)	001	IV層
65 45-35	装飾高杯	—	(体部)・外面上半斜縦ハケ。内面摩滅。杯底部外面に刻目。内面上半横ナデ	淡茶褐色	081	II層
66 42-16	"	—	(体部)・直立的な擬口縁に外反する口縁を付加。内面ヘラミガキ。外面ハケの上からヘラミガキ(底部)。外面上半ヘラミガキ(一部横ナデ)。外面下半ハケの上からヘラミガキ。内面ヘラミガキ	赤褐色	010	IV層 (120)
67 42-15	"	—	(体部)・外面に刻目突帯2条。外面上半ナデ。外面中央横ナデ。外面下半ハケ。内面ヘラミガキ(一部ナデ)。突帯をつける時の指圧痕(底部)。脚部上部に円板充填した時の粘土が残っている。内面ヘラミガキ	淡褐色	004	IV層 (327)
68	タコ壺	口径 5.2	(体部)・口唇部は円頭状。透孔1コ。口縁部内面横ナデ(底部)。内面ナデ。外面調整不明	淡茶褐色	065	IV層
69	鉢	—	(底部)・外面に凹線4条	淡黄褐色	041	IV層 外面黒斑
70	"	口径 31.5	(口頸部)・口縁部は外傾・垂下口縁。口縁部内外面横ナデ(体部)。外面横ヘラミガキ。内面あらいヘラミガキ	暗褐色	070	?
71	"	口径 28.25	(口頸部)・口縁部は外傾し、口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ。頸部内面ナデ	灰褐色	075	IV層 (243)
72 43-18	甕	口径 15.0	(口頸部)・口縁部は斜上方にたちあがり、口唇部は円頭状。口縁部外面に擬凹線2条。口縁部内外面横ナデ(体部)・肩のはる長胴形。外面平行タタキ(一部ナデ)。内面ハケ(0.9cm巾6条)	赤褐色と 灰黃褐色	013	II層 (1)
73 44-33	短頸壺	—	(口頸部)・口唇部は円頭状。頸部に竹管	暗灰色	?	

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
			文のスタンプ 3コ 1組の記号文。口縁部内外面横ナデ。頸部内外面外面ハケ。頸部内面下端ナデ(体部)。内面ナデ			
74 44-31	壺	—	(体部)。外面にうずまき状の記号文。外面ヘラミガキ。内面指ナデ(横)	淡褐色	022	IV層
75 44-32	"	—	(体部)。外面に竹管文 3コの記号文。外面上半ナデ下半ハケ。内外面指ナデ	黄褐色	031	
76	甕底部	底径 5.3	(体部)。外面縦ヘラミガキ。内面ハケナデ(底部)。突出したあげ底。内外面ハケナデ	淡茶褐色	080	V層 (314)
77	甕	口径 17.5 (復元)	(口頸部)。付加状口縁。口縁部は短く外傾。口縁部外面に凹線2条。口縁部内外面横ナデ(体部)。扁球形。外面タタキ。内面ヘラ削り(一部ナデ)	緑っぽい 茶褐色	036	IV層
78	"	口径 18.8	(口頸部)。口縁部は外傾し、口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ。口縁部外面下端に粘土紐の継ぎ目あり(体部)。長胴形の体部。外面左下りの太いタタキ。内面横斜ハケ状ナデ	淡茶褐色	077	III層 (80) 外面スス付着
79 43-19	"	口径 15.0 器高 14.7 底径 4.75	(口頸部)。口縁部は外傾。口唇部は面をもつ。口縁部に弱い稜線2条。内外面横ナデ(体部)。長胴形。外面ハケメ。内面ナデ(一部ハケ)。内面に指頭圧痕	淡黄褐色	009	II層 全体にスス付着
80 43-21	"	口径 13.8 器高 21.3 底径 5.3	(口頸部)。外傾し口唇部に面をもつ。口縁部に粘土紐の継ぎ目あり。口縁部内外面横ナデ(体部)。長方形。外面上半縦斜ハケ。外面下半上から下にヘラ削り後縦斜ハケ。内面上半縦斜ハケ。内面下半ハケナデ、粘土紐外面3カ所内面2カ所(底部)。突き出したあげ底。外面ヘラケズリ(横)。内面ナデ	黑褐色	023	IV層 (30)(36) (89)(90)(150) (162) 外面スス付着 内面うすくスス付着
81 43-20	"	口径 13.4	(口頸部)。口縁部はきわめて外傾。口唇部は面をもつ。内外面横ナデ(体部)。肩のはる長胴形。外面ハケ。内面指ナデ。内面最上半しづら目痕	黄褐色	008	IV層 (25)(93)(139) (241)(246)(249) (252)(253) 外面スス付着
82	"	口径 44.8	(口頸部)。口唇部に面をもつ垂下口縁。口頸部内外面横ナデ(体部)。外面縦ハケ。内面横ヘラミガキ	暗褐色	076	II層

第27表 SD-06 出土土器観察表

1 46-5	広口壺	口径 20.3	(口頸部)。垂下口縁。口縁部は外反。口縁部内外面、端部横ナデ。口縁部外面頸部外面下方に縦ハケナデ。頸部外面下位に縦ハケナデ後横斜ハケナデ。頸部外面下位縦ヘラミガキ。頸部内面ナデ(その上から数カ所斜のヘラあり)	淡茶褐色	031	I b層 口縁部内面黒斑
2 46-4	広口壺	口径 18.1	(口頸部)。垂下口縁。肩部と外面の境目に貼付突帶が1条。口縁端面 頸部外面上位横ナデ。頸部外面中位ナデ。頸部外面中位横ナデ。口縁部内面 頸部内面下位横ナデ後縦の磨研線が数カ所	淡褐色	027	I b層 (20)
3	広口壺	口径 14.3	(口頸部)。垂下口縁。口縁部内面、口縁部端部、頸部外面横ナデ。頸部外面中位縦ナデ後横ナデ。頸部内面斜ナデ頸部下位に粘土紐の継ぎ目2本。口縁端面内面に彩文	淡褐色	026	I b層 (14) 口縁部外面頸部内外面黒斑

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
4 47-9	短頸壺	口径 8.2 (復元)	(口頸部) ・外反ぎみに直立し、口唇部は円頭状。口頸部内外面横ナデ。頸部内外面ハケ(体部)。外面ハケ。内面指押えナデ	茶灰褐色	004	I b 層 (24)
5 47-15	水差	口径 9.6 (復元)	(口頸部) ・外反ぎみに直立し、口唇部は円頭状。口縁部外面横ナデ頸部外面横ナデ頸部内外面、ヘラ傷、ハケ痕(体部)。外面縦ヘラミガキ。肩部内面しばり目痕。内面ヘラミガキ。上位に把手のついていたあとがある	黄褐色	024	I b 層
6 47-13	器台	口径 13.1	(口頸部) ・外反ぎみに直立し、口唇部は円頭状。頸部外面縦ヘラミガキ頸部に透孔?コ	?	028	I a 層
7 47-16	蓋	口径 5.8	(底部) ・端部は円頭状。透孔2コ1対で2対(焼成前に下から上に向かってやや乾燥上にあけた)。端部ナデ。外面ナデ。内面は指押え	淡白褐色	003	I b 層
8 47-14	蓋	径 4.6 厚さ 0.77	(体部) ・2孔1対の透孔2コ(焼成前に両方からあけた)	灰褐色	021	I b 層
9 46-3	無頸壺	口径 5.0 器高 8.45	(底部) ・端部は面をもつ。2孔1対の透孔?コ(焼成前に上から下に向かってあけた)。裾部外面雑なヘラミガキ。端部内外面横ナデ、外面指押え	灰黃褐色 (あずき色)		I a 層
10 50-38	甕	口径 14.6 (復元)	(口頸部) ・ごく短く直立した口縁部で口唇部は円頭状。口縁部内外面横ナデ(体部)。扁球で肩のはる体部・上部に透孔2コ1対が2対(焼成前にあけた)。外面上部ヘラミガキ。外面中央部横ヘラミガキ。外面下部縦ヘラミガキ。外面最下部・内面上部指押え。内面ハケ(底部)・きわめて突出したあげ底。側面ナデ。外面ヘラ削り	灰褐色	007	I b 層 (21)
11 49-26	"	口径 18.2 (復元)	(口頸部) ・口縁部は外傾し、口唇部に面をもつ。口縁部外面に沈線?条。口縁部内外面横ナデ(体部)。外面ハケ(ヘラ痕あり)。内面ヘラ削り(大きな砂粒の移動が目立つ)	淡赤褐色	020	I b 層
12 49-27	"	口径 20.2 (復元)	(口頸部) ・口縁部はきわめて外傾し、口唇部に面をもつ。口縁部外面に沈線?条。口縁部内外面横ナデ(体部)。外面上部ナデ。外面上部以外ヘラミガキ。内面上部横ヘラミガキ。内面上部以外指押えナデ	茶灰褐色	016	
13 50-37	"	口径 15.2	(口頸部) ・口縁部は外傾・口唇部に面をもち、その面に凹線1条。口縁部内外面横ナデ(体部)・球形の体部。肩部外面に斜線紋。外面縦ハケ。内面ナデ	茶灰褐色	015	I b 層 外面スス付着
14 49-29	"	口径 18.4 (復元)	(口頸部) ・口縁部は外傾し、口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)・肩のはる長胴形。外面ハケ。内面上半横ヘラ削り。内面下半縦ヘラ削り	暗褐色	035	I a 層 (8) 外面体部内面スス付着
15 16	底部	底径 5.35	(体部)。外面縦ハケ後ナデ(?)。内面あらい斜ハケ(底部)・突出した平底	黒褐色	008	I b 層 (25) 内外面スス厚く付着
				淡黃灰色	036	外面スス付着

項目番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器番号	備考
17	底 部	底径 7.9	。外面ナデ (体 部) 。外面下位ハケ後斜ヘラミガキ 。内面下位縦ハケおよびハケのあたり (底 部) ・突出した底部。側面ハケ後斜 ヘラミガキ。外面ナデ後ヘラミガキ。内 面指ナデ	暗褐色	030	I b 層 体部外面下位に 黒斑
18	"	底径 5.2	(体 部) 。内外面指ナデ (底 部) ・突 出した平底。側面指ナデ	灰黄褐色 内面黒褐色	005	I b 層 (10)
19 47-10	広口壺	口径 19.6	(口頸部) ・口頸部は外反し、口唇部に面を もつ。口緑部内に列点紋。口緑端面及び 頸部外面に波状紋。頸部外面下位に直線紋 5条。口緑部内外面横ナデ。頸部内面横 ナデ。頸部外面縦ハケ	淡赤褐色	044	I a 層 頸部外面にスス付 着
20 46- 6	壺	底径 6.2	(体 部) ・球形の体部。外面縦ヘラミガ キ。内面上位指頭圧痕。内面中位上部ヘ ラ削り。内面中位下部斜ハケ。内面下位 ヘラ削り (底 部) ・突出した平底。側 面上位ヘラのあたり。側面下位ナデ。外 面ナデ。内面ヘラ削り	内面暗赤 褐色	042	I b 層 体部外面全体スス 付着 体部外 面中位部下位にか けて黒斑 2次焼成がなされ ている
21 47-11	短頸壺	口径 11.0	(口頸部) ・口頸部は外傾ぎみに直立。口 唇部に面をもつ。口緑内外面横ナデ。頸 部外面縦ヘラミガキ。頸部内面上半横ナデ 。頸部内面下半横ハケと縦ヘラのあたり	淡灰褐色	043	I b 層 (23)
22	底 部	底径 6.7	(体 部) 。外面下位縦ヘラミガキ。内面 下位摩滅? (底 部) ・突出したあげ底 。外面ナデ。内面摩滅? ・底部に穿孔 1 コ(焼成後にあけた)	暗褐色 (外面) 黑暗色 (内面)	041	I b 層 (15) 内面全体と底部外 面付近にスス付着
23	"	底径 9.6	(底 部) ・やや突出した平底。外面ヘラ ミガキ。内面斜ハケ。側面下位ヘラ削り 的ナデ。側面上位縦ヘラミガキ	暗褐色	039	I b 層 (19) 内面に黒斑
24	"	底径 4.5	(体 部) 。外面下位ヘラ削り。内面下位 縦ハケナデ (底 部) ・突出したあげ底 。外面ナデ。内面縦ハケナデ	暗赤褐色	045	I a 層
25	蓋	—	(体 部) 。外面縦ハケナデ 。内面ナデ(?)	淡灰褐色	046	内面全体にスス付 着
26	底 部	底径 45	(体 部) 。外面縦及び斜ヘラミガキ。内 面横ハケナデ(部分的にハケナデの上に縦ナ デ) (底 部) ・突出した平底。外面側 面ナデ。内面ナデ	?		I b 層 (22) 底部外面に黒斑
27	"	底径 4.85	(体 部) 。外面下位縦ヘラミガキ(摩滅著 しい) 内面下位ナデ (底 部) ・やや突出 したドーナツ底。内面指ナデ。側面ナデ	黑褐色 (外面) 暗茶褐色 (内面)	037	I a 層 底部面に約 5 カ所 のわら跡 体部外 面下位に黒色物質 塗布
28	"	底径 5.7	(体 部) 。外面下位横ハケナデ。内面下位 横ナデの上に縦ヘラのあたり (底 部) ・ わずかに突出したドーナツ底。外面ナデ 。内面横ナデの上に縦ヘラのあたり	黑褐色 (外面) 暗茶褐色 (内面)	040	I a 層 (6) 外面全体にスス付 着 内面スス付着
29 46- 1	ミニチュア鉢	口径 5.3 器高 4.4 底径 3.3	(口頸部) ・口緑部は外傾し、口唇部は尖頭 状。口緑部内外面横ナデ (体 部) ・肩 のはらない長胴形。外面にアトランダムな 線刻あり、全体的にタッチは弱く施文具は先 端の鋲いものと思われる、内外面ナデ (底 部) ・突出したあげ底。側面指押へ 。端部ナデ。外面指押え	黑褐色	006	I a 層 (4)
30 46- 2	無頸壺	口径 6.0 (復元)	(口頸部) ・口緑部は内傾し、口唇部面をも	赤黄褐色	022	I a 層

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
			つ。口縁部に紐孔が2コ1対で2対(焼成前に表から穿孔)。口縁部外面横ナデ。口縁部内面ナデ(体部)・扁球形の体部。外面上半ヘラミガキ。外面下半ハケ。内面上半ナデ。内面下半ハケ			
31 48-17	高杯	口径 25.4 (復元)	(口頸部)・口縁部は直立し、口唇部は面をもつ。口縁部外面縦ヘラミガキ後横ヘラミガキでまた一部縦ヘラミガキ。口縁部の屈曲部はするどい(体部)・大きな杯部。内面細かいヘラミガキのあと暗文。強いヘラミガキ(表面に5本の暗文)。外面縦ヘラミガキ。杯部外底に指押え痕(底部)・エンタシスの長い脚部。円板充填法。外面ヘラミガキ。内面ヘラナデ的ナデ	黄褐色	009	I b層 脚部のみ(29)
32 48-19	"	口径 23.6 器高 18.0	(口頸部)・口縁部は外傾気味に直立・口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ヘラミガキ。杯部と境目の内面横ナデ(体部)・深い杯部。内外面縦ヘラミガキ(底部)・円錐状の脚部・透孔3コ1対で3対(焼成前に表からあけた)・端部は円頭状。外面縦ヘラミガキ。内面指押えナデ。裾部内外面横ナデ	赤褐色	011	I b層 (5)(6)
33 48-21	"	口径 28.4	(口頸部)・口縁部は外傾気味に直立・口唇部に面をもつ・口縁部の外面に弱い稜線。口縁部の内面横ヘラミガキ(体部)。内面一部縦のヘラミガキ(底部)。円板充填法	黄褐色	001	I b層 (26) 口縁部外面に黒斑 1カ所
34 50-31	"	口径 25.0 (復元)	(口頸部)・口縁部は直立し、口唇部に面をもつ・口縁部外面横ヘラミガキ。口縁部内面横ナデ(体部)。外面細い縦ヘラミガキ。内面細いヘラミガキ	灰褐色 (黒っぽい ところと緑 っぽいところ あり)	014	I b層
35 48-20	"	口径 22.0 (復元)	(口頸部)・口縁部は直立し、口唇部に面をもつ。口縁部に接合痕あり。口縁部内外面横ナデ(体部)。外面ヘラミガキ(ナデたあとがある)。内面ヘラミガキ(底部)。円板充填法	黒褐色と 赤褐色	002	I a層 (2)
36 50-35	"	口径 25.2 (復元)	(口頸部)・口縁部は外反し、口唇部は円頭状。口縁部外面はまばらなヘラミガキ。口縁部内面横のヘラミガキ(体部)。外面まばらなヘラミガキ内面縦ハケ	赤褐色	012	I b層 口縁部内面 朱付着
37 50-33	"	口径 22.2 (復元)	(口頸部)・口縁部は直立し、口唇部に面をもつ。口縁部外面に凹線1条。口唇部面にナデによる(?)沈線2条。口縁部内外面横ナデ(体部)。外面ヘラ削り後ヘラミガキ。内面ハケ(?)	灰褐色	013	I b層
38 48-18	"	口径 25.0	(口頸部)・口縁部は外傾し、口唇部は円頭状。口縁部内外面横ナデ(体部)・浅い椀状の杯部。外面密な縦ヘラミガキ。内面縦ヘラミガキ。内底ヘラミガキ(底部)・円筒状の長い脚部。外面上部ハケ。外面密なヘラミガキ。内面ナデ(ヘラナデ痕もある)	黒褐色 (灰色っぽい 赤色っぽい ところが ある)	025	I b層
39 49-23	高杯 柱状部	—	(体部)。外面縦斜ヘラミガキ。内面ヘラミガキ(?) (単位不明) (底部)・円筒状の長い脚部。外面縦ハケ後、あらい縦ヘラミガキ。内面横ナデ		034	I b層 (11)
40 49-24	"	—	(底部)・円筒状の脚部。外面上端部縦ヘラミガキ。外面ナデ(粘土紐の継ぎ目)。外面下端部縦ハケ。脚台部外面縦ハケ後	黄褐色	033	I b層 (28)

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
41 49-25	高杯 柱状部	—	ヘラミガキ。内面しづれ目痕。脚台部内面上部横ハケ (体部)。内外面、縦ヘラミガキ (底部)。円筒状の脚部。外面ナデ後2カ所に縦ヘラミガキ。外面下端部内面横ナデ。内面下端部横ハケ	淡黄灰色	032	I b層(30) 外面スス付着
42 49-28	高杯脚部	底径 13.1	(底部)。円筒状の長い脚部。裾部は外反し端部は面をもつ。透孔3コ1対が3対(焼成前のやや硬くなった時に両方からあけた)。外面縦ヘラミガキと指押え。内面横ヘラミガキとナデ(土器を3回転させたあとがある)	灰褐色	010	I a層
43 48-22	高杯脚部	底径 12.0	(底部)。円筒状の脚部。裾部は外反し端部は面をもつ。透孔6コ。外面縦ヘラミガキ(粘土紐の継ぎ目)。内面横斜ナデ。裾部外面縦ハケナデ。端部内外面横ナデ	淡褐色	029	I a層(2) 外面スス付着
44 50-36	高杯	口径 16.8 (復元)	(口頸部)。口縁部は外反し、口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)。浅い枕状の杯部。内外面縦ヘラミガキ	淡赤褐色	017	I a層
45	高杯脚部	底径 10.1	(体部)。内外面ヘラミガキ。円錐状の脚部。端部は面をもつ。透孔4コ(焼成前に表からあけた)。外面、ヘラ削りの上からヘラミガキ。内面ナデ。(表面剥離)。端部内外面横ナデ接合痕あり	淡褐色	018	I b層

第28表 SD-01 出土土器観察表

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
1	二重口 縁壺	口径 16.6	(口頸部)。口縁部は外傾。口縁部内面に列点文。口縁部外面に円形浮文+竹管文+波状紋。口縁部内面横ヘラミガキ。口縁部外面横ナデとナデ	淡黄褐色	006	V層
2	"	—	(口頸部)。頸部は直立。外面縦ヘラミガキ。内面横ナデ。口縁部外面に円形浮文。頸部外面下端に刻目突帯(体部)。外面横ヘラミガキ	淡茶褐色	007	V層
3 51-3	鉢	口径 15.05 器高 4.95	(口頸部)。口縁部は外反し、口唇部は内反して尖頭状。口縁部内外面横ナデ(体部)。浅い半球状。内外面横ヘラミガキ(細かい)	淡茶褐色	001	IV層
4 51-4	"	口径 14.5 器高 4.8	(口頸部)。口縁部は外反し、口唇部は尖頭状。口縁部内外面横ナデ(体部)。内外面横ヘラミガキ(細かい)	淡茶褐色	002	IV層
5 51-5	"	口径 14.25 器高 4.7	(口頸部)。口縁部は外傾し、口唇部は尖頭状。口縁部内外面横ナデ。外面横ヘラミガキ。内面横ナデ後細かいヘラミガキ	淡茶褐色	003	IV層
6 51-2	甕		(口頸部)。口縁部は外傾。口縁部内外面横ナデ(体部)。扁球形の体部。外面横及び斜ハケ。内面横ヘラミガキ	暗褐色	005	口縁部体部にスス付着 IV層
7 51-1	壺	底径 3.9	(口頸部)。口縁部は外傾(体部)。外面に間隔をもって20本の線刻。内面指押え(底部)。突出した平底。側面指押え	灰褐色	004	V層

第3節 亀井遺跡出土の卜骨について

1. はじめに

わが国に関する最古の史料とされる魏志倭人伝の条に「其の俗、事を舉い行き來しに、云為するところ有れば、輒ち骨を灼きてトし、以って吉凶を占い、先ずトするところを告ぐ。其の辞は令亀の法の如く、火坼を見て兆を占う。」という一文があり、骨を焼いて、そこに生じたヒビ割れ・色調の変化をみて吉凶を占う風習について記している。その事例を具体的に示す考古遺物として点状に焼灼を施した灼骨（ト骨）がある。ト骨に使用される動物は、鹿、猪の肩甲骨・中足骨、亀甲で、大半は鹿の肩甲骨を好んで利用している。亀トは今までのところ弥生時代に出土例がなく古墳時代以降に出現する。弥生時代に属するト骨は現在60の出土例が知られている。

神沢勇一氏は混屯とした状態にあった日本の各地より出土しているト骨を集大成し、中国大陆でのト骨の発展段階と対比させ技法のうえから次のI—Vの5形式に分類している。^(註2)

- I 整形を全く施さず、素材の片面に点状に灼を加えたもの。
- II 素材の表面の一部を鋭利な刃物で削り、その部分に点状の灼を加えたもの。
- III 素材の片面を大きく削り、平面が不整円形を呈する粗雑な鑽を彫りこんで、鑽の内側に灼を加えたもの。
- IV 整形した素材の片面に、平面が円形・断面が半円形の鑽を設け、鑽の内側に灼を加えたもの。
- V 素材を主に切削によって整形し、片面に平面が長方形の鑽を彫りこみ、その内面に灼を加えたもの。

各々の形式は、II→IV→III・I→Vへとほぼ大陸と同様な変遷を辿ったと推定し、その編年的位置づけを行なっている。一方、新田栄治氏は世界的視野から日本出土のト骨に照準を合せ、民族学的・考古学的にその位置づけにアプローチしている。^(註3) 民族学的にト骨を概観すると、使用される動物種名は、ヒツジ・ハクチョウ・シカ・ノロジカ・アザラシ・ブタ・ヤギ（以上、肩甲骨を利用）、ニワトリ・ガチョウの胸骨を使用している。これらの動物の選定にあっては、それぞれの地域で最も入手しやすい動物骨を用い、狩猟対象の動物捕獲にあっては、それと同じ動物を使用する例が多いことを紹介している。次にト骨法について触れ、手法の点から1) 骨を焼いて生じた亀裂、色調の変化に基づいて占う方法（有灼法）、2) 骨を焼かずに自然のままの状態で骨の表わす特徴に基づいて占う方法に2大別されるとし、さらに前者を全面有灼法と点状有灼法に分類した。これら3つに分類された手法は、空間的に地域を異にし分布していることを明らかにした。それによると、点状有灼法は中国、朝鮮、日本の地域に限られた点、日本出土のト骨の系統を考えいく上で重要な示唆を与えている。

今回の調査において、イノシシ肩甲骨を利用したト骨1点を得たので以下に、その報告をしる

し、あわせて畿内弥生時代出土のト骨について紹介してみたい。

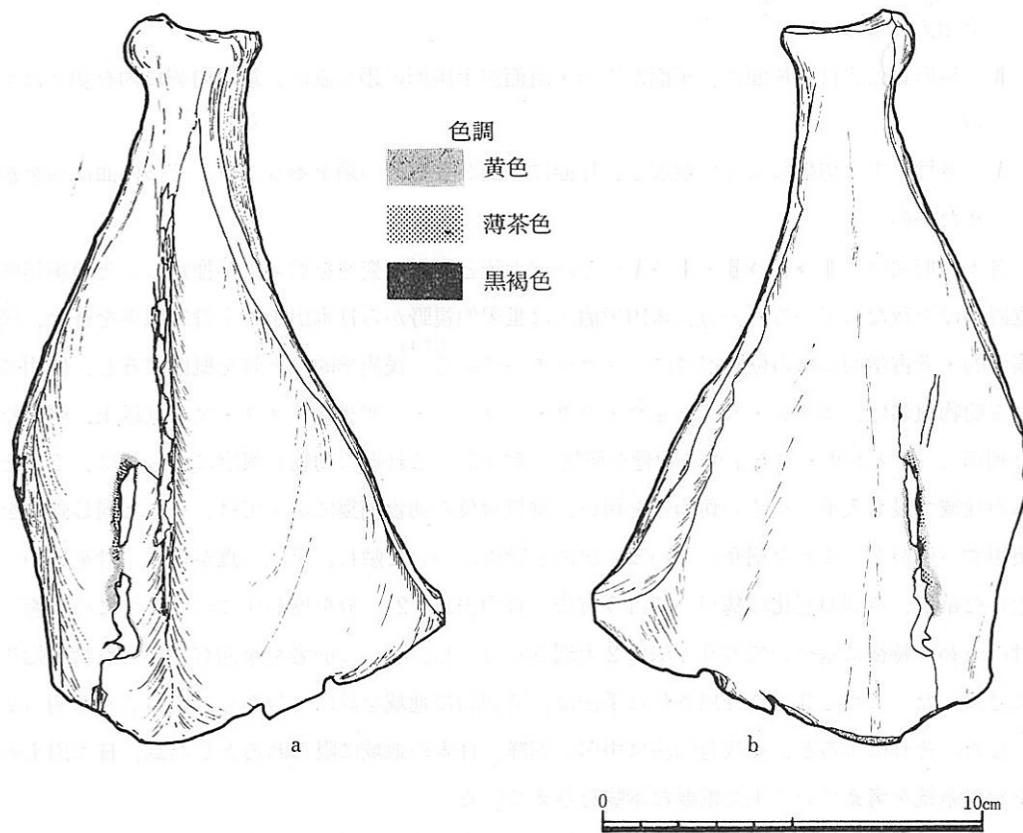
2. ト骨の出土状況及び骨学的特徴

前述のように、弥生時代中期後半 S D-03溝（東地区）1ブロックの（V）層から、外側面を上に向けた状態で出土した。（図版9 a）イノシシ (*Sus scrofa leucomystax*) の右側肩甲骨を利用したもので、保存状態は良好と云える。肩甲棘、背縁の一部を欠失するほかは、完形を良く保持している。関節上結節は完全に癒着しており、成獣の個体のものである。（第153図）。性別は不明。

肩甲骨の計測値については、第29表にまとめている。なお、計測点及び計測項目は、斎藤弘吉氏（『犬科動物骨格計測法』1963）に従い、これをイノシシの計測に採用した。計測器具としては、オフセットノギスを用いた。

ここで、比較資料として計測値を表につけ加えている肩甲骨（L）は、1982年1月に丹波篠山^(註4)で捕獲されたイノシシ（♀）のものである。下頸骨後臼歯の崩出と磨耗からみた年齢は、 M_3 の歯槽部が割れ、今まさに崩出しようとしている段階で Age class 2 と 3 の中間にあり、生後約 1.5~2.5 才に相当するものと思われる。

従って、ト骨に使用された肩甲骨は篠山産イノシシ肩甲骨の大きさと比較して（雄・雌の差異も考慮）やや年齢のすんだイノシシで、約 2.5 才程のものと推定される。



第153図 龜井遺跡出土のト骨 (少) a. 外側面 b. 肋骨面

第29表 イノシシ肩甲骨の計測値

計測部位	ト骨(R) (mm)	現生イノシシ(L) 2.5才♀ (mm)
全長(関節上結節最下端より棘基部頂照までの長さ)	192.4	175.7
頸部最小幅(肩甲切痕前縁よりその対照をなす後縁までの最小幅)	25.3	22.3
下部幅(関節窓後縁端より鳥口突起基部外縁端までの幅)	35.9	34.3
関節窓長(関節窓前後縁間最大長)	29.9	28.8
関節窓幅(関節窓上下縁間最大幅)	23.9	24.2

3. 焼灼状況について

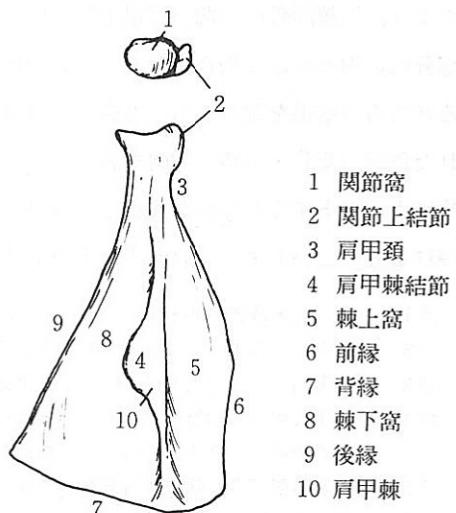
本標本(第153図)に認められる加工痕(整地?)は、唐神遺跡出土のト骨にみられるような後縁を削平(整地)したものとはいいくぶん趣きを異にしている。肩甲棘を根元から人為的に除去し、棘下窓、鋸筋面には鋭利な刃物によるものと思われるこまかにケズリ痕(光沢をおびる)が観察された。前者は、明らかに焼灼面を水平にしようとしたためであろう。後者は、骨表面を削ることにより焼灼面を滑沢・薄平にしようという意図がはたらいたものであろうと思われた。

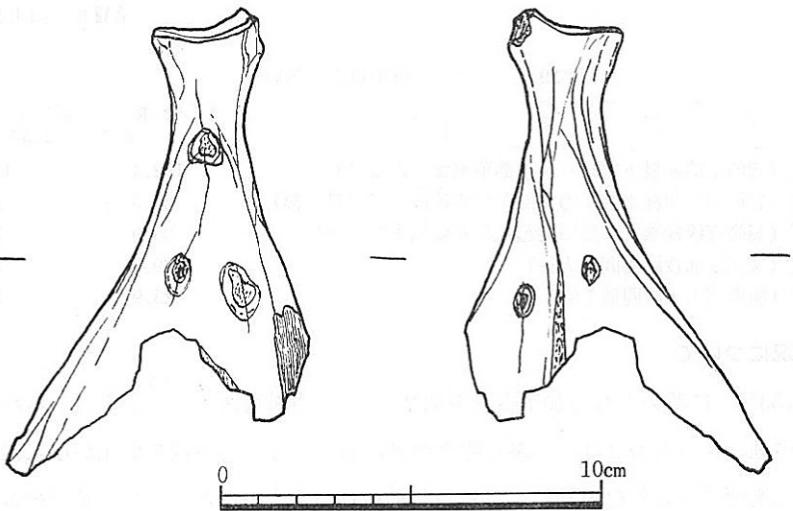
焼灼痕は、外側面からみて棘下窓に1列4カ所、骨が焼けて骨色の変化した部分が観察され、肋骨面にも及んでいる。じかに火にあたったところは黒褐色に変色し、中心から離れるにしたがい幅1mm前後の薄茶色、そして外周に1~3mm幅の黄色に変化した部分が認められた。焼灼の行われた所の骨厚は約1.0mm前後と、最も薄い海面質の認められないところを選定している。その焼け方から考えて、肋骨面に棒状のもので点状に焼灼を加えたものと思われる。外側面にはそれに対応する変化がはっきり現われ、火炙が走り骨の収縮がみとめられた。このようにして外側面に現われたヒビ割れ・色調の変化は占う対象(物)の判断(吉凶)を決定した結果そのものなのであろうか。興味のひかれるところである。

4. 畿内における弥生時代ト骨の出土例

最近の調査によって亀井例のほかに類例は少ないが、森の宮遺跡、鬼虎川遺跡からそれぞれト骨の出土例が知られている。

森の宮遺跡は、上町台地の東端に位置し繩紋時代、弥生時代を主体に經營された集落遺跡である。出土したト骨は、亀井例と同じくイノシシの肩甲骨を利用したもので肩甲骨の大きさから若獣の個体のものと思われる。掲載されたト骨の実測図(第155図)からして、肋骨面後縁、肩甲棘に若干の加工を施している。焼灼痕は肋骨面肩甲頸やや下位に1カ所、肩甲下窓に2カ所、楕円形もしくは不正円形となって残存し、亀裂を生じさせている。前者の焼灼は、骨の厚いところを選定して行っているため、外側面に





第155図 森の宮遺跡のト骨 (引)

達していない。後者は、外側面にも焼灼がみられた。鬼虎川遺跡からもイノシシ、ニホンジカの肩甲骨を利用したト骨が出土している。また近畿自動車道関係の亀井遺跡（KM—K）の調査でも、イノシシ、ニホンジカの肩甲骨を利用したト骨が数例出土している。中にはニホンジカ肩甲骨の肩甲棘にも焼灼を行い、他に類をみないものを含んでいる。

5. 小 結

以上、畿内弥生時代に所属するト骨は、現在までのところわずかに3遺跡（亀井、森の宮、鬼虎川）において、その出土例を確認している。本例を含めて、これらのト骨に共通している点はいずれも弥生時代中期のものであること、使用される動物もイノシシ、ニホンジカに限られることである。このことは、イノシシ、ニホンジカが弥生人にとって動物性タンパク質を得るために重要な供給源であり、かつ銅鐸絵画にも描かれるように最も身近な動物であったことが大きく基因しているのであろう。次に焼灼状況からト骨を視すると大きくは2つに分類される。1) 報告例のように比較的骨厚の薄い肩甲下窓に焼灼を行なう場合。2) 肋骨面肩甲頭、後縁等の骨の厚い部分に焼灼を行なう場合がある。両者の相違は時間的（新旧関係）なものでなく、どの面でトするところの結果を読みとるかの違いなのであろう。前者の場合は、焼灼面と反対の外側面に現われた色調の変化・亀裂の方向を調べ、後者は焼灼面と同一面である外側面に生じた焼灼痕の色調等によってトするところを判断したのであろう。森の宮例では二者が併存しておりそのことを裏づけるものといえよう。鬼虎川出土のト骨は、いずれも後者の例に属している。

註1 (三国志・魏書第30・東夷伝・倭人) の略称。

註2 神沢勇一「弥生時代古墳時代および奈良時代のト骨ト甲」駿台史学 38 1976

註3 新田栄治「日本出土ト骨の視角」古代文化29-12 1977

註4 長谷川善和他「動物考古学確立のための基礎的研究、文部省科学研究費特定研究「自然科学の手法による遺跡、古文化財等の研究、昭和57年度年次報告書」1981 p.388~391

註5 木村幾多郎「長崎県壱岐島出土のト骨」考古学雑誌64-4 1979

註6 「難波宮跡研究調査年報1975~1979.6」財団法人大阪市文化財協会1981.2

註7 松田順一郎氏の御配慮で実見の機会を得た。

第4節 亀井遺跡出土の動物遺存体

1. はじめに

本遺跡の動物遺存体調査の契機は、昭和53年以後数年に亘って、奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡出土の動物骨を調査した際、そこから出土した動物骨の整理をしていた宮崎泰史氏と知り合ったことからであった。昭和55年以来、幾度かに亘って文化財センター長吉分室で亀井遺跡の資料をみる機会を得たのは、後に、文化財センターにはいられた宮崎氏の計いからであるが、和泉池上遺跡の動物骨調査によって筆者らが提起した問題を、亀井遺跡の資料についても考究したかったからである。大阪文化財センターから調査の機会が与えられ、今回その報告をまとめることができた。この報告紙上を借りて、文化財センター理事兼事務局長井上定清氏に厚く御礼を申し上げたい。また、資料の搬入、整理の過程で、種々お世話になった文化財センターの宮崎泰史氏と調査関係の方々、奈良国立文化財研究所の土肥孝氏にも心からの御礼を申上げる次第である。

2. 動物遺存体の概要

各調査区における動物遺骸は、それぞれの地区において、詳しい出土遺物の説明表（第33表）をあげておいた。それによって、遺物の内容は理解していただけるものと考える。ここでは、全体を通して特に注意される遺物について、その問題点と、今後の研究の方針についてのべておきたい。先ず検出された動物種の一覧表を上げておく。

第30表 脊椎動物遺存体種名表

	脊椎動物 Vertebrata
I	軟骨魚綱 Chondrichtyes
1.	エイ目の一一種 Rajiformes fam. indet.
II	硬骨魚綱 Osteichthyes
	コイ目 Cypriniformes
2.	コイ科の一一種 Cyprinidae gen. et sp. indet.
	ナマズ目 Siluriformes
	ナマズ科 Siluridae
3.	ナマズ <i>Parasilurus asotus</i>
4.	ギギ科の一一種 Bagridae gen. et sp. indet.
III	両生綱
5.	無尾目の一一種 Anura (Salientia) fam. indet
IV	爬虫綱
	カメ目 Chelonia

スッポン科 Trionychidae

6. スッポン *Trionyx sinensis japonicus*

有鱗目（ヘビ亜目）Ophidia

7. ナメラ科の一種 Colubridae

V 鳥綱 Aves

8. 種不明 sp. indet.

VI 哺乳綱 Mammalia

食虫目 Insectivora

9. モグラ科の一種 Talpidae gen. et sp. indet.

齧歯目 Rodentia

ネズミ科 Muridae

10. ドブネズミ *Rattus norvegicus*

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

11. タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

12. イヌ *Canis familiaris*

奇蹄目 Perissodactylo

ウマ科 Equidae

13. ウマ *Equus caballus*

偶蹄目 Artiodactylo

イノシシ科 Suidae

14. イノシシ *Sus scrofa*

シカ科 Cervida

15. ニホンジカ *Cervus nippon*

i 魚・両生・爬虫・鳥類

これらの骨の出土は極めて少なく、これらが食料、その他の資源として、どれ程の価値があったか予測し難い。しかし、一つ一つは、四季折々の中で人と自然とを、結びつける仲立ちなる生き物であったろう。魚類は、エイ類を除いて淡水性のものが主で、焼けている骨のあったところをみると、炉端で処理されることが多かったのであろうか。さらにカメ、カエルの骨の焼けているもの出土している。鳥類は、サギ類の比較的大型の骨を得たのみである。上腕骨を輪切りにして管玉形のものをつくっているが、サギ類の長い管状の骨は、それには好都合であったのだろう。単なる装身具以上の意味が込められていたのではないだろうか。家禽と思われる骨を検出することはできなかった。

ii 獣類

検出された種類は少なかった。特殊なものでは、大型のドブネズミの骨が場所によって多かった。溝中に生活し、棄てられた骨を噛り、作物を荒す悪物であったことは今と変りない。

中型野生獣では、タヌキの下顎骨1点を得たのみである。吻端と下頸枝部分に強く咬まれた痕がのこる。この遺跡から出土する骨には、縄紋の貝塚でみるよりもこうした咬み痕のつく骨が多い。イヌの歯痕であるが、亀井のイヌの特に大型であることと関係ないであろうか。

3. イヌ

亀井遺跡からは、弥生中期から後期にかけて飼育されていたイヌの遺骸二例の他に、断片的な骨としても出土している。二頭分の遺骸は、SD-03溝の出土で雌雄の二体であり、幸い頭骨の保存も良好で、弥生時代の家犬として極めて貴重な発見であった。今その詳細をのべる余裕がないが、頭骨について簡単にその特徴を記し計測値をあげておきたい。

〔頭蓋骨〕1号犬

1号犬頭骨最大長175.0mmという大きさは、長谷部分類規準による中型の中等犬に属する大きさであるが、縄紋時代から弥生時代に至る本州各地から知られる資料のなかでは大きな頭蓋である。弥生時代の資料については、まだ計測、報告された資料は少ないが、縄紋時代の関東以西の幾つかの例などと比べると、亀井1号頭蓋のはるかに大きいことが特筆されよう。頭頂骨の中央稜は強く発達し左右の側頭線は、冠状縫合の位置で正中線に合している。前頭骨は同骨頰骨突起付近で強く膨隆しており、これに対して頭頂骨の頂面に僅かに凹む形態を示す。前頭骨から鼻根にかけてゆるやかな凹みを持つが、陥凹するような形ではない。頰骨は特に張り出す形態ではなく、頭蓋の長・幅の割合は石器時代犬と変わらない。歯牙はP⁴、M¹、M²にみる限り頭蓋の割には小さく、石器時代のさらに小さい犬と変わらない。

〔下顎骨〕1号犬

大きく頑丈な骨である。特に注意される形態で、その下縁（喉頭縁）の湾曲が、やや強くみられる点である。これは筆者のみている東日本の縄紋時代犬の中小型にみる形態と比較してのことであって、亀井の弥生犬がやや丸い顔付きをしていたことを示すようである。下顎骨の大きな割には、M₁の大きさは中小型の犬と殆んど変わらない。

〔頭蓋骨〕2号犬

1号犬と共に出土した個体である。1号犬に比べてかなり小さく、長谷部分類規準のさらに一ランク低い中小型の小さい方の大きさになる。雌であろうと考えられている。中央稜は、比較的強いが、後頭骨頭頂部を形成する部分の骨隆起は、1号犬頭蓋のように突出しない。しかしまた左右側頭線は冠状縫合あたりで合する形態をとるところは、1号犬と変るところがない。

前頭骨も、よく膨張する。前頭骨の鼻根部陥凹は僅かにみられるが、その形状は1号犬頭蓋と全く同じである。歯牙の大きさなど、縄紋期の同程度の大きさのものと変わらない。

〔頭蓋骨〕3号犬

頭蓋骨のみ出土したもので、三例中最も小さい。前頭骨左右側頭線は冠状縫合の近くで合するが、1号犬、2号犬例のように稜をなして密着するようではなく、また前頭骨の上部後端部分も平らである。おそらく雌のものであろう。前頭間縫合は殆んど消失しており、三つの頭蓋中最も年令を経たものとみられる。前頭骨の鼻根部陥凹は僅かであるとみられ、その程度は殆んど同じである。

以上にのべた各部位の骨から推定される犬の体高は、雄では46cm、雌では43cmになる。

それは、これまでに知られている西日本の縄紋時代に飼育されていたイヌの多くが、日本犬小型の標準体高♀36.4cm、♂39.4cm前後であるとの比べて、かなり大きな犬であったことになる。

(第32表参照) 中型日本犬の標準体高は♀48.5cm、♂51.8cmである。亀井のイヌは、これには及ばないが、これに近い、古代犬としてはかなり大きなイヌであったといえよう。縄紋時代犬の中でも、東北地方の縄紋貝塚から出土する例には、これに匹敵する大きさの出土例もある。この程度の大きさのイヌが畿内地方で縄紋時代に飼育されていた可能性もないわけではない。これについては今後の調査を待たねばならないであろう。一方、この亀井遺跡の大きなイヌは、

S D-02 前頭骨～吻端部

S D-06 左右下顎骨

の諸例がこれに匹敵する大きさの個体のものである。さらに、八尾市恩智遺跡でも、数個体分知られているイヌの遺骸中、遊離下顎骨で全長131mmという標品があり、これも亀井の雄犬(1号犬)^(註2)と同程度の大きさのものであった。ところで、亀井出土のイヌの骨で注目されるところに、その椎骨に人為的な切断の痕跡、さらに下顎骨にも不確かであるが人為的な穿孔と思わせる孔のある例がある。脊椎骨にみられる切断痕は解体のためであったろう。縄紋時代を通してイヌの解体を推察させる資料は稀である。亀井の場合でも何か儀礼的な意図があつてのことなのであろう。

これについても、今後の資料の追加を待って考えねばならないことと思っている。

文 献

註1 金子浩昌・牛沢百合子：池上遺跡出土の動物遺存体 池上・四ツ池遺跡 第6分冊 自然遺物編
(1975) 大阪文化財センター

金子浩昌：弥生時代の貝塚と動物遺存体、三世紀の考古学上巻所収(1980) 学生社

註2 安部みき子：恩智遺跡出土の獣骨、恩智遺跡(1980) 爪生堂遺跡調査会

第31表 遺構別動物遺存体の概要

落込み I (中期前半)		焼土坑 (中期後半)		S D - 03 (中期後期)	
イノシシ：乳歯残存しM1萌出 6~7ヶ月 1 M2萌出途次 <1.5才 3 M3萌出途次 <2.5才 1 M3萌出直前 <3.5才 1 M4萌出直後 >3.5才 1	イノシシ：乳歯残存しM1萌出 0.5才 M2萌出途次 <1.5才 1 M3完出萌出 3.5才 1 少くとも4個体は存在した。0.5才、1.5才ほどものが多い。 0.5才オーバーで3.5才位の巾があるが、1.5才の頭蓋で占められ四肢骨は出土しない。秋~冬にかけてと殺されたものがいるが、骨は入為的に壊壊されてしまつた。骨は頭蓋骨にすり切ったものもある。	スッポン、エイ、ナマズ、ギギなど水生動物に限られ、シカは出土していない。ただし、スッポン、ナマズなどの骨は極めて断片的なもので、強く火を受けているものが多い。 スッポンも小断片を得たにとどまる。単なる調理の際の器灰がする場所であるか、あるいは祭礼的なる意味である。	イノシシ：d m ² 萌出(M1) <0.5才 M2萌出直後 1.5才 M2(M3) (M3, M4)萌出 2.5才 M3, M4 3.5才 M4 ⁺ 4才 計8個体	イノシシ：M2萌出(M1) <0.5才 M2萌出直後 1.5才 M2(M3) 2.5才 M3, M4 3.5才 M4 ⁺ 4才 E区に指骨、W区に主要四肢骨が目立つ。上腕骨、尺骨、桡骨、萼骨などに咬痕が必ず。老成獻の下頸体は解体・咬痕の他に特別な加工はなかった。成獻の肩甲骨の骨が一部みられた。	1 1 1 2 1
0.5才オーバーで3.5才位の巾があるが、1.5才の頭蓋で占められ四肢骨は出土しない。秋~冬にかけてと殺されたものがいるが、骨は入為的に壊壊されてしまつた。骨は頭蓋骨にすり切ったものもある。	二ホンシカ：シカの頭蓋で、上腕骨1個。 加工品：シカの中足骨を綻びて剥離したものが出土。成獻の肩甲骨の骨が一部みられた。	二ホンシカ：鹿角の加工品の他、頭骨は小片のみで四肢骨が多い。大部分に咬痕あり。上腕骨でみると最小個体数2。	二ホンシカ：鹿角の加工品の他、頭骨は小片のみで四肢骨が多い。大部分に咬痕あり。上腕骨でみると最小個体数2。	二ホンシカ：胸椎～腰椎の一連のものが出土。小型。病変骨で解体痕をもつ。	
S K - 03 土坑 (中期後半)	方形圓溝墓(中期末)	包含層東地区(中期)	S D - 04 潟 (後期前半)	包含層東地区(中期)	
イノシシ：成獻、大型の頭骨で脳顎を食べるための解体であったと思われる。頭部に狩猟時の打撃が原因になつたとも考えられる。陥没傷、後頭部にイスによる咬痕がみられる。頭骨の盛土から出土したもので出土した遺構とあまり変わらないと思われる。	イノシシ：0.5才 2才 < 1 計2個体 逆離傷のみ。四肢骨は上腕骨、桡骨、脛骨、脚骨があり、打削や咬痕がみられる。 二ホンシカ：下頸骨の他、上腕骨、脛骨、距骨がある。頭骨は焼けている。 二ホンシカ：大顎骨のみである。焼けて、黒變したり、咬痕が付着したりする。	イノシシ：0.5才 1.5才 < 1 計2個体 焼けた上腕骨の他は四肢骨なし。 二ホンシカ：未萌出の臼齒破片のみ。 加工品：シカの中手or中足骨利用の刺突具。	イノシシ：遊離歯のみ。1~2才の若獣2個体。四肢骨は脛骨以下の後肢が目立つ。 二ホンシカ：ほぼ完存する尾角が目立つ。角坐骨をのこす。切断度角は唯一の例。他に脊柱もあり。四肢骨も多く、大部分に咬痕が付着。 イス：中型の犬に匹敵する上腕骨を保有。 タヌキの下頸骨。ヒトの大腿骨、骨針。量的には二ホンシカがイノシシを凌ぐ。しかし下頸骨のはば完存する例はこれが唯一である。	イノシシ：遊離歯のみ。1~2才の若獣2個体。四肢骨は脛骨以下の後肢が目立つ。 二ホンシカ：ほぼ完存する尾角が目立つ。角坐骨をのこす。切断度角は唯一の例。他に脊柱もあり。四肢骨も多く、大部分に咬痕が付着。 イス：中型の犬に匹敵する上腕骨を保有。 タヌキの下頸骨。ヒトの大腿骨、骨針。量的には二ホンシカがイノシシを凌ぐ。しかし下頸骨のはば完存する例はこれが唯一である。	
K M - H 1, H 2 S D - 06 潟 (後期前半)	S D - 02 大溝 (後期中期)	S D - 01 潟 (古墳時代前期、布留期)			
イノシシ：0.5才 1 1.5才 < 1 2.5才 < 1 犬歯が目立つ。雄、雌それぞれ若獣の大歯があり、乳大歯もみられる。四肢骨なし。	イノシシ：0.5才 > 1 1.5才 ~ 2才 1 3.5才 < 1 計3個体 イノシシの四肢骨が殆ど出土しない。半才にみたない若い個体は頭骨がほぼ形を保つて埋存したものらしい。 二ホンシカ：2.5~3.5才の比較的小い個体が2個。骨角器の素材となつた残片が出土している。 イス：大型のイスの頭蓋の前半部が出土。それにづく四肢骨はない。	ウマ：上頸臼歯一片のみ。			

第32表 級文・弥生期家犬の計測表

計測部位	小型犬	吉胡	弥生期・恩智	細文期・吉胡貝塚		後期SD-06	中期	中型犬	恩智遺跡	弥生期・龜井遺跡	弥生期・恩智遺跡						
				後・晩期													
				♀(若)	♂(若)												
最大頭骨長	×-155	147	146	156~170	156	—	—	—	171~185	175	160						
脳頭蓋長	×-83	80	82	84~93	83	—	—	—	94~103	96	84						
最大頭蓋巾	×-54	51		55~59	52	58	—	—	60~64								
頬長N~P	×-76	72	72	77~84	77	—	69		85~92	84	80						
吻長(眼窩)	×-64	63		65~72	68	—	61		73~80	74	71						
上顎巾	×-52	51		53~57	52	—	—	—	58~62	59?							
上臼齒列長	×-52	53	51	53~57	58	(55)	50		58~62								
下顎骨長(頸)	×-113	107	107	114~124	116	(119)	—	117	120	125~135	128						
下臼齒列長	×-60	59	56	61~65	63	65	—	61(歯槽)	65	66~70	121						
上腕骨長	×-120	114		121~135	—	135	107		136~150	144	136						
桡骨長	×-115	—		116~130	117	124	102		131~145	—	133						
尺骨長	×-140	—		141~155	138	—	122		156~170	171	156						
大腿骨長	×-135	—		136~150	135	143	—		151~165	158	148						
胫骨長	×-130	—		131~145	134	—	—		146~160	157	146						

方形周溝墓

哺乳綱

イノシシ

* L M_2^{++} $\frac{1}{2}$ のみ残欠
頬側のみを残す破損歯である。咬耗は僅かで、 M_3 は未萌出であったと推定される。

* R M^3 (ℓ .32.0, w18.5)
主要咬頭は未咬耗段階の歯である。おそらく僅かに先端のみ露呈した程度の萌出であったと思われる。

これと別に臼歯の断片6点が出土しているが
これも咬耗のごく弱い歯のものである。

* R 上腕骨 d. (b.48.5)
よく成育した大型個体のものであったと推定される。鉄分らしいものの付着物がみられる。骨幹はほぼ中央で折れている。

* L 桡骨 p. (b.32.6 ℓ .21.3)
p.近くのみをのこす。上記上腕骨よりはるかに小さい。

* R 股骨 s.
上部の折れ口部分に咬み痕が著しい。下部の折れ口は新しい。大型ではない。

* 中節骨 d.
破片

二ホンジカ
椎体部分
肋骨片

イノシシ
or
シカ

* L I₁
歯冠部のみ

* R md. (P₁ · P₄)
粘土中になお埋存の状態で採集されている標本で骨体部は半ばを破損。

* L 上腕骨 d. (b.43.5)
滑車部分の前面と後面を失う。後面の削れは新しいもの。前面の滑車部分が大きく欠けるのは、珍しい破損である。関節部で分断しようとして、石器でこの部分をたたき割ったものらしい。

* R 股骨片 d.
全体の $\frac{1}{3}$ をのこすのみの小片。

* R 跖骨 } 断片
* L 跖骨 } 断片
踵骨の破損は新しいもの。距骨は焼けてもろくなつたものが欠けたらしい。焼けこげた痕跡がある。

加工品

骨針状のもの的小断片
現存長 9.0 中央径 4.0×5.0

小片のため原形は不明、焼けて灰白色化、表面に細察痕があり、整形時の加工であろう。

灰白色に
焼けた小
片 5
(鳥骨?)
その他 7

SD-03E

硬骨魚綱

ナマズ

* L 鎖骨
遠位端を僅かに欠損する。

両生綱

カエル類

* 1 ブロック(V)層鳥口骨
* 2 ブロック(V)層肩甲骨、副蝶形骨
椎体、後頭骨 L

爬虫綱

スッポン

* 3 ブロック(V)層大腿骨片

鳥綱

* 種不詳

哺乳骨

ドブネズミ
* 環椎、軸椎
頸椎、胸椎
腰椎、肋骨

* 上顎骨
* R > 下顎骨
L

* 頸椎、腰椎

* 2 個体分位の埋存骨はあったのである。

R · L 大腿骨、R 胫骨
R 上腕骨 2
* L 大腿骨、R 骨盤
* R 尺骨、R ral

イヌ

* 腰椎No.1~6
No. 6 腰椎の後端は棘突起が斜めに切斷される。
胸椎No.13
左側乳頭関節突起に切り込みがある。
棘突起先端に病変?

中節骨

脛骨

骨幹部に横位に走る筋肉の付着部で、骨幹部は骨膜剥離され、骨膜は骨幹部に付着する。骨幹部は骨膜剥離され、骨膜は骨幹部に付着する。

イノシシ

- * L 上顎骨片 ^{④, +++, 1} (l.16.25, w 13.6)
M³の完全萌出段階
- * L M₁ 後端咬頭のみ断片
M₃は未萌出段階であろう。
- * L i¹、R i¹、R の方が咬耗進んだ歯
- * L m¹
dm¹萌出段階のもので、M₁は未萌出
- * R 下顎骨角部、M₃の完全萌出以前の若い個体の下顎骨と思われる。
- * R 側頭骨外耳孔部
M₃萌出前の若い個体の頭骨と思われる。
- * L M² 後端欠損
M²萌出直後で、M₃は未萌出段階

* R 肩甲骨ト骨として利用されているもの。肩甲骨の中央を走る肩甲棘の上側、棘上窓の部分下寄りの位置に孔があき焼けた痕跡がみられる。その部分を表裏削っている。

- * L 上腕骨
d 部分は欠ける。骨幹部に咬み痕下端に金属刃による切り口、横位につく擦痕あり。
- * R 第3 中足骨 p~s
- * 第3 or 4 指中節骨
- * 第2 or 5 指 d. ep
- * L 跖骨片
- * L 寛骨片 若獣
- * R 第4 手根骨
- * L 第4 手根骨
- * L 寛骨片 若獣

肋骨片 2
焼骨 1
小骨片 17

ニホンジカ

- * 鹿角小片
- * 鹿角加工品
落角利用、角座部より3.5cm程上部に海綿体部を切り取る深さの切り込みがあり、そのままの中で角幹部を切除。残余部分の先を細く尖らしたもの、かなり使用されたらしく全体に磨滅。くさびなどに使ったものか。
- * L 下顎骨関節突起

- L 上腕骨 d. (w.42.1)
- L 尺骨
肘頭部強く咬まる。
- R 桡骨 d. 前面に横位の短かい擦痕
- R 大腿骨 p.
部分的に焼けている。
- 大腿骨 ep.
- L 腕骨 p~s. 一部に咬み痕
- R 第3 手根骨

加工品

現存長10.0、径8.6×10.7、骨厚1.4±、短かい管状製品、鳥骨上腕骨幹部の輪切したもの。鋭利な擦痕がつく。材料となった骨はアオサギ位の大形で、長い上腕骨がえらばれたものと思われる。

S D - 0 3 W

両生綱

カエル類

胫腓骨
上腕骨

爬虫綱

ヘビ類
* 椎体 2

哺乳綱

モグラ類

上腕骨片

ネズミ類

* 頭蓋骨 1

* 椎骨 (腰1、頸1、尾10)

肋骨 3

L 肩甲骨、L 尺骨、R 大腿骨

中手、足骨 7

		犬歯 1 *(第2堆積層下) 尾椎 1、椎体 2 (胸) R 尺、橈骨、R・L 寛骨、P L 大腿骨、R L 胫骨、中手足骨 5
		* 頭蓋の一部、環椎一部、中手根骨 2 橈骨、胸。尾椎、各一種
		* 尾・胸椎各 1、肋骨 1 (植物層 2 の下層) 胸・頸椎各 1、肋骨 3 L 寛骨 1、R 胫骨 1、橈骨 2 最下層 (7 ライン沿セクション) L 寛骨
		指中節 1、その他、腰椎 1
イヌ		* R 寛骨片 * R 寛骨 * 胸骨剝状突起
イノシシ		* L 橋骨 p. 頭部に咬み痕 木層より上位 * L 尺骨 s ~ d を欠く 肘頭部に咬み痕、外側に細かい擦痕 * L 寛骨 上・下の両端は食肉獣によって咬まれ、大きく欠損している。四肢骨のなかで最もよく咬まれている部分である。 木器出土層 * 中節骨 植物層 * 肋骨などを裂いたもの
ニホンジカ		* L 上腕骨 d. 破片 滑車部分の小断片、おそらくイノシシと思われる。若い小さい個体のもの。
頸椎片		* R 上腕骨 d. 左右の両側がこわれている。おそらくひび割れていたところから割れたものであろう。 * R 上腕骨 d. (w. 42.0) 大形の上腕骨である。 * L 橋骨 d. (w. 37.0)

加工品	
鹿角加工品	N~O・6~7 細く裂いたものを周囲研磨、基部を残すもの、ヘアーピン状のものか。 現長 26.4
爬虫綱	
スッポン	
腹甲板片 3	
哺乳綱	
イノシシ	* 後頭骨 後頭鱗、後頭頸、側頭骨左側のみ部分を含めた骨からなるものであるが、のこっている部分は後頭部分に限られる。頭頂骨の一部がのこっており、頭蓋を頭頂骨のほぼ中央あたりからたたき割ったものと考えられる。これによって、頭蓋後頭部は割れ、頭蓋腔が露呈したであろう。その後、打ち捨てられている間にイヌなどが頭蓋周囲、特に後頭鱗上部、後頭頸、頸骨突起部分をかじり、かなりの咬み痕をついたと思われる。なお時頭鱗直上に深い陥凹がみられる。
ニホンジカ	* R 大腿骨 ep. が完全に化骨化していない状態にある。焼けこげた痕跡がある。腓側頸欠。 胫側頸面に食肉獣による咬み痕がつく。 滑車の両側稜部部分にもかまれたり、焼けて骨がかけたりしている。
	* R 大腿骨 d. 関節部周囲に咬み痕 上記のR 大腿骨 s よりはるかに大形、雄と思われる。骨幹の割られている位置はR・Lともほぼ同じ。
	* R 胫骨 d. ep. はずれ。
	* R 胫骨 d. 破片 * R 頻骨 咬み痕
	* R 距骨 全面に強い咬み痕
	* 中手・足骨d. 滑車部の脱れたもの
	* R 第2・3足根骨

焼骨片 4
骨片 41

	S K - 0 3 土坑
爬虫綱	
スッポン	
腹甲板片 3	
哺乳綱	
イノシシ	* 後頭骨 後頭鱗、後頭頸、側頭骨左側のみ部分を含めた骨からなるものであるが、のこっている部分は後頭部分に限られる。頭頂骨の一部がのこっており、頭蓋を頭頂骨のほぼ中央あたりからたたき割ったものと考えられる。これによって、頭蓋後頭部は割れ、頭蓋腔が露呈したであろう。その後、打ち捨てられている間にイヌなどが頭蓋周囲、特に後頭鱗上部、後頭頸、頸骨突起部分をかじり、かなりの咬み痕をついたと思われる。なお時頭鱗直上に深い陥凹がみられる。
ニホンジカ	* R 大腿骨 ep. が完全に化骨化していない状態にある。焼けこげた痕跡がある。腓側頸欠。 胫側頸面に食肉獣による咬み痕がつく。 滑車の両側稜部部分にもかまれたり、焼けて骨がかけたりしている。
	* R 大腿骨 d. 関節部周囲に咬み痕 上記のR 大腿骨 s よりはるかに大形、雄と思われる。骨幹の割られている位置はR・Lともほぼ同じ。
	* R 胫骨 d. ep. はずれ。
	* R 胫骨 d. 破片 * R 頻骨 咬み痕
	* R 距骨 全面に強い咬み痕
	* 中手・足骨d. 滑車部の脱れたもの
	* R 第2・3足根骨

焼けた小
骨片

	S D - 0 8
	焼けた骨 5 骨片 3

SD-05

イノシシ	* 乳臼歯と思われるものの破片、歯冠部を全く欠損する。		片 1 その他小片
エイ類	軟骨魚綱 * 椎体 1		
ナマズ	確骨魚綱		
ギギ類	* 椎体癒骨 1 胸鰭棘片 2		
スッポン	椎体 1		
	爬虫綱		
	* 甲骨片 1		

SD-01

哺乳綱	
* ウマ	

R 上顎臼歯 P₃

その他の

イス	* 中手・中足骨
ニホンジカ	* 肩甲骨片 1

包含層東地区（中期）

イノシシ	<p>* 後頭骨 左後頭骨外側部大後頭孔部分の破片で、後頭頸部分は欠損。</p> <p>* L M₁^{++, -} (l.18.0, w.11.4) 前部咬頭の++は、エナメル質に最小孔のあいた段階で、若い個体のもの。dm₄のがのこり、M₂は未萌出段階である。</p> <p>* R j₂⁺ 上記のM₁と同時に採集されているが、咬耗の程度は、ほぼ同じであったと推定される。</p> <p>* L M₂^{++, +} 前咬頭の++は最小孔のあいた段階。萌出間もなくのもので、M₃は未萌出であったと思われる。</p> <p>* R 下顎骨と連合部 吻端近い部分から dm⁴位置までのこる破片 ただし dm⁴は½弱のみ。 上にあげてあるM₁及びi₂はこの下顎骨に付く可能性もある。</p>	<p>* 手根骨片 焼けており、破損。</p>
ニホンジカ	* 臼歯破片 1 未萌出歯	

加工品
刺突具

シカの中手or中足骨を極めて細く裂き、その両側を研磨して刺突具としたもの。

現存長 39.3 同巾 5.4 厚 3.6

表、裏両側面には自然面ものより、特に入念な加工のものとは思われないが、両側部は長軸に直交する横方向の細擦痕がつく。

SD-04

イノシシ	哺乳綱		
	* RI ₃ 咬頭欠く、RI ₁ 破片	* 中節骨Ⅲor V	
	* Lp ¹	* L脛骨 p~s	
	* LP ₄ 未萌出歯	頭部の同縁部分に咬み痕がつくるが、骨表面を欠損している部分は一部分である。	
ニホンジカ	* LP ₃ 残んど咬耗せず	* L脛骨 s	
		* R 中心足根骨片	
		下手or中手or中足骨	
			下頸破片
腰椎 1	* 切断鹿角 現長 104.0 (V)層	* R 脛骨 s	
頸椎No.4	R 角座骨と角座部分をのこす破片。下端の角座骨部分には前頭骨から切断した際の金属刃による切痕が明瞭に見える。およそ前後方向から斜めに切っているので、切断の後が、くさび状に光っている。	* L 脂肪骨 p. ep. 部分	
咬まれた痕がある。 大形	角座部は周囲から端部に切られて、角座部分の突き出しがみられなくなっている。角幹部が折れているために先端の形が不明である。	* R 上腕骨 d.	
頸椎後関節面部分	* 落角片 (第100図-17) 角座上 3 cm 程をのこすのみの小片。 角座部周囲径 42.0 (前後径) 折れ口部分の一部に斜め上方から切り込む金属刃による切痕があり、この高さのところで切断しようとしたものである。	小さい上腕骨である。滑車面と左右の両側に咬み痕があり、特に尺側上顆部分と桡側の一部は海綿質が露呈している。	
イス	* R 下頸骨 (P _{2,3} M ₁₋₃)、M ₃ → 2.5 year	* R 上腕骨 d. w.44.3	
	吻端及び筋突起の一部を欠く他はほぼ原形を保って出土した唯一のシカの下頸骨である。吻端の欠損は咬まれて失ったものらしい。筋突起の場合も同様である。	大形の上腕骨であり、おそらく雄折れ口はほぼ平らであったらしい。滑車面の一部に咬み痕。尺・桡両側部は咬まれて海綿体が露呈、特に桡側上顆部分の咬み痕が著しく大きくなっている。咬みくだかれたものである。滑車孔内側の尺骨側に齧歯類の咬み痕がつく。	
	吻端のおとがい孔の後方に縦方向につく3条の切り傷がある。(IV層出土)	* R 中手骨 p.d. 両端を欠く	
	* 鹿角片 焼けて灰白色 1 同時に焼けた骨片 6 個が出土している。	両端欠損部分が原形をよく止めていないので欠損理由が明らかでない。	
	* 鹿角分岐部 L (第98図-164)	* 基節骨 d~s	
	幹部側に輪切りのための切り込みがある。	* L 桡骨 S	
		外側部分の現長 49.0 程の小片である。後面に尺骨との接合部の骨の凹みがみられるが、その部分に縦方向に付く多くの擦痕がつく。このような部分に何故こうした擦痕がつくのか。	
		* L (2 + 3 足根骨)	IV層
	* 中節骨		イノシシ or シカ 骨片多
	ø.26.4		
		* R 肩甲骨とその破片 IV層出土。	
		* R 上腕骨 s~d (d.w.30.0)	骨片20数 片 肋骨片 7
		長谷部分類による中型犬の大きい方にはいる。	

タヌキ

* R 下顎骨 ($P_{3,4} M_{1,2}$)
 P_2 より前、下顎枝部分を失う、割れめに
 咬み痕、咬耗は弱い。(第101図-324)

ヒト

* 大腿骨の割れたもので小断片多数
 (第100図-213)

加工品

骨針 (第110図-88)

現存長 75.0 基部の方が欠けており、さらに長いものであったはず。よく研磨されてつくられた製品。
 最も太い部分のd.2.5。

KM-H 1 SD-0 6

哺乳綱

イヌ

* 環椎
 * 軸椎 * 左右下顎骨

* 中節骨
 * 中手・中足骨 2

イノシシ

* L C ♀
 尖端を欠損するが、咬耗は弱いものらしい。

* R C ♂
 尖端が破損するがほぼ復原できる標本。
 細く若齢の犬歯である。

* R C ♂

* L M₂ (l.21.0, w.13.8)

* R C 乳犬歯

ニホンジカ

* R M²

* 中手・足骨 d. 破片
 * L 中心十第4 足根骨
 前面水平位にうすい擦痕がつく

18 燃骨 9

硬骨魚綱

ナマズorギギ類

* * 腹椎骨 1

爬虫綱

ヘビ類

* * 椎骨 2

KM-H 2 SD-0 6

両生綱

イヌ

* 肋骨片 1

* L 下顎骨 ($P_3 \cdot P_4$)
 咬耗が全くなく、骨体もうすく若い個体の
 ものと思われる。

* 頭蓋骨 中小型犬

イノシシ

* 頸椎骨片

若齢

* M²? (破片のため不確実標本)
 咬耗は+++、M²とすればM³は既萌出。

* 縦に割れて
 いる。

ニホンジカ

	* 中手or足骨 d. 破片 焼けている。	肋骨などの破片 6
	* R 大腿骨 小転子部分のみの断片	
	* L 距骨 (l.39.1, 36.7)	
	* 基節骨 1 周囲には咬み痕が全面につく。 (珍しい咬み痕)	

SD-02

哺乳綱

イヌ

R・L 前頭骨、上顎骨、L 鼻骨、頬骨
R (P²・P⁴) 南セクション最下層
前頭骨から吻端にかけてのもので、それ以後の骨を発見することができなかった。頭骨の各縫合線は化骨化していないので若い個体のものである。頭頂部とは縫合線の位置で分離しているので、おそらく自然遊離なのであろう。
左右の前頭線は冠状縫合部で合致。雄の可能性がある。大形のイヌの骨である。

イノシシ

* R M₁⁺⁺ (l.16.7, w.10.65)
++の咬耗はやや進行して、咬頭との連続がはじまっている。この段階のものではM²が萌出終了し、M₃の萌出する直前位の時期になろう。M₂部分の歯槽は開口するが歯は出でていないであろう。

* R 頭頂骨、R・L 頬骨、涙骨、R 上顎骨、歯はR L のものがある。

$$\begin{array}{cccc} \text{R} > (\bar{dm}^2 & \bar{dm}^3 & \bar{dm}^4 & < M^1 >) \\ \text{L} & & & \end{array}$$

$$\begin{array}{cccc} \text{R} > (c & \bar{dm}_3 & \bar{dm}_4 & < M_1 >) \\ \text{L} & & & \end{array}$$

下顎のM₁でみると限り、M₁の萌出は咬頭が数mm出た程度である。M₂が包埋していたが、現在不明。

下顎骨は、一応下顎枝まで残るので、ほぼ完全な形で埋存していたのであろう。

頭骨もかなり破損していたが、ほぼ形を保ったものが埋存していたのではなかろうか。

* R M₃
最後端の咬頭をのこすのみ。おそらく萌出直後の歯であったろう。

ニホンジカ

* LM³ 未萌出歯 歯冠高21.65
Wear Index 7 → 2.5year
* LM³ 歯冠高 18.6
Wear Index 6 ~ 7 → 3.5year
* 鹿角片
角幹部分で、縦方向に切断した面があり
金属刃が使われている。
現長 30.4mm
角製品製作の未成品か、その残余であろう。

* 中節骨

右中節骨の左側の骨頭部と右側の滑車部
が離れていた。左側の骨頭部は右側の滑車部
より外側に位置する。左側の骨頭部は右側の滑車部
より外側に位置する。

左側の骨頭部は右側の滑車部より外側に位置する。
左側の骨頭部は右側の滑車部より外側に位置する。

左側の骨頭部は右側の滑車部より外側に位置する。
左側の骨頭部は右側の滑車部より外側に位置する。

左側の骨頭部は右側の滑車部より外側に位置する。
左側の骨頭部は右側の滑車部より外側に位置する。

* L 上腕骨 d.

左側の骨頭部は右側の滑車部より外側に位置する。
左側の骨頭部は右側の滑車部より外側に位置する。

左側の骨頭部は右側の滑車部より外側に位置する。
左側の骨頭部は右側の滑車部より外側に位置する。

動物遺存体の写真説明

〔第 156 図〕 イノシシ及びニホンジカ

- 1：イノシシ 左下顎骨 頰側面 (S D-03W)
2：イノシシ 環椎 (落ち込み 1)
3：イノシシ 腰椎後面 (S D-03W)
4：ニホンジカ 右上腕骨 前面 (S D-03W)
5：ニホンジカ 左上腕骨
6：イノシシ 左上腕骨
7：イノシシ 左尺骨 (S D-03W)
8：イノシシ 左寛骨 (S D-03W)
9：イノシシ 左橈骨 (S D-03W)
10：イノシシ 中節骨 (S D-03W)
11：イノシシ 中節骨 (S D-03E)
12：イノシシ 切歯 (S D-03W)
13：イノシシ 切歯 (S D-03W)
14：イノシシ 前臼歯 (S D-03W)
15：イノシシ
16：イノシシ 後臼歯 (M_3) (S D-03W)
17：イノシシ 後臼歯 (M_3) (S K-03)

〔第 157 図説明〕 ニホンジカ

- 1：右上腕骨 (S D-04)
2：右上腕骨 (S D-04)
3：左橈骨 (S D-03W)
4：左橈骨 (S D-03E)
5：左尺骨 (S D-03E)
6：右大腿骨 (S D-03E)
7：左脛骨 (S D-03E)
8：左脛骨 (S D-04)
9：中足骨 (S D-04)
10：右大腿骨 (S D-03W)
11：左大腿骨 (S D-03W)
12：右踵骨 (S D-03E)
13：基節骨 (S D-06)
14：左距骨 (S D-06)

〔第 158 図説明〕 ニホンジカ

- 1：角 (S D-04)
2：角 (S D-03E)
3：角 (S D-04)
4：角 (S D-04)

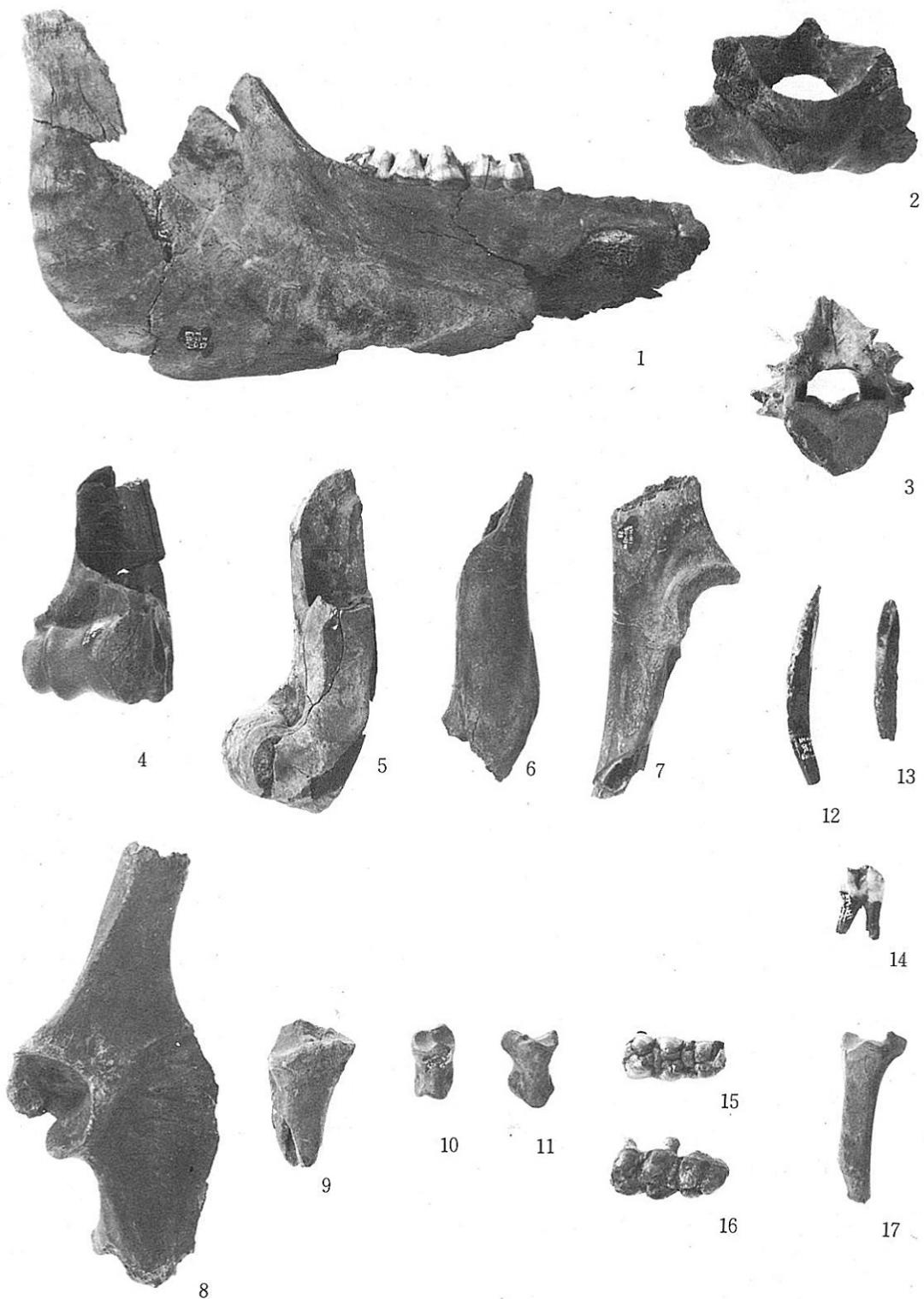
- 5：右下顎骨 (S D-04)
6：第 4 顎椎 (S D-04)
7：顎椎 (S D-03W)

〔第 159 図説明〕 S D-02出土のイノシシ幼獣

〔第 160 図説明〕 ネズミ

- 1：頭蓋骨 (S D-03W)
2：頭蓋骨 (S D-03E)
3：環椎 (S D-03E)
4：軸椎 (S D-03E)
5：左下顎骨 (S D-03E)
6：右下顎骨 (S D-03E)
7、8：覽骨 (S D-03E)
9、10：大腿骨 (S D-03E)

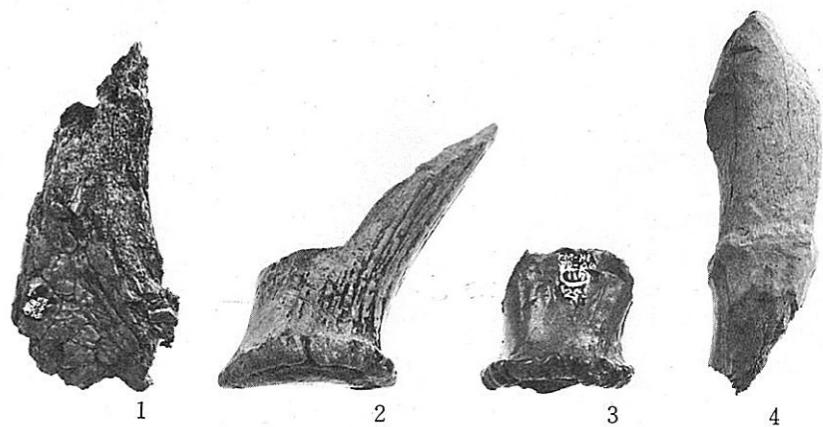
一個体分



第156図 イノシシ及びニホンジカ ($\frac{1}{2}$)



第157図 ニホンジカ (1/2)

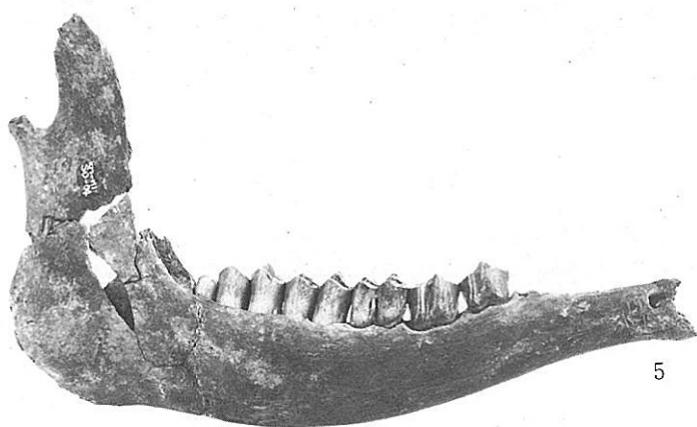


1

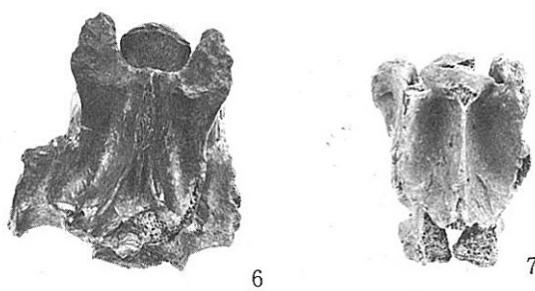
2

3

4



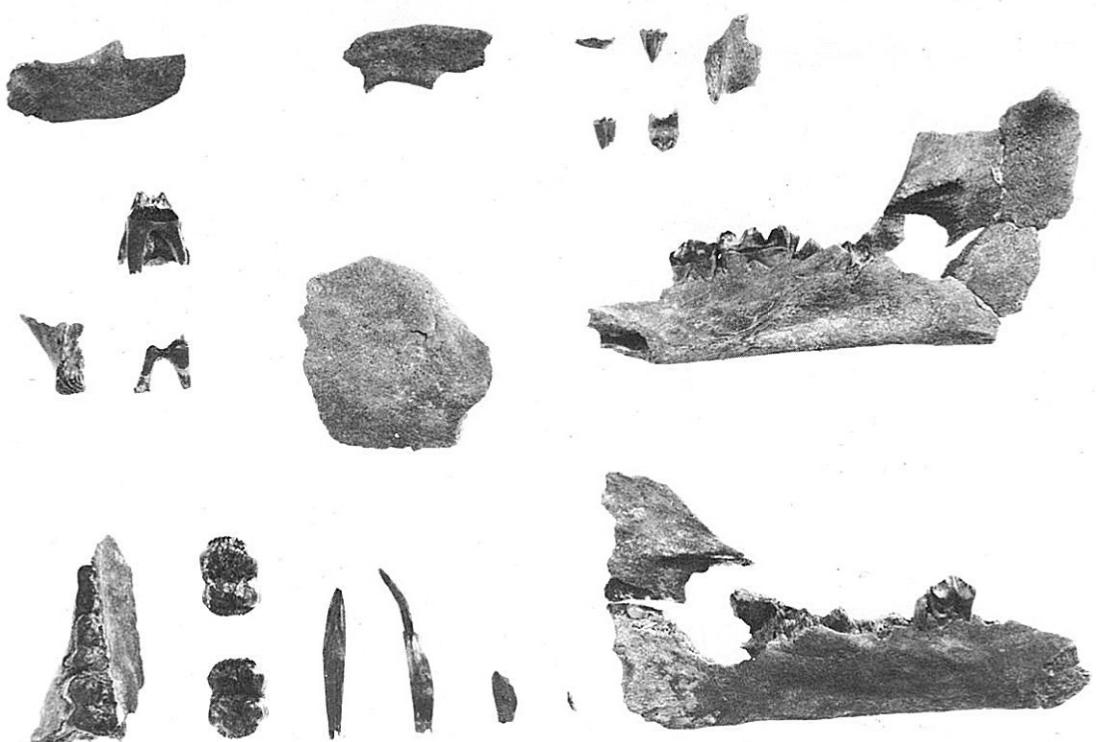
5



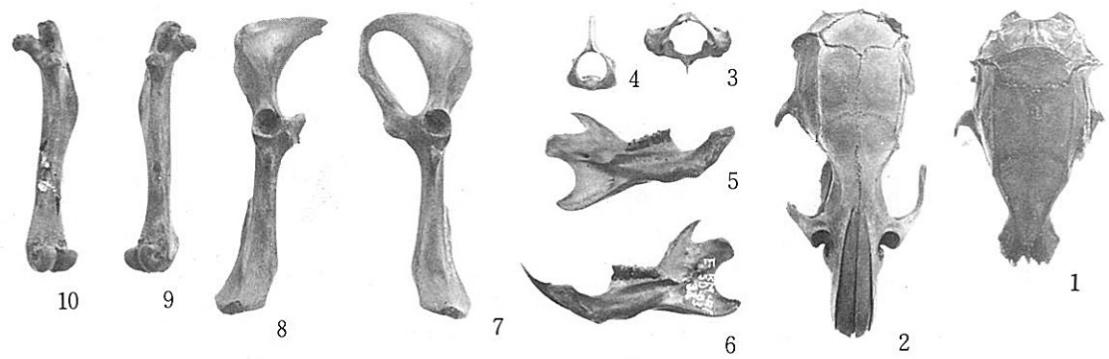
6

7

第158図 ニホンジカ ($\frac{1}{2}$)



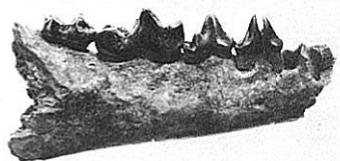
a



b

a 第159図 SD-02出土のイノシシ幼獣 (♂)

b 第160図 ネズミ (♀)



第161図 タヌキの右下顎骨 (SD-04) ($\times \frac{1}{2}$)



第162図 ナマズ (SD-03) ($\times \frac{1}{2}$)



第163図 カエル (SD-03W) ($\times 2$)



1



2



3

4

第164図 小動物

第5節 亀井遺跡のイヌについて

1. はじめに

イヌは縄紋時代の早期から家犬として存在し最も早く家畜化された動物であったといわれている。

古代家犬の研究は、長谷部言人、直良信夫、斎藤弘吉氏等によって早くよりなされている。長谷部博士はヨーロッパ産の古代犬、*Canis familiaris palustris*・*Canis familiaris ladogenis*・*Canis familiaris intermedius*・*Canis familiaris inostranzewii*・*Canis familiaris matns optimoe*を基準として日本出土の古代犬を頭蓋、四肢骨の大きさから各々を小・中小・中・中大・大の五型式に分類され、その基準を表示した。(第34表)。

(註4)
第34表 家犬頭骨及び四肢骨長幅標準表

測目	形種	小	中小	中	中大	大
最大頭骨長		×—155	156—170	171—185	185—200	201—× mm
脳頭蓋長		×— 83	84— 93	94—103	104—113	114—×
最大頭蓋巾		×— 54	55— 59	60— 64	65— 69	70—×
顎長 N～P		×— 76	77— 84	85— 92	93—100	101—×
吻長(眼窩)		×— 64	65— 72	73— 80	81— 88	89—×
上顎巾		×— 52	53— 57	58— 62	63— 67	68—×
上臼歯列長		×— 52	53— 57	58— 62	63— 67	68—×
下顎骨長(顎)		×—113	114—124	125—135	136—146	147—×
下臼歯列長		×— 60	61— 65	66— 70	71— 75	76—×
上腕骨長		×—120	121—135	136—150	151—165	166—×
橈骨長		×—115	116—130	131—145	146—160	161—×
尺骨長		×—140	141—155	156—170	171—185	186—×
大腿骨長		×—135	136—150	151—165	166—180	181—×
脛骨長		×—130	131—145	146—160	161—175	176—×

今回、亀井遺跡(H 1・2 地区)の調査によって検出されたイヌは14匹の多きをかぞえる。これはイノシシの最少個体数26に次ぐ出土量であり、弥生人にとって最も身近な動物であったことに基因しているのであろう。中でも S D—03出土のイヌ二頭分の全身骨格は、弥生時代のイヌの骨相・大きさを知る上できわめて貴重な資料といえ、また出土状況から同時に溝に投げ込まれたものと考えられ、弥生時代の家犬に対する精神面の一端を示す好資料といえる。

従って、以下にその出土状況、各部骨の計測値をあげ、あわせて畿内出土のイヌについて二、三触れてみたいと思う。

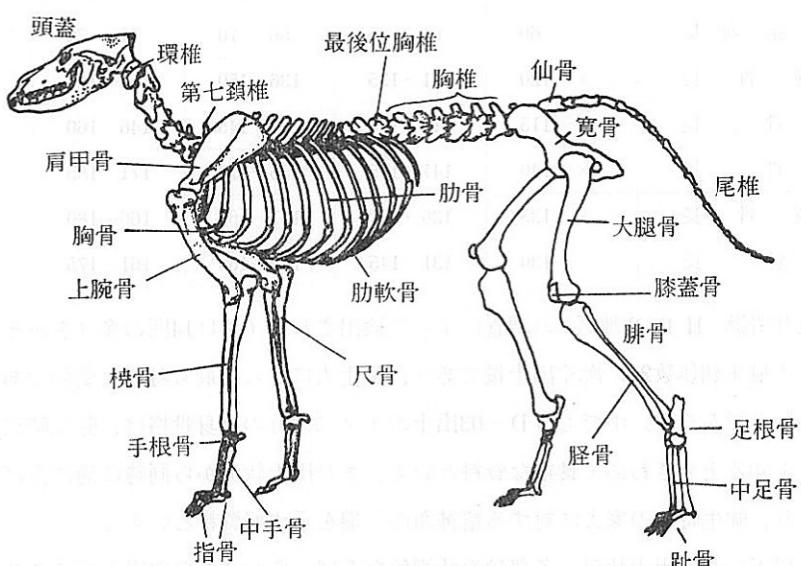
2. 概要と計測方法について

二匹の亀井犬は、O・7 地区 S D-03溝の(II)層下位にて検出されたものである(第169図)。この二匹は頭蓋の形質、ペニスボーンの有無から雄(以下、1号犬)、雌(以下、2号犬と呼称)であると思われる。

亀井1号犬(♂)は頭骨最大長175.0 mmで、長谷部氏の分類によると中型犬に属するものである。^(註5) 体高はおよそ47cmをはかる。出土状態は第166図から判断して頭蓋骨及び下頸骨はズレているが、上体は上向きで、椎骨・寛骨・左右脛骨につづく部骨は溝中という悪条件にもかかわらず原状をよく保持しているといえる。骨自体の保存も良好である。狩猟時に受けた損傷か、右側肩甲骨の前縁には動物によるものと思われる咬痕がみとめられ、その部分の骨は異状に変形している。また、右足は骨折しており右脛骨は骨幹部中央で二片に割れ、下端では腓骨が脛骨に附着^(註6)し、異常にふくらんでいた。(第178図参照) 骨の色調は黄褐色。

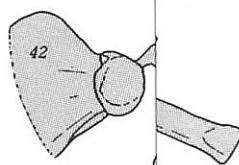
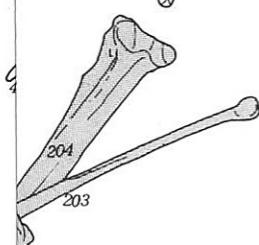
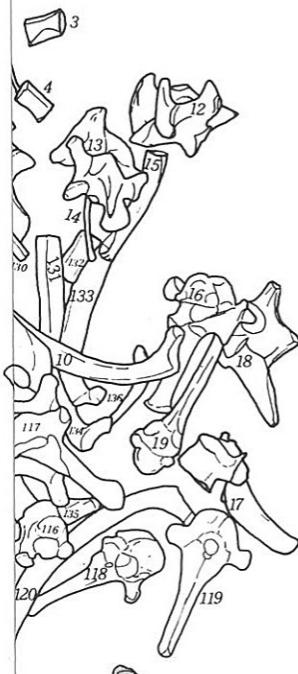
亀井2号犬(♀)は頭骨最大長164.2 mmと、1号犬に比べてやや小柄で中小型犬に属するものであり、体高およそ42cmをはかる。腰椎の1部を欠くものの、各部骨の保存はたいへんよろしい。1号犬の後頭骨と比べて、丸みが強くまろやかな顔相をもっていたものと思われる。骨の色調は暗褐色を呈し、色調によって二頭の各部骨の判別は容易であった。

両犬の出土状況は、亀井1号犬のうえに2号犬が折り重って「×」状に交差しており、溝中の堆積状態から判断して(III)層堆積後、短日にして二頭同時に溝中に投げ込まれたものと思われた。おそらく埋葬地以外で全身骨格がほとんどそろい、保存良好な資料は本例が最初ではないだろうか。弥生犬の全体像を知る上でまことに貴重な標本といえよう。



第165図 イヌ各部骨の名称

N



0



1996-1997

第35表 龜井1・2号犬出土部位の名称

実測図番号	性別	部 位	備 考	実測図番号	性別	部 位	備 考
1	♂	第3頸椎	{第4頸椎は単独で取り上げている	41	♂	第3肋骨(L)	
2				42	♀	肩甲骨(L)	
3	♂	胸 骨		43	♀	尺 骨(R)	
4	♂	胸 骨		44	♀	上腕骨(L)	
5	♂	上腕骨(L)(遠位)	20と同一骨	45	♀	中手骨(R)	
6	♂	第4肋骨(L)		46	♀	中手骨(R)	
7	♂	第10肋骨(R)		47	♀	基節骨(R)	
8	♂	第6肋骨(L)		48	♂	末節骨(L)	
9	♂	第9肋骨(R)		49	♂	基節骨(L)	後 肢
10	♂	第7肋骨(R)		50	♂	中節骨(L)	後 肢
11	♂	第4肋骨(L)	6と同一	51	♂	基節骨(L)	後 肢
12	♂	第5頸椎		52	♂	中足骨(L)	
13	♂	第6頸椎		53	♂	中足骨(L)	
14				54	♂	中足骨(L)	
15	♂	第1肋骨(L)		55	♂	中足骨(L)	
16	♂	第1胸椎		56	♂	末節骨(L)	後 肢
17	♂	第3胸椎		57	♂	基節骨(L)	後 肢
18	♂	第7頸椎		58	♂	基節骨(L)	後 肢
19	♂	第2胸椎		59	♂		
20	♂	上腕骨(L)(近位)	{前縁に動物の咬痕がみられ骨が変形しているこの骨の下にメスの左脛骨	60	♂		
21	♂	肩甲骨(L)	・左腓骨がある	61	♂		
22	♂	肋骨片		62	♂	踵 骨(L)	後 肢
23	♂	肩甲骨(R)		63	♂	距 骨(L)	
24	♂	橈 骨(R)		64			
25	♀	大腿骨(L)(遠位)	97と同一の骨	65	♂	寛骨(R)(L)	
26	♀	第4腰椎		66	♂	仙 骨	
27	♂	橈 骨(L)		67	♂	基節骨(R)	後 肢
28	♂	尺 骨(L)		68	♂	中足骨(R)	
29	♂	尾 椎		69	♂	中足骨(R)	
30	♂	尾 椎		70	♂	中足骨(R)	
31	♂	尾 椎		71	♂	中足骨(R)	
32	♀	第2腰椎		72	♂	距 骨(R)	
33	♂	尺 骨(R)		73	♂	基節骨(R)	後 肢
34	♂	胫 骨(L)		74	♂	大腿骨(R)	
35	♂	腓 骨(L)		75	♂	第11肋骨(L)	
36	♂	尾 椎		76	♂	踵 骨(R)	
37	♂	尾 椎		77	♂	手根骨(R)	
38	♂	尾 椎		78	♂	手根骨(R)	
39	♂	尾 椎		79	♂	基節骨(R)	前 肢
40	♀	第1腰椎		80	♂	手根骨(R)	

実測番号	性別	部 位	備 考	実測番号	性別	部 位	備 考
81	♂	足根骨(R)		121			
82	♂	中手骨(R)		122	♂	第10肋骨(L)	
83	♂	中手骨(R)		123	♂	第8肋骨(R)	
84	♂	中手骨(R)		124			欠 番
85	♂	中手骨(R)		125	♂	第1肋骨(L)	
86	♂	手根骨(R)		126	♂	第6肋骨(L)	8と同一
87	♂	基節骨(R)	前 肢	127	♂	下頸骨(L)	{ P ₁ P ₂ スポンジ化 P ₁ はスpon
88	♂	末節骨(R)	前 肢	128	♂	頭蓋骨	ズ化少してまえ 環椎含む
89	♂	末節骨(R)	前 肢	129	♂	下頸骨(L)	{ I ₂ P ₁ 早歯 P ₂ スponジ化
90	♂	基節骨(R)	前 肢	130			
91	♂	基節骨(R)	前 肢	131	♂	第2肋骨(R)	
92	♂	足根骨(R)		132	♂	胸 骨	
93	♂			133	♂	第3肋骨(R)	
94	♂			134	♂	第5肋骨(R)	
95	♀	寛 骨(L)		135	♂	第6肋骨(R)	
96	♀	寛 骨(R)		136	♂	第1肋骨(R)	
97	♀	大腿骨(L)	25と同一	137			
98				138	♂	大腿骨(L)	
99	♂	第13肋骨(L)	病 变	139	♂	第3腰椎	
100	♂	胫 骨(R)(遠位)	{ 胫骨の遠位端が付 着している	140	♂	第4腰椎	
101	♂	胫 骨(R)	{ 骨折している、 100と同じ	141	♂	第5腰椎	
102	♂	腓 骨(R)	{ 100、101、102で 胫骨、腓骨	142	♂	第6腰椎	
103	♂	第12肋骨(R)		143	♂	第7腰椎	
104	♂	第11肋骨(R)		144	♀	尺 骨(L)	
105	♀	第8胸骨		145	♀	橈 骨(L)	
106	♂	第10胸椎		146	♀	中節骨(L)	後 肢
107	♂	第11胸椎		147	♀	基節骨(L)	後 肢
108	♀	第4胸椎		148	♀	基節骨(L)	後 肢
109	♀	第5胸椎		149	♀	中節骨(L)	後 肢
110	♂	第2腰椎	{ 110の下から第12 肋骨(L)♀	150	♀		
111	♂	第1腰椎		151	♀		
112	♂	第13胸椎		152	♀	頭蓋骨	{ 後肢骨(L)の末 節骨を1点含む
113	♂	第12胸椎		153	♂	第13肋骨(R)	
114	♂	第9胸椎		154	♀	第7肋骨(R)	
115	♂	第8胸椎		155	♀	第5肋骨(R)	
116	♂	第6胸椎		156	♂	陰茎骨	ペニス・ボーン
117	♂	第7胸椎		157	♀	第11肋骨(R)	
118	♂	第5胸椎	{ この骨の下にメス 左中足骨・距骨・	158	♀	第10肋骨(R)	
119	♂	第4胸椎	{踵骨・基節骨・中 節骨がある	159	♀	第11肋骨(L)	
120	♂	第5肋骨(L)		160	♀	第8肋骨(R)	170と同じ

実測図番号	性別	部 位	備 考	実測図番号	性別	部 位	備 考
161	♀	第9肋骨(R)	171の東どなり	186	♀	第13肋骨(R)	
162				187	♀	第1肋骨(L)	
163	♀	第12肋骨		188	♀	胸骨柄	
164	♀	胸 骨		189	♀	肩甲骨(R)	
165	♀	第6肋骨(R)		190	♀	環 椎	{メスの左中手骨 がこの下にある
166	♂	第12肋骨(L)		191	♀	下頸骨(R)	{Iは全くなし P ₁ , M ₃ は欠歯
167	♀	第4肋骨(R)		192	♀	中足骨(L)	
168	♂	第8肋骨(L)		193	♀	距 骨(L)	
169	♀	第11肋骨(L)		194	♀	軸 椎	
170	♀	第8肋骨(R)	160と同じ	195	♀	下頸骨(L)	{I ₁ I ₂ , P ₁ P ₂ , M ₃ は欠歯
171				196	♀	第3頸椎	
172	♀	第8肋骨(L)		197	♀	第4頸椎	{第7頸椎は単独 でとり上げてい る
173	♀	第10肋骨(L)	{158~161付近の骨 (とひっつく	198	♀	第5頸椎	
174	♀	第9肋骨(L)		199	♀	第6頸椎	
175	♀	第3肋骨(R)		200	♀	上腕骨(R)	
176	♂	第9肋骨(L)		201	♀	第2肋骨(L)	
177	♂	第7肋骨(L)		202	♀	橈 骨(R)	
178	♂	第7肋骨(L)		203	♀	腓 骨(L)	後 肢
179	♀	第4肋骨(L)		204	♀	胫 骨(L)	後 肢
180	♀	第5肋骨(L)		205	♂	基節骨(L)	後 肢
181	♀	第7肋骨(L)		206	♂	基節骨(L)	後 肢
182	♀	第2肋骨(R)		207	♂	末節骨(L)	後 肢
183	♀	第1肋骨(R)		208	♂	末節骨(L)	後 肢
184	♀	第6肋骨(L)		209	♂	中足骨(L)	
185	♀	第3肋骨(L)		210	♂	中足骨(L)	

表についての概要

(部骨の名称) 第16図参照

(番号) 第160図の取りあげ番号

(L) は left

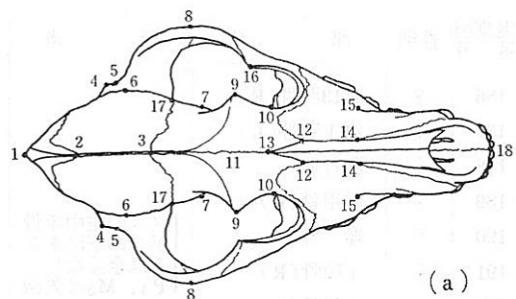
(性別) ♂オス (ここでは1号犬)

(R) は right

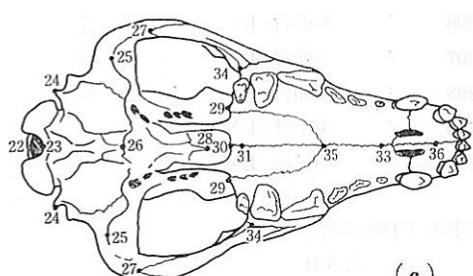
♀メス (ここでは2号犬)

(備考) その他、気づいた点をしるしている。

したがって、骨学的特徴を把握するための手段として以下に各部骨の計測値（単位mm）を第36～38表に掲げている。あわせて各遭構出土の頭蓋骨・下頸骨の標本も表に加えている。計測点および計測項目は、斎藤弘吉氏（『犬科動物骨格計測法』1963）に準処し、これを行った。なお、計測器具としてオフセットノギスを使用している。また、使用した計測点（頭蓋骨、下頸骨についてのみ）を第167図中の番号で示している。

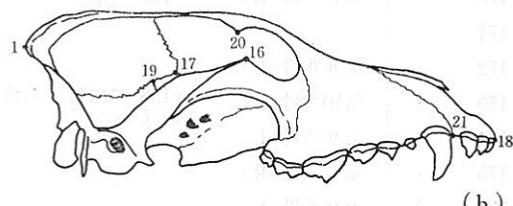


1. Inion [I]
2. Lambda [L]
3. Bregma [Br]
4. Otion [Ot]
5. Auriculare [au]
6. Furyon [eu]
7. Frontostenion [fs]
8. Zygion [Zy]
9. Ectorbital [Ect]
10. Entorbital [Ent]
11. Frontomediale [Fm]
12. Frontrale [Fo]
13. Nasio [N]
14. Nasointermaxillare [Ni]
15. Infaorbitale [If]
16. Zygomaticotemporale superior [Zt]
17. Krotaphion [K]
18. Prosthion [P]

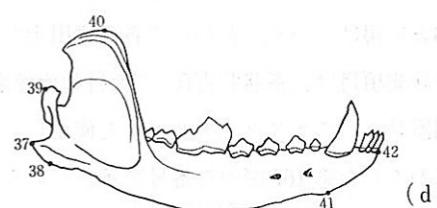


37. Gonion caudale [Goc]
38. Gonion ventrale [Gov]
39. Condylion mediale [Cm]
40. Coronion [Cr]
41. Gnathion [Gn]
42. Infradentale [Id]

19. Koronale [Kr]
20. Ectorbital [Ect]
21. Maxiloorale [Mo]



22. Opisthion [O]
23. Basion [B]
24. Jugale [Ju]
25. Glenoidale
26. Sphenobasion [Sph]
27. Zygotemporale inferior [Zi]
28. Hormion [Ho]
29. Urnion [U]
30. Staphylion [St]
31. Postdentale [Pd]
32. Molare [Mol]
33. Prämolare [Pm]
34. Zygomaxillare inferior [Zmi]
35. Palatinoorale [Po]
36. Incisivocaudale [Ic]



第167図 イヌの上・下・側面観、下顎の計測点

第167図の計測点について、以下に説明を加えてみる。

(a)

- ① Inion [I]：左右の上頂線が正中線上で交わる点
- ② Lambda [L]：三角縫合と矢状縫合が交わる点
- ③ Bregma [Br]：冠状縫合と前頭闊縫合が交わる点
- ④ Otion [Ot]：乳様突起の最下端
- ⑤ Auriculare [Au]：外耳孔上縁の中央点
- ⑥ Euryon [Eu]：鱗状縫合上の最外側端
- ⑦ Frontostenion [Fs]：前頭骨の顎骨突起の後方の最狭窄点
- ⑧ Zygion [Zy]：顎弓外側点
- ⑨ Ectorbital [Ect]：前頭骨の顎骨突起の最外尖端
- ⑩ Entorbital [Ent]：眼窓縁の上縁の最内側点
- ⑪ Frontomediale [Em]：左右の Ectorbitale [Ect] を結ぶ線と前頭縫合との交叉点
- ⑫ Frontorale [Fo]：前頭骨の鼻骨突起の前端
- ⑬ Nasio [N]：鼻骨の前頭骨突起の後端
- ⑭ Nasointermaxillare [Ni]：頸間骨の鼻骨突起の後尖端
- ⑮ Infraorbitale [If]：眼窓下孔外側後縁中央点
- ⑯ Zygomaticotemporale superior [Zt]：顎骨の前頭骨突起の尖端
- ⑰ Krotaphion [K]：前頭骨・頭頂骨・楔状骨の三骨合点
- ⑱ Prosthion [P]：左右の I_{1al} 最前端を結ぶ線と正中線との交叉点

(b)

- ⑲ Koronale [Kr]：頭頂骨・側頭骨・楔状骨の三骨合点
- ⑳ Ectorbital [Ect]：前頭骨の顎骨突起の最外尖端
- ㉑ Maxillorale [Mo]：上顎頸間縫合の最前端

(c)

- ㉒ Opisthion [O]：大後頭孔上縁の中央部
- ㉓ Basion [B]：大後頭孔の裸間切痕の中央部
- ㉔ Jugale [Ju]：頸静脈突起の下尖端
- ㉕ Glenoidale [Gl]：側頭骨の下顎骨窓の最後点
- ㉖ Sphenobasion [Sph]：楔状後頭軟骨結合と正中線との交叉点
- ㉗ Zygotemporale inferior [Zi]：顎弓底面の顎骨側頭縫合の最後点
- ㉘ Hormion [Ho]：楔状骨体鼻状部の前尖端
- ㉙ Urnion [U]：上顎骨の翼状突起後尖端
- ㉚ Staphylion [St]：口蓋骨の後鼻棘の後尖端
- ㉛ Postdentale [Pd]：左右の M²、後縁を結ぶ線と正中線との交叉点
- ㉜ Molare [Mol]：左右の M¹、前縁を結ぶ線と正中線との交叉点
- ㉝ Prämolare [Pm]：左右の P¹、前縁を結ぶ線と正中線との交叉点
- ㉞ Zygomaxillare inferior [Zmi]：顎骨上顎縫合の最下点
- ㉟ Palatinoorale [Po]：口蓋上顎縫合前縁と正中口蓋縫合との交叉点
- ㉞ Incisivocaudale [Ic]：左右の I³、後縁を結ぶ線と正中線との交叉点

(d)

- ㉞ Gonion caudale [goc]：下顎角最後方尖端
- ㉟ Gonion ventrale [gov]：下顎角下縁最下端
- ㉞ Condylion mediale [Cm]：関節突起後面中央点
- ㉞ Corouion [Cr]：筋肉突起の最高点
- ㉞ Gnathion [Gn]：下顎体下縁の下前面（すなわち下顎連合面）の後方下点に当る点
- ㉞ Infradentale [id]：I₁、下顎連合面の前端

第36表 頭蓋の計測値一覧表

部位	計測項目及び計測点	S D - 03		S D - 06	S D - 02	S D - 03
		1号犬(♂)	2号犬(♀)	3号犬(♀)	4号犬	5号犬
頭蓋	頭骨最大長	I-P	※ 175.0	164.2	160.3	
	頭骨最大長	B-P	※ 158.5	146.0	143.3	
	基底全長		※ 168 ±	154.0	151.5	
	頬骨弓巾	Zy-Zy	※ 103.0	93.0	92.0	
	脳頭蓋長	I-N	※ 98.0	89.5	84.4±	
	頭頂骨長 (矢状縫合上における)	L-Br		16.8		
	前頭骨頂	Br-N	31.8	※ 34.7	27.4	
	頭蓋幅(1)	eu-eu	48.0	※ 52.5	51.1	
	頭蓋幅(2)	au-au	※ 58.7	56.8	57.5	
	頭蓋高(矢状槽を含む)	Br-ho	※ 51.5	47.5	47.0	
	バジオン・ブレグマ高	B-Br	※ 61.7	55.0	57.0	
	最小前頭幅	fs-fs	※ 32.2	31.9	31.3	31.0±
	前頭骨頬骨突起端距離	Ect-Ect	※ 48.6	44.2	44.3	46.9
	後頭三角幅	Ot-Ot	※ 60.0±	59.6	59.1	
	後頭三角高 (後頭孔上縁より)	I-O	※ 29.0	27.6	26.0±	
	大後頭孔長	B-O		16 17.3	16.6 17.3	
	大後頭孔幅		16.8	16.7	※ 18.0	
	最小眼窓間幅	Ent-Ent	※ 30.8	27.0	30.2	30.7±
	顔長	P-N	※ 83.4	80.5	80.3	79.3±
	吻長	P-Oo	※ 74.0	70.9	69.4	
骨	最小吻幅	P ¹ ～P ¹ の部分で	32.4	31.5	31.3	※ 34.6
	吻幅 (犬歯歯槽外縁における)		34.4	33.0	32.0	※ 36.0
	吻高	Nより硬口蓋まで	※ 40.0	40.0	39.0	
	鼻骨長	N-Rh	※ 63.0	61.7	61.2	61.4±
	鼻孔最大幅		20.5	※ 21.1	19.3	20.8
	硬口蓋最大長	P-St	※ 83.1	79.8	79.4	
	硬口蓋長	I ¹ よりSt	※ 80.0	76.4	76.0	
	上臼歯列長 (P ¹ 前線よりM ² 後縁まで)	い ず れ も 左	※ 59.3	57.0	54.2	
	P ⁴ 長		※ 17.1	17.1	17.0	
	P ⁴ 幅		8.2	※ 8.9	8.6	
	M ¹ 長		10.8	※ 11.9	11.7	
	M ¹ 幅		12.3	※ 13.5	13.0	
	M ¹ +M ²		※ 16.4	16.4	16.1	

※印は各計測項目の最大値を示す。

第37表 下顎骨の計測値一覧表

部位	計測項目及び計測点	SD-03		SD-06
		1号犬(♂)	2号犬(♀)	6犬号
下顎骨 (左)	下顎骨全長I	Cm-id	※ 128.1	121.8
	下顎骨全長II	goc-id	※ 128.4	123.2
	下顎骨全長III	Cm-犬歯後縁	※ 113.8	105.9
	下顎体長	M ₃ 後縁-id	※ 85.1	84.9
	下顎枝長	Cm-M ₃ 後縁	※ 42.1	36.6
	下顎枝高I	gov-cr	※ 51.6	49.8
	下顎枝高II(gov-筋突起後端)		※ 44.5	40.6
	髁高(gov-関節突起上面)		※ 24.9	23.9
	下顎枝幅		※ 35.4	32.1
	筋肉突起幅(下顎切痕一下顎枝前縁下部)		※ 29.9	26.9
	関節髁長(関節突起内外端の長さ)		※ 23.1	20.7
	下顎体高I(M ₃ の後縁にて)		24.6	24.6
	下顎体高III(M ₁ の中央にて)		※ 23.3	22.5
	下顎体高IV(M ₁ ・P ₄ の間)		※ 22.6	21.0
	下顎体高V(P ₄ の中央にて)		21.5	※ 21.9
	下顎体高VI(P ₂ ・P ₃ の間)		※ 19.0	17.8
	門歯縁高		50.8	※ 52.0
	下顎体厚I(M ₁ 下方における)		※ 12.4	11.0
	下臼歯列全長(P ₁ 前縁-M ₃ 後縁)		※ 67.4	63.7
	下前臼歯列全長(P ₁ 前縁-P ₄ 後縁)		※ 37.9	33.4
	下後臼歯列全長(M ₁ 前縁-M ₃ 後縁)		30.9	31.1
	M ₁ 長(M ₁ 歯冠前後最大長)		18.3	※ 20.2
	M ₁ 前幅(前歯根部歯冠内外縁間長)		7.8	※ 8.6
	M ₁ 後幅(後歯根部歯冠内外縁間長)		7.4	7.7

※印は各計測項目の最大値を示す。

頭蓋骨および下顎の計測結果からして、1号犬は最大頭骨長175mmを測る中型犬にもかかわらず中小型犬である2・3号犬の頭蓋幅(1)と比較して、幅狭まく、スリムな感じを与える。また、歯牙(M¹)の長幅も2・3号犬のほうがわずかに大きい。これは、M₁についても同様で下顎骨の大きさにくらべて一回り小さい。4号犬は顔長からして中型犬の大きさであるが、吻幅は36mmと中型犬である1号犬よりも大きいのが特徴。5・6号犬は、いずれも中小型犬に属している。頭蓋・下顎骨以外の1・2号犬の各部骨の代表的骨格は第37表に示している。

第38表 亀井1、2号犬各部骨計測値一覧表

単位mm

部位	計測項目	※	1号犬 (♂)	2号犬 (♀)		全長	1-2	128.4	111.9
環椎	全長	1-2	—	32.9	肩甲骨	肩甲棘最大長	2-4	119.5	106.7
	横突起間全幅	3-3	—	64.6		上部幅	5-6	57.5	50.8
	前関節突起間全幅	4-4	—	36.5		頸部最小幅	9-10	22.5	20.6
	後関節突起間全幅	5-5	—	27.5		下部幅	12-13	26.3	24.4
	体横径	6-6	—	26.4		関節窓長	12-1	22.3	20.6
						関節窓幅	14-15	16.8	15.9
軸椎	全長	1-2	50.7	47.2	上腕骨	全長	1-2	144.1	135.6
	横突起間全幅	3-3	36.1	32.8		上端最大前後徑	3-4	34.9	33.3
	前関節突起間全幅	4-4	26.7	26.8		上端最大幅	5-6	25.8	24.0
	後関節突起間全幅	5-5	28.9	26.7		大結節長	3-10	24.2	22.1
	体横径	6-6	16.2	15.9		体最狭部横径	14-	—	11.3
						下端最大幅径	17-18	29.7	27.8
第四頸椎骨	全長	1-2	35.8	33.8	左腕骨	滑車下端幅	19-20	17.4	15.0
	横突起間全幅	3-3	39.8	37.8		滑車前面最大長	23-24	18.4	17.1
	前関節突起間全幅	4-4	35.3	32.4					
	後関節突起間全幅	5-5	30.3	28.5					
	体横径	6-6	20.7	20.6					
第三腰椎骨	全長	1-2	37.9	37.4	右橈骨	全長	1-2		133.2
	横突起間全幅	3-3	51.0	44.0		上端最大幅	3-4		15.2
	前関節突起間全幅	4-4	25.4	22.5		上端最大前後徑	5-6		10.2
	後関節突起間全幅	5-5	11.1	15.6		頸部最小幅	9-10		12.4
	体横径	6-6	15.9	17.7		体中央部幅	12-13		12.5
						体中央部厚	14-		7.6+
第一肋骨(左)	全長	1-2	53.9	45.6	左尺骨	下端最大幅	15-16		19.6
	小頭、結節間距離	3-1	14.6	14.2					
	小頭関節面長	6-7	5.7	6.2					
	小頭関節面幅	8-9	6.5	6.8					
	頸部幅	10-11	6.5	5.7					
	頸部厚	12-13	4.7	3.9					
第五肋骨(左)	結節関節面長	14-1	5.8	5.3	右大腿骨	全長	1-2	171.4	156.2
	下端前後幅	2-21	10.3	8.7		体前後徑	3-4	22.9	21.3
	下端厚	22-23	5.9	5.5		体中央前後幅	9-10	6.5+	5.4
						下端最大前後幅	11-12	8.8	7.0
						頭部厚	13-14	12.0	10.5
						半月状切痕直径	3-7	16.4	16.6
						半月状切痕最大厚	18-19	16.6	13.6
	全長	1-2	117.1	109.8	左脛骨	全長	1-2	157.5	147.7
	小頭、結節間距離	3-1	16.9	15.2		上端最大横径	3-4	35.8	32.5
	小頭関節面長	6-7	5.1	6.1		頭長	6-7	16.8	15.7
	小頭関節面幅	8-9	6.4	5.5		体中央横径	15-16	12.2	12.8+
	頸部幅	10-11	5.8	4.9		下端最大幅	17-18	27.9	26.1
	頸部厚	12-13	4.8	4.4	左脛骨	全長	1-2	157.1	146.9
	結節関節面長	14-1	5.0	5.0		上端最大前後徑	6-7	34.1	29.6
	下端前後幅	2-21	6.7	7.7		上端最大横径	8-9	30.2	29.3
	下端厚	22-23	4.4	3.8		体中央前後徑	11-12	11.7	10.4
						体中央横径	13-14	13.0+	11.7+
						下端最大幅	15-16	20.3	19.1
						下端最大前後徑	17-18	14.3	14.0

部位	計測項目	※	1号犬 (♂)	2号犬 (♀)	第二中足(左骨)	全長	1-2	56.8	51.2
腓骨 _(左)	全長	1-2	146.7	134.6	上端横径	4-5	10.3	4.3	
	上端幅	3-4	8.1	8.0	中部横径	8-9	4.2	5.2	
	体中央幅	6-7	2.9	3.4	下端横径	12-13	6.4	5.7	
	体中央厚	8-	2.4	2.4					
	下端幅	9-10	8.5	7.9					
寛骨 _(左)	寛骨長	1-2	-	121.3					
	腸骨長	1-3	72.8	66.5					
	関節窓前縁より坐骨結節	3-4	-	43.3					
	恥骨連合長	5-6	41.4	37.2					
	腸骨最小幅	13-14	16.9	16.5					
	関節窓横径	18-19	18.7	17.6					
	閉鎖孔前後最大長	24-25	28.6	25.5					
	閉鎖孔最大横幅	20-26	-	19.4					
	髀臼枝最小幅	24-27	7.9	11.7					
第十三肋(左骨)	全長	1-2	97.6	86.7					
	下端前後幅	2-21	6.1	5.6					
	下端厚	22-23	2.4	2.6					
第二手中手骨 _(左)	全長	1-2	49.4	45.7					
	上端横径	4-5	5.2	5.1					
	中部横径	8-9	6.8	5.4					
	下端横径	12-13	6.8	6.2					
第三手中手骨 _(左)	全長	1-2	56.0	52.4					
	上端横径	4-5	7.1	6.7					
	中部横径	8-9	6.4	5.5					
	下端横径	12-13	6.5	6.0					
第四手中手骨 _(左)	全長	1-2	55.7	51.7					
	上端横径	4-5	7.4	4.8					
	中部横径	8-9	6.3	5.7					
	下端横径	12-13	6.5	5.9					
第五手中手骨 _(左)	全長	1-2	47.2	44.1					
	上端横径	4-5	10.6	7.1					
	中部横径	8-9	6.1	6.1					
	下端横径	12-13	7.3	6.4					
第二基節(左骨)	全長	1-2	18.4	-					
	上端横径	4-5	7.4	-					
	中部横径	8-9	5.3	-					
	下端横径	12-13	6.2	-					

凡例

※印は斎藤弘吉氏の計測点

部位名は第165図参照

左右の骨がある場合、原則として左側の骨を計測している

3. 弥生時代の畿内におけるイヌの出土例

計測値の表記されているものを以下にまとめてみた。

(註7)
第39表 恩智犬頭蓋の計測値一覧

計測項目	NE-7~8 1号犬		NW-14~13 2号犬		NE-9 3号犬		NW-9 4号犬		NW- 13~14 表採 5号犬	NE- 表採 6号犬
	右	左	右	左	右	左	右	左	左	左
最大頭蓋長(I-P)	(145.80)									
基庭頭蓋長(B-P)	(129.55)									
脳頭蓋長(A-Fm)	81.75									
顎長Ⅰ(N-P)	72.40		73.50		81.40					
顎長Ⅱ(Fm-P)	(88.20)		82.95		91.50					
鼻骨最大長(N-Rh)	50.60		54.80							
硬口蓋長(P-St)	70.40		71.70		75.40					
硬口蓋幅(犬歯外側における)	27.55		26.55		31.80					
口蓋骨長(Po-St)	25.00		24.65		26.45					
上臼歯全長	50.85	50.80								
上前臼歯列全長	39.55	39.90		36.80						
上後臼歯列全長	15.10	15.40	16.70		17.75	18.10				
上裂歯長	15.00	15.05	14.75		16.00	16.85	15.25			
上裂歯幅	6.55	7.10	7.75		9.15	8.80	8.45			
第1大臼歯長	9.30	9.30			10.90	10.90	10.70			
第1大臼歯幅	11.80	11.90			13.85	13.85	12.80			
上頸歯槽最大幅		49.05	52.80		57.30					
上頸幅		24.90	26.20		30.00					
最小前頭幅(fs-fs)		27.35	26.55		31.80					
両前頭顎突起端間距離(Ect-Ect)		37.59	(41.85)							
両眼窓最小距離(Ent-Ent)		24.30	(27.30)		29.55					
眼窓最大幅		25.50	24.65	25.35						
後頭頸最大幅				30.00						
後頭孔最大幅				16.55						
後頭孔最大高				13.10						
鼓胞最大長	107.55	20.00	19.55							
下頸骨全長Ⅰ(Cm-id)		107.60		106.85			120.75	120.40	131.20	
下頸骨全長Ⅱ(goc-id)								120.00		
下頸骨長(Cmから犬歯の後縁まで)	92.80	92.40		90.95			106.65	106.00	113.70	
下頸体高Ⅰ(gov-cr)							48.25	48.15	51.25	
下頸体高Ⅱ(第1大臼歯の後縁)	16.40	16.30		17.15			21.25	20.40	22.10	
下頸体高Ⅲ(第2・3前臼歯間)	13.60	13.85		14.50			17.35	17.55	20.45	18.55
下臼歯列全長	55.55	56.06		58.30			64.55	65.35	68.35	
下前臼歯列全長	27.90	28.75		29.65			34.00	34.15	36.55	
下後臼歯列全長	27.55	27.40		31.35			31.75	32.10	33.30	
下裂歯長 M ₁	17.55	17.65		18.75			19.20	19.20	21.00	18.85
下裂歯幅 M ₁	6.80	6.85		6.90			7.65	7.65	8.45	7.45
第2大臼歯長 M ₂	7.60	7.40		8.60					9.20	
第2大臼歯幅 M ₂	6.00	6.30		6.10					6.40	

() は破損のため計測誤差が大きい。

(註8)
第40表 池上遺跡出土イヌ

出土層位	区画	登録番号	標本	図版番号
黒色粘土層	M地区B58区画	B-0439	前頭骨R 胎兒あるいは新生児	P L. 6-2
	M地区B58区画	B-0450	I ³ R、かなり摩耗	P L. 5-8
	M地区B59区画	B-1189	頭蓋：左右頬骨弓を欠く他はほぼ完存する標本 全長150.6mm 椎骨1 小型	P L. 6-1 a・b・c
	M地区D60区画	B-0567	寛骨R・L 環椎、軸椎、橈骨R、脛骨L、距骨 中手骨4、指骨1 椎骨3	P L. 6-3~6、11~14
	M地区F61区画		肩甲骨R	
	M地区H63区画		肋骨R 2	
	M地区J64区画		寛骨R 脛骨 (全長 140.0mm) 中小型	
	M地区K64区画		大腿骨R (全長 140.0mm) 中小型	
腐泥黑色粘土層	M地区D60区画		頸椎1 胸椎1 } 同一個体 肋骨4	
	M地区E60区画	B-0537	肩甲骨R、大腿骨L、肋骨R 2、L 4 椎骨1、中手・足骨1	P L. 6-5、10
	L地区X56区画		大腿骨L (P-s)	

(註9)
第41表 大福遺跡出土のイヌ頭蓋の計測値一覧表

	大福犬	
	右	左
頭骨最大長 (I-P)		
基底全長	139.6	
基底長 (B-P)	128.8	
口蓋長	70.3	
頬弓部幅 (Zy-Zy)	84.1	
乳様突起幅	57.2	
脳筐幅	54.0	
後眼窓幅	32.9	
吻幅	29.9	
鼻骨長	47.8	
頬歯列歯槽部長 (P ¹ -M ²)	49.9	50.1
下頸長	107.3	
下頸歯列長	74.8	74.9

第42表 東奈良遺跡出土のイヌ下頸骨の
計測値一覧表 (註10)

計測部位	計測値(mm)
下頸骨長(Cmから犬歯の後縁)	92.30
下頸体高 I (gov-Cr)	40.50
" II (第1大臼歯の後縁)	17.55
" III (第2・3前臼歯間)	16.15
下臼歯列全長	58.80
下前臼歯列全長	30.50
下後臼歯列全長	28.60
下裂歯長	18.10
" 幅	7.65
第2大臼歯長	7.20
" 幅	6.25

東奈良1号犬

(註7)
恩智遺跡からは最少個体数6のイヌの遺骸が報告されている。長谷部分類に照合してみると大きさは小型犬2、中小型犬3、中型犬1である。前二者の大きさは、弥生時代の各遺跡出土のイヌに共通してみられるが、後者(恩智5号犬)は、下頸骨全長131.20mmを測る大形のイヌで、その出自が興味をひく。いずれも遊離骨であるのは惜まれる。池上犬も恩智犬同様に小型、中小型

(註12)

(註8)
犬に限定される。

大福遺跡からは、同一個体に属する一個体分の犬骨が得られている。出土状態は特異で、土壌中に埋置された弥生時代後期の長頸壺形土器の中に、小型のイヌの主要部骨が入れられていた。土器の容量から判断して、肉付きのまま遺骸を中におさめることは不可能で、当初より（再埋葬を意識してか）土器の中に入れることを念頭にして解体したのであろう。イヌの大きさは、頭蓋骨・下顎骨の計測値成果から小型犬に属す。弥生小型犬の骨相・大きさ（全体像）を知る上で貴重な資料と云える。

(註9)
東奈良犬は、弥生時代前期の溝中より検出された小型犬の下顎骨である。大福犬よりも小ぶりである。

(註10)
以上、表に掲げた4遺跡のほかに瓜生堂遺跡、巨摩廃寺、唐古・鍵、鬼虎川遺跡から各部骨の出土例が報告されている。いずれもまとめて出土する例はなく遊離骨である。

ま と め

今回の亀井遺跡の調査（H1・2地区）によって、最少個体数14のイヌの遺骸を得ている。これは、他遺跡の出土量と比べて著しく多いといえる。保存状態が良好であったことにもよろうが、それにもまして沖積地と洪積地のほぼ中間に位置しているという立地条件が大きく基因しているのであろう。このことは豊富な動物遺存体がしめすように、農耕を基盤としつつも狩猟活動も積極的に行い、生産活動の中においても一つの役割りを果していたものといえ、イヌは獵犬として重要な役割りを担っていたのであろう。

時期別に個体数をみると中期6、後期8とやや後期に多い。イヌの大きさは中小型犬5、中型犬8、不明6である。中型犬の存在と小型犬のみられない点は、弥生時代を通じてみた場合、亀井遺跡の特徴として注目される。中でも亀井1号犬は、弥生時代には他に例をみない傑出した大きなイヌで、前時代の縄紋時代からは直接的な系譜は現在のところ辿れない。これら亀井犬は、豊富な被狩獵獸（イノシシ、ニホンジカ等）の出土が具体的に示しているように、獵犬として使って狩猟活動に使役されていたのであろう。しかし、解体痕跡のある犬骨の存在は豊獵・豊作を願う儀式に伴う犠牲獸として食べられることもあったのであろう。SD-06出土の下顎骨にみられる擦痕、SD-03Eの4ブロックから出土した第6腰椎骨に観察された鋭利な接断痕は、そのことを如実に物語っていよう。

註1 長谷部言人「日本石器時代家犬に就いて」人類学雑誌40-1 1925

長谷部言人「石器時代家犬に就いて」人類学雑誌44-5 1929

註2 直良信夫「日本および日本周辺地域の古代家犬骨」「古代遺跡発掘の家畜遺体」校倉書房 1973

註3 斎藤弘吉『犬科動物骨格計測法』 1963

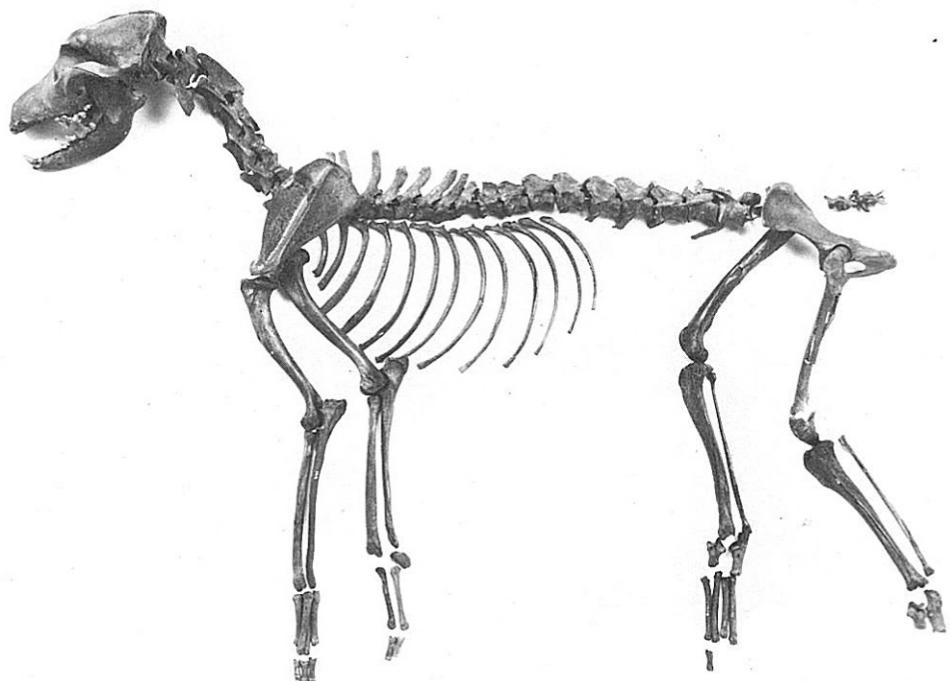
註4 長谷部言人「犬骨」「吉胡貝塚」文化財保護委員会 1942

註5 天然記念物に指定されている柴犬（芝犬）の標準体高は、雄39.5cm、雌36.5cmである。

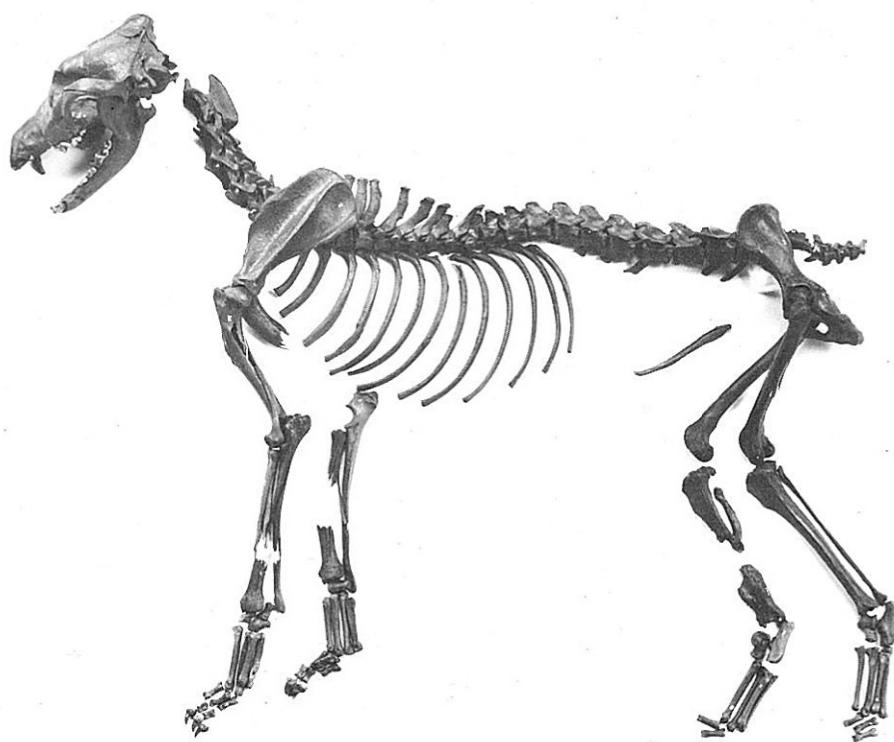
四国犬の体高は雄51.5cm、雌48.5cm。秋田犬（大館犬）の体高は雄66.6cm、雌60.6cm。

渡辺 肇「柴犬標準の解説」「柴犬」愛犬の友編誠 文堂新光社 1980

大野淳一「犬—その銘柄—」カラーブックス3 保育社 1980



a



b

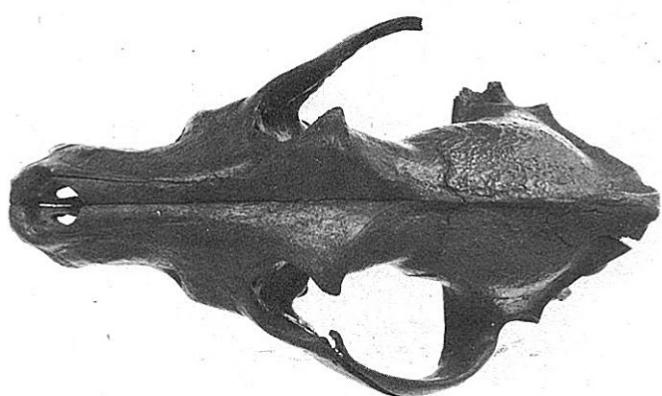
第168図 龜井1、2号犬全身骨格写真 a(♀) b(♂)



第169図 亀井1、2号犬出土状況
SD-03Wの(Ⅱ)層掘削中に検出



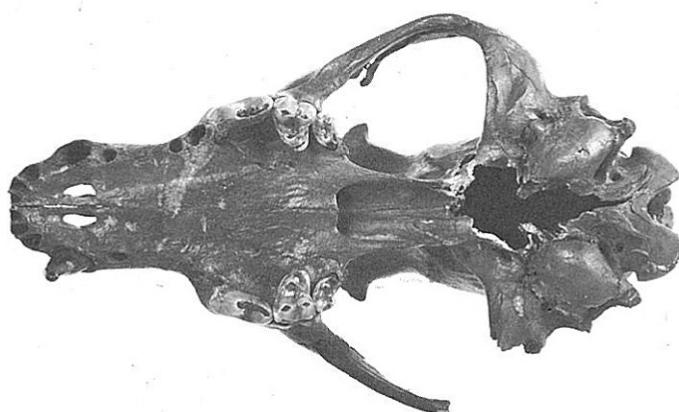
第170図 亀井1、2号犬出土状況（近景）東から



a



b



第171 龜井1号犬(♂)

a 上面觀

b 側面觀

c 底面觀



a



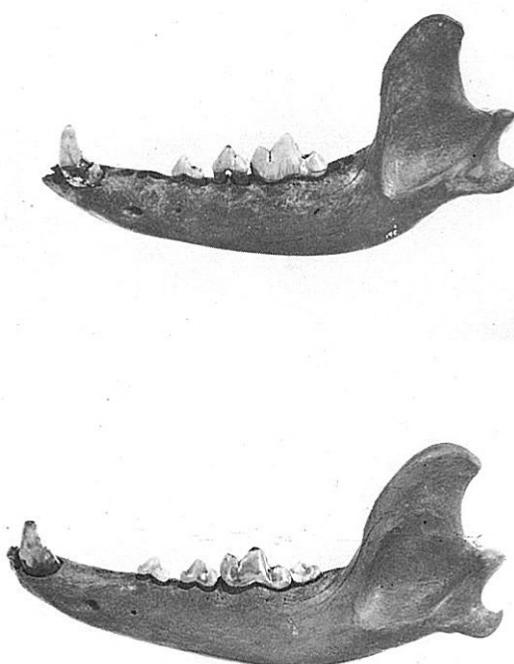
b



c

第172図 亀井2号犬(♀)

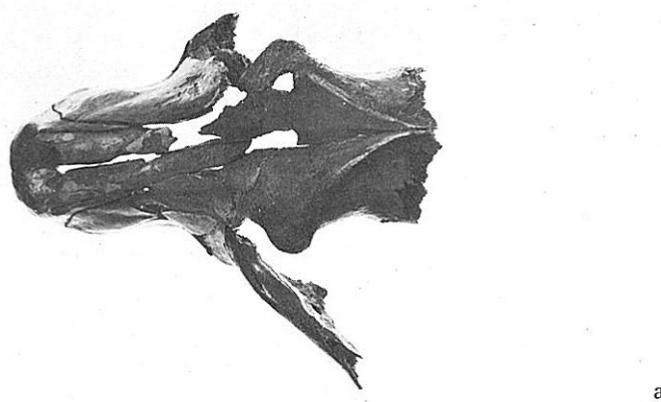
- a 上面観
- b 側面観
- c 底面観



第173図 左下顎骨

- a 亀井2号犬(♀)外側
面観
- b 亀井1号犬(♂)同上

b



a



第174図 SD-02出土頭
蓋(4号犬)

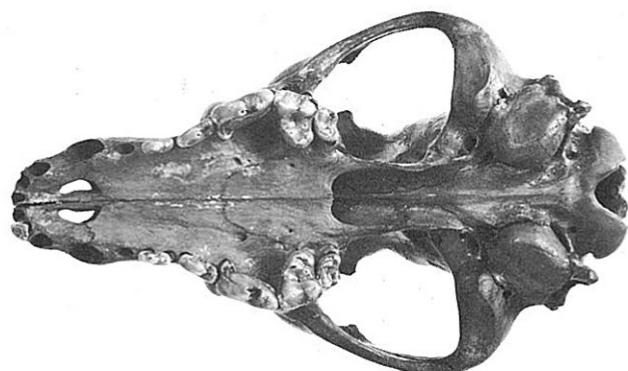
- a 上面観
- b 側面観



a



b



c

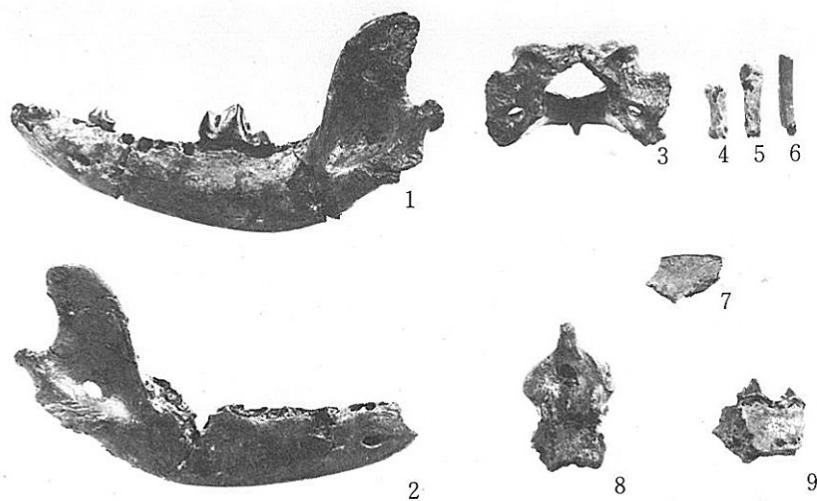
第175図 SD-06出土イヌ

頭蓋 (3号犬)

a 上面觀

b 側面觀

c 底面觀



第176図

イヌ



第177図

イヌ

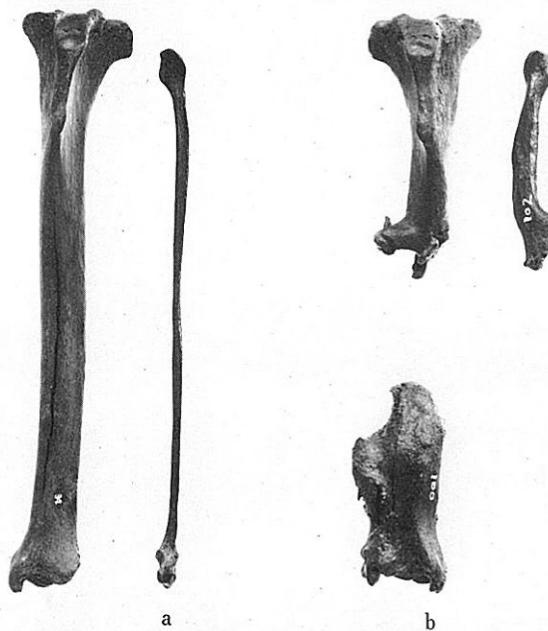
第176図説明

1. 左下顎骨 (S D-06)
2. 右下顎骨 下顎枝に5mm前後の孔を穿つ (S D-06)
3. 環椎 (S D-06)
4. 中節骨 (S D-06)
5. 中節骨 (S D-06)
6. 肋骨片 (S D-06)
7. 軸椎片 (S D-06)
8. 軸椎7とは別個体 (S D-06)
9. 右下顎骨片 (S D-06)

1～5、8は同一個体 (6号犬)

第177図説明

1. 右寛骨 (S D-03W)
2. 右寛骨1とは別個体 (S D-03W)
3. 右前頭骨片 龜井1・2号犬と比較した場合中小型犬に属する大きさである (S D-03W) 5号犬
4. 歯牙 (S D-03W)
5. 肩甲骨 龜井1号犬よりも大きい個体である (S D-04)
頸部最小幅 24.7mm
下部幅 28.0mm
関節窓長 23.6mm
関節窓幅 16.4mm
6. 右上腕骨 龜井1号犬よりも大きい個体である (S D-04) 骨近位端を失なう
7. 中節骨 (S D-04)



第178図説明

- a 左脛骨・腓骨（亀井1号犬）
- b 右脛骨・腓骨は骨折のため2片に別れている（亀井1号犬）

註6 卷頭カラー写真図版2参照

註7 安部みき子「恩智遺跡出土の獣骨」『恩智遺跡I』本文編 瓜生堂遺跡調査会 1980
Tab. 46に若干補記

註8 金子浩昌・牛沢百合子「池上遺跡出土の動物遺存体」『池上・四ツ池遺跡 第6分冊
自然遺物編』大阪文化財センター 1975 掲載された表に若干補記している。

註9 樽野博幸「大福遺跡出土の獣骨について」『大福遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第36冊
奈良県立橿原考古学研究所編 1978 本報告書第VII章の註 参照

註10 安部みき子「東奈良遺跡出土の動物遺体」『東奈良』発掘調査概報Ⅱ 1981.2
第9表をそのまま引用

その他に、計測値は掲載されていないが鬼虎川遺跡から小型犬の頭蓋骨が出土している。^(註16)

註11 第33表参照

註12 註4の中で長谷部氏は小型犬は雌、中小型犬は雄の可能性を示唆されている。

註13 西田正規「瓜生堂遺跡出土の動物骨」『瓜生堂』(財) 大阪文化財センター 1980.3

註14 西田正規「瓜生堂・巨摩廃寺遺跡出土の獣骨」『巨摩・瓜生堂』(財) 大阪文化財センター 1981.3

註15 寺沢 薫編『唐古・鍵遺跡』第10・11次発掘調査概報 橿原考古学研究所 1981

註16 東大阪市遺跡保護調査会『鬼虎川遺跡調査概要I』第4・5・6次調査 1980

第6節 方形周溝墓人骨の取り上げと保存処理

人骨の取り上げ

今回の調査で検出された方形周溝墓2基の埋葬施設に残っていた人骨を、保存と調査研究の目的で取り上げ、保存処理を行なった。

亀井遺跡では、はじめての方形周溝墓の検出であり、埋葬形態を知る上でも重要であると考えられる。なお、方形周溝墓2基の埋葬施設は木棺墓と土壙墓であるが、人骨が残っていたのは、木棺墓の4遺体である。取り上げを実行したのは、この4遺体（1、2、4、6号人骨）である。木棺墓の木棺は、わずかな残片が存在するのみである。検出された時点の人骨の状態は、かなり脆弱な状態であるため、従来の工法のような石膏等で取り上げる方法では人骨を破壊するおそれがある。そのため、脆弱な遺物の取り上げに有効であるウレタンフォームによる工法を用いた。なお、人骨を葬った木棺墓の土壙ごと切り取って処理する方法をとった。以下、図にそって取り上げ工程を説明する。

(1) 準備 硬質の発泡性ウレタン樹脂を用いて木棺墓全体を梱包、保護し切り取り、搬出するため、木棺墓周辺を削り出し、取り上げる範囲を決定した。 (第179図①)

(2) 仮強化 人骨表面の剥落防止のために、アクリル系合成樹脂による浸透強化を行なった。その後、木棺墓表面の剥落や次に施工するウレタンフォームと直接接触するのを防止するため、湿拓の要領で湿らせた不織布でていねいにおおい、その上から砂で被覆補強した。

(第179図②)

(3) 梱包 切り出した木棺墓周囲を板及びダンボールで枠組みし、イソシアネートとポリオールを主原料とするウレタン原液を流し込んだ。使用方法は、この2液を1対1の割合で混合攪拌する。攪拌後ただちに発泡を開始し、数分で硬質のウレタンフォームを形成する。このウレタンフォームで木棺墓全体を梱包した。 (第179図③)

(4) 切り離し 木棺墓の搬出部分を大地から切り離すには、(第179図④)のように板をさしこみ逆転させる。逆転した面の余分な土壙は削り取り、ウレタンで保護し、クレーンを利用して搬出した。 (第180図⑤)

保存処理

東北地方沖合地震で倒壊した木棺墓の復元とその問題

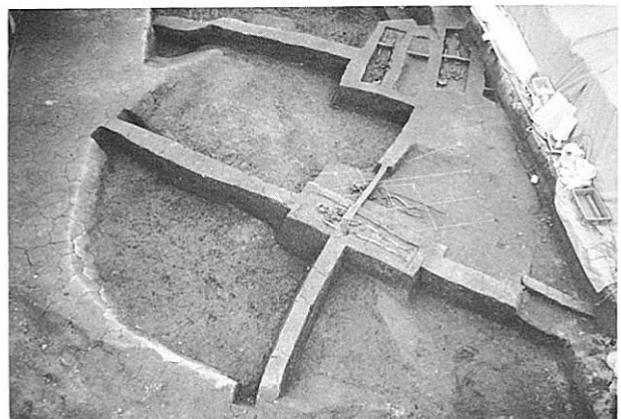
ウレタンフォームで取り上げた木棺墓は容易に解体できるので、木棺墓と人骨があらわれるよう、ウレタンフォームを開梱した。開梱後の木棺墓土壌と人骨の保存処理は、現状保存を目標とし、次のような方法で行なった。

1. 木棺墓土壌及び人骨は水分を含んでいるため、このままの状態では表面にカビが発生したり、水分の蒸発と共にひび割れを生じる。その防止のためにアルコールを吹きつけ、徐々に脱水処理を行なった。
2. 人骨に付着している土壌は、1の段階で表面から取り去り、脱水処理を行なった。人骨は脆弱な状態であるため、アクリル系樹脂のキシレン溶液（商品名：パラロイドB72）を塗布しながら強化していった。
3. 木棺墓の存在を明らかにするため、土壌はそのまま保存する方法で処理を行なった。土壌の処理は、イソシアネート系樹脂のシンナー溶液（商品名：サンコールSK-50）を塗布しながら強化していった。

保存処理以前の問題点は、発掘、記録されている間に、土壌及び人骨の水分が蒸発して全体にひび割れを生じることである。発掘以前、土壌及び人骨は水分を含んでいるため、水分の表面張力によって安定した状態に保たれている。しかし、水分が蒸発すると共に表面張力が弱まり、不安定な状態になり変形する。アルコール及び合成樹脂による処理法は、乾燥時の変形を最小限に抑えるための良好な方法であると考えられる。

すなわち、水分を多く含んでいる遺物を保存処理する場合には、検出された時点から水分の蒸発を抑えるための処理が必要であり、徐々に強化していくけば、かなり良好な保存状況を保つことができるであろう。

①準備 取り上げる範囲を決定。



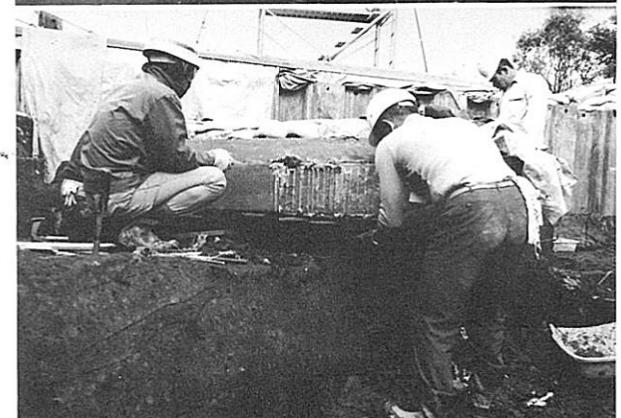
②仮強化 ウレタンフォームの離脱が容易になるように配慮した。



③ウレタンフォームによる梱包
板及びダンボールの枠組で、ウレタン樹脂を注入。



④切り離し。



第179図 人骨の取りあげ



⑤クレーンによる搬出。



⑥頭蓋骨の保存状況（第2号人骨）。



⑦下肢骨の保存状況（第6号人骨）。

第180図 人骨の取りあげ

第VII章 考 察

第1節 調査のまとめ

亀井遺跡の調査はすでに三回の大規模な調査が行われ、その報告書（KM）も公にされ、いまさら重要性を指摘する必要はないであろう。第182図は既往の調査トレンチの配置図である。

さて、今回の調査で明らかになった点について以下にのべてみたい。

1) 縄紋時代以前

弥生時代の2次の堆積層である方形周溝墓の盛土中から翼状剣片石核、中期後半のSD-03溝から縦長剣片を各々1点得ている。すでにKMの調査で亀井における最古の面（旧石器時代）がT.P.±0mに伏在していることが指摘されているところからして消極的ながらプライマリィな旧石器時代遺構の存在が想定される。また、縄紋時代に関しては、基本土層の第X層にあたる暗褐灰色粘土層中から縄紋晩期の底部1を検出しており、第X層が縄紋晩期に形成された層であることが明らかとなった。

2) 弥生時代前期

この時代の遺構は検出されていないが、SD-03、SD-04溝から前期の土器数片を得ており、附近に該期の遺構の存在が考えられる。幸い、KM-KのCトレンチの調査で前期の遺構が検出されていることから集落の存在が認められた。

3) 弥生時代中期

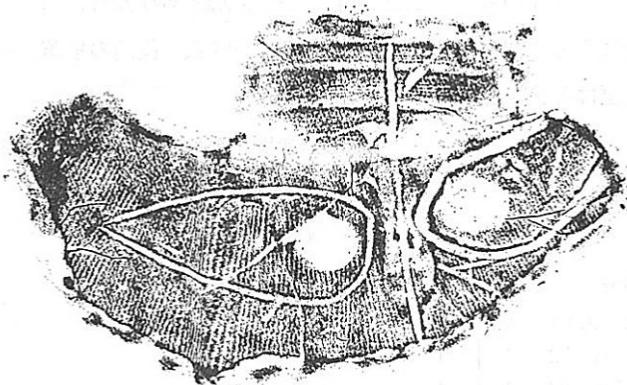
検出された遺構や遺物は多種多様にわたっている。遺構では亀井遺跡で初めて方形同溝墓2基を検出できたことは大きな成果であった。また、特殊な遺物としてはSD-03溝から出土した邪視文土器（第181図）と占いに用いられた卜骨があげられよう。さらに二頭分

のイヌ全身骨格の出土は弥生人の

イヌに対する精神面の一端を示す好例として注目に値するものといえる。おそらく狩猟、農耕儀礼の犠牲獸として溝中に供獻されたのであろう。また、供獻後に溝中に廃棄されたのであろう。

4) 弥生時代後期

中期からの亀井人の生活が継続される。後期前半に遺構の集中がみられ、特に土坑及び井戸の集中する傾向がある。遺構の埋土は中期の場合と異なりシルト化が進んだものといえ、不安定な



第181図 SD-03出土の邪視文のある土器片 (12)

環境に近づきつつあるためによるのであろう。第43表は弥生中、後期を通じて得られた動物遺存体の最少個体数を表記したものである。

5) 古墳時代前期

従来の亀井遺跡の調査では未検出であったが、今回、弥生時代遺物包含層を覆う青灰色シルト（N R-3001の氾濫土）層をベースとして流れる古墳時代前期の自然流路（S D-01）を確認している。

6) 古墳時代中期～藤原時代

KM-H 1・2 の調査では明確な遺構は検出されていないが、基本層序第Ⅳ層がこれに相当しよう。

7) 奈良時代

基本土層第Ⅳ層に相当し、上面にて多数の小穴を確認している。埋土はシルト・砂であり、その形状からしてウシの足跡であろうと思われた。

8) 室町時代

基本土層第Ⅳb層が当時の生活面に相当する。検出された遺構は、落ち込み、溝状遺構で遺跡としては集落の中心から離れているものと思われた。（第129図）

9) 江戸時代以降

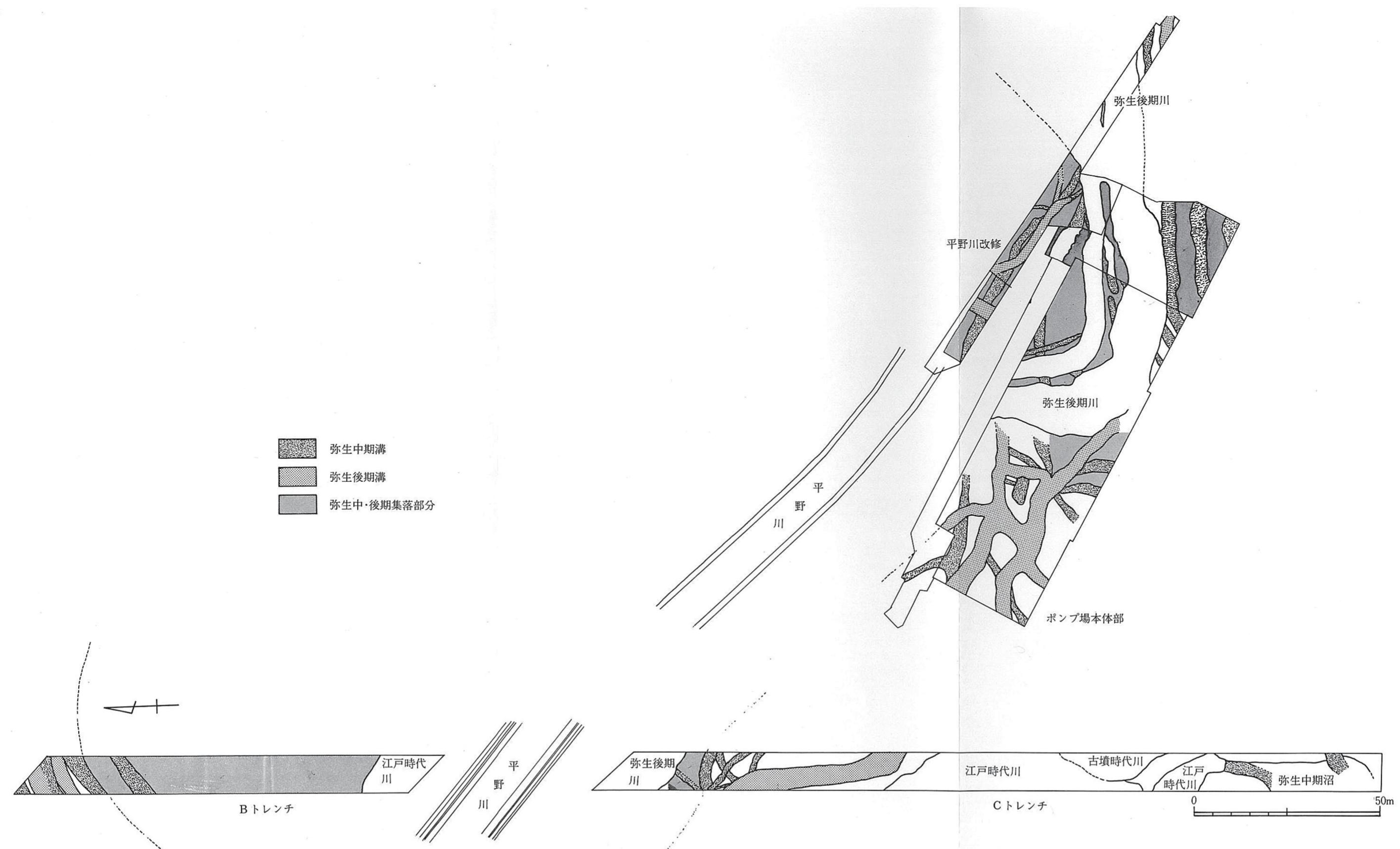
KM-H 1・2 の調査では南端で旧平野川の東岸を検出している。

以上、亀井遺跡（KM-H 1・2）の調査によって明らかになった点を時代順にみてきたが、解決できなかった問題点、解決すべき点をあげると、旧石器時代の遺構、縄紋時代の遺構（検出される可能性が大変低い）、弥生時代前期、後期の集落がいまだ不明であることである。以上の問題は今後の課題として提出したい。

第43表 動物遺存体の最少個体数（KM-H 1・2）

動物名 遺構	イ ノ シ シ	ニ ホ ン ジ カ ヌ	イ ヌ	タ キ	ス ッ ボ ン	ヘ ビ	ネ ミ	モ ラ	ト リ	エ イ	ナ マ ズ	ギ ギ	カ エ ル	ウ マ
落ち込み1	7	1							1		1			
落ち込み2	1	1												
SK-03	1	1			1									
SD-03	8	2	6			1	5	1		1			2	
SD-05	1									1	1	1		
SD-02	3	2	1											
SD-04	2	$1+\alpha$	4	1										
SD-06	3	1	3			1					1	1	1	
SD-01														1
総 数	26	9	14	1	1	2	5	1	1	2	3	2	3	1

※ヒト及び方形周溝墓マウンド出土の動物遺存体はこの表より除外している。



第182図 龜井遺跡既往の調査トレント配置図

第2節 縦内大社会の理論的様相

—大阪湾沿岸における調査から—

はじめに

(財) 大阪文化財センターによる大阪府八尾市・亀井遺跡の発掘調査は、行政上必要とされるデータの収集にくわえて、次のような課題を意識し、ここ数年間おこなわれてきた。

- ・集落の規模とその構造
- ・基本生活領域内の実態
- ・周囲の自然・社会環境
- ・生業・経済活動
- ・精神活動
- ・社会関係
- ・それらの歴史的变化
- ・その他

筆者は、過去3回にわたる発掘調査のうち、このたび報告された平野川改修工事にともなう調査を担当した。今回報告の機会をえたので、亀井遺跡を理解すべく、縦内における弥生時代中期の拠点集落ならびに縦内大社会について論議したい。もちろん、亀井遺跡は、拠点集落の典型的な事例である。

論をすすめるについては、先ず、縦内の代表的な集落址をいくつか簡略に観察しながらその一般的様相を把握し、それにもとづいて拠点集落の理論的枠組を仮設する。次いで、拠点集落の分布、および集落間の相互関係を把握するのに有効な生産物の移動についていくつかの認識をのべる。これは、集落間の関係は、拠点集落の分布と、生産物の搬入・搬出状況に明確に表現されると理解することによる。そして最後に、それがもつ個有の祭祀イデオロギーについて説明する。

今回は、いわゆる“縦内大社会”的大阪湾沿岸地域についてのみ限定しとりあげるが、そこでえる理論的様相は、縦内大社会全体にあてはまるものと確信している。また、同様の観点から、縦内以外の諸地域、すなわち北九州（今山産大型蛤刃石斧の分布範囲に示される）や、瀬戸内海沿岸（サヌカイト製打製石庖丁の分布範囲に示される）、その他についても論議が可能である。これら諸課題には、別稿がいくつか用意される。

1. 拠点集落の理論的様相

拠点集落は、基本生活領域を核とし、それをとりまく外縁施設・機能空間・周囲の自然環境により構成される（第183図）。

基本的な生活行為の類型 集落とは、人間の生命維持にかかわる各種の生活行動がされる場であり、考古学的には、そこに住まつた人々による生活行動の諸痕跡の総体、と定義される。そうした意味では、地理学における定義とはことなる。その理由は、考古学においては、景観としての集落よりも、生活行動の場としての集落を強調して理解しようとすることがある。

われわれが、集落址において遺構・遺物の出土状況として眼のあたりにする生活行動の諸痕跡は、一見多様であるけれども、おおむね第44表にあげるような類型に整理できる（酒井1982年）。すなわち、生活の場として集落址を構成するのは、行為の主体である人間（a）をはじめとし、生活にかかわる住居（b）・貯蔵（c）・調理（d）施設と食料（e）・道具（f）、精神活動にかかわる祭祀（h）施設、そして、それぞれのカテゴリーや後にのべる行為のプロセスを画する結界（g）施設である。各カテゴリーは、人間であれば出生——生活——死亡、施設であれば設定——使用——放棄、物品であれば製作——使用——廃棄という3つの行為のプロセス（I——II——III）を経過する。これらを考えあわすと、生活の場でおこなわれる生活行為の類型は25を数えることになる。ところで、行動の主体者や対象には、一般的なもの（A）、特別なもの（B）、男女公用のもの（C）、男のもの（D）、女のもの（E）、にくわえてその他（たとえば、神・邪氣・精霊など）のもの（F）、の区別がある。それゆえ、論理的に考えうる行為の類型の総数は、25の6倍、

第44表 生活領域内における生活行為の類型

行為のプロセス 遺構・遺物 のカテゴリー	I	II	III
a (人間)	出生	生活	死亡
b 住居址	設定	使用	放棄
c 貯蔵施設址	設定	使用	放棄
d 調理施設址	設定	使用	放棄
e 食料	調理	食事	1 廃棄 2 排泄
f 道具	製作	使用	廃棄
g 結界施設址	設定	機能	放棄
h 祭祀址	準備	行為	終了

（注）それぞれ類型には

A 一般的なもの

B 特別なもの

C 男女公用のもの

D 男のもの

E 女のもの

F その他のもの

の区別があり、総計150の類型となる。

（酒井1982年）

つまり150にものぼる。もちろん、この他にも様々な行動が、生活の場で実際にはおこなわれたであろう。だが、生活行動を基本的に構成するのは、これらである。

以上のような類型の行為にかかわる遺構や遺物の集中・分布する空間が、その集落における生活領域である。

生活領域の固定 先のような類型の行為がされ、あるいはそれにかかわる施設が設けられる空間は、時々により変化するけれども、実際の拠点集落を巨視的に観察すると、長期にわたってかなり固定した空間が使用された事実がしれる。それについてには、各時代にわたる生活遺構・遺物の

累積や集中状況や、厚い生活堆積層の存在をもって観察できる。

そもそも、集落の設定の意義が、その地を定住のために選定し、そこを生活の拠点として周囲の自然環境にはたらきかけ、また、他の生活集団との関係をもって大社会を形成してゆくことがあるとすれば、なんらかの理由がないかぎり、その地に永住してゆくことになるのが当然である。特別な機能的役割をになって設定され、目的が終了することにより、もはやその地に存続する意味をうしなう集落とは、そのありかたを基本的にことにするだろう。それゆえ、前者を「生活集落」、対する後者を「機能集落」とよびわけることが可能である。「拠点集落」とは、前者にふくまれるタイプの集落型態である。拠点集落は、永久に存続すべく設定されるのに本質の一部があるに対して、機能集落は、目的の終了をもって廃絶されることに本質の一部がある。このような観点にたてば、拠点集落の廃絶や生活領域の変更には、なんらかの社会的・自然的事情が説明される必要がある。

たとえば、第Ⅶ様式初頭に生活領域が放棄される瓜生堂遺跡は、その原因として自然環境の変化が説明される（安田1973年）のは、その一例である。それに対して、同じ河内平野の拠点集落であっても、その南5Kmに位置する亀井遺跡は、第Ⅶ様式においても存続しつづけ、こうした自然環境の変化が重大な影響をあたえなかったことをしめしている。また、池上遺跡も亀井遺跡と同様の状況をしめす。だが、池上遺跡の北東5.5Km、同じ和泉平野に位置する四ツ池遺跡は、瓜生堂遺跡がこうむった自然環境の変化に影響されない台地上にあるにもかかわらず、第Ⅶ様式初頭にはそれまでの生活領域は放棄される。それゆえ、これについては瓜生堂遺跡とは別の自然環境の影響か、それ以外の社会環境の影響をもって説明する必要がでてくる。その原因については本稿ではふれないとしても、拠点集落の個々の廃棄を、調査にもとづいて説明する必然性はあきらかである。

生活領域とその範囲 さて、先のような類型の行動がおこなわれる場、すなわち、それらにかかる遺構や遺物の集中・分布する場を、「基本生活領域（以下、生活領域）」とよぶ。集落規模の測定するについては、この生活領域の範囲をもってしたい。

拠点集落の一つである亀井遺跡の生活領域の範囲は、長吉ポンプ場建設、近畿自動車道建設、そして平野川改修工事にともなう3ヶ所の発掘からある程度の推定が可能である（大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター1981年）。それによると、北西端は近畿道Bトレイン北端付近に、南西端は同Cトレイン北端付近に、南端は長吉ポンプ場中央部付近に、そして、東南端は平野川改修の東端付近に、もとめられる。それぞれに画される内側には、弥生時代中期～後期にかけての各種の生活遺構と多数の生活遺物が集中・分布するとともに、生活領域を特徴づける黒色有機質遺物包含層の厚さ1mにもおよぶ堆積をみる。たいして、それぞれの端部の外側は、生活遺構や遺物の分布が極端に少なくなるとともに、黒色有機質土層の堆積もなくなり、もはや生活領域の外側であることをしめしている。残念ながら、遺跡の東側ではこれ迄発掘がなされておらず、この方向の端部は未確認である。これらの結果から、北西～東南に軸をおく長径300m強、

短径150m以上の橢円形範囲が、亀井遺跡における中期～後期の生活領域と推定できる。

それでは、亀井遺跡での生活領域の規模を、畿内を代表する二つの集落遺跡と比べてみよう。

先ず、同じ河内平野にあって、亀井遺跡の北5kmに位置する東大阪市・瓜生堂遺跡をとりあげる。この遺跡での生活領域は、瓜生堂遺跡調査会と(財)大阪文化財センターによる発掘結果から推定が可能である(瓜生堂遺跡調査会1971年、1972年、1973年、1981年大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター1980年)。遺跡を南北に縦断する(財)大阪文化財センターによる中央環状線内のトレンチでは、生活遺構の集中分布する範囲の北端をBトレンチ北端付近で、対する南端をEトレンチ内で確認している。この間は200m強をはかる。東西方向のトレンチ内での遺構分布の状況からみて、この縦断が遺跡の東端近くに位置することがわかるので、集落中央の南北端の距離はさらに大きくなるであろう。東西に横断する瓜生堂遺跡調査会による中央南幹線下水管渠内のトレンチでは、東端を中央環状線付近で、対する西端を小阪ポンプ場の西端付近で確認しており、その間200mをはかる。それぞれに画される内側には、弥生時代中期の各種の生活遺構と大量の遺物が集中するとともに、黒色有機質の生活堆積層の広がりがみとめられる。これとは対称的に、それぞれの外側では、いずれとも希薄となる。これらの調査結果を考えあわせると、南北200m、東西200m強程度の範囲が、瓜生堂遺跡における弥生時代中期の生活領域と推定できよう。

次に、和泉市・池上遺跡をとりあげよう。この集落の生活領域は、第二阪和国道内遺跡調査会および大阪府教育委員会の両トレンチとで、おおむね推定が可能である(第二阪和国道内遺跡調査会1971年、大阪府教育委員会1975年)。第二阪和国道予定路線内に設定されたトレンチは、集落の東端近くを東北～南西方向に横断する。そして、北東端をM地区内で、対する南西端をH地区内で確認しており、その間は300m強を測る。大阪府教委による松の浜曾根線のトレンチでは、北端をI・K・C地区で確認している。西端は曾根神社付近は求められる。それぞれに画される端部の内側には、弥生時代中期の各種の生活遺構と大量の遺物の集中をみるとともに、黒色有機質遺物包含層の堆積がある。それぞれの端部の外側は、対照的に、いずれも希薄となる。これらトレンチ内の状況や、遺跡内各地点でのその他の調査成果を考えあわすと、池上遺跡における弥生時代中期の生活領域の範囲は、南北および東西とも径300m～350m程度であることが理解できる。

これまで、亀井・瓜生堂・池上といいういづれも大規模な集落における中期の生活領域の範囲を、発掘調査の結果によりながら推定してきた。そして、なお未確認の部分もあったが、いずれも300mという数値に近い範囲をえている。そこで、径300mという数値を一応の基準にすると、円形面積として70,650m²という数値がえられる。

生活領域の外縁　調査をする側にとって、生活領域の確定は、各種の生活遺構や遺物の分布状況の観察、および黒色有機質の遺物包含層である生活堆積土層の存在の観察によりなされ、同様に、その範囲についても測定できる。

それでは、当時の人々は、その範囲を画するなんらかの施設や地形をもって、生活領域の外縁を意識していたのであろうか。少なくとも、われわれの目からみれば、生活領域の外側は、生活遺構と遺物の分布状況は極端に希薄となり、それにともなって生活堆積層の堆積もなくなる。先にあげた三遺跡での状況を観察してみよう。

亀井遺跡での生活領域の北西端には、中期の幅3m程度の大溝が4本、後期の幅4m程度の大溝が2本、対する西南端にも中期の幅2m～3mの大溝数本と、後期の大きな自然河川の存在が確認されている。また、南端にも中期の大溝群や後期の自然河川がある。この付近をもって、いずれも遺構や遺物の分布状況、ならびに堆積土層の状況は大きく変化する。

瓜生堂遺跡では、北端には中期の湿地帯や幅10m程度の自然流路、南端には中期の幅6mの大溝と幅2mの溝、東端には斜面・湿地が存在している。やはり、それらを境にして遺構・遺物・土層の状況は大きく変化する。

池上遺跡では、東端と北端に中期の幅4m～5mの大溝群が、南端に溝群があり、やはりそれらを境にして遺構、遺物、土層の状況は大きく変化する。注目されるのは、東～北の生活領域を画した大溝は、南側では領域の内側をはしり、さらに大溝の南外側にも生活諸遺構と遺物、あるいは生活堆積の土層が広がっている。すなわち大溝がかならずしも全域にわたって生活領域の外縁施設の役をはたしているのではなく、べつのものがそれにあてられている。よって、この遺跡における大溝群が、集落を完全に周囲する環濠になるかどうかの判断は別としても、少なくとも大溝の外側にも一部生活領域が広がっている事実があり、その外縁には別の流路や、それに相前後して存在する空間が同様の機能をはたしている。

このように、三つの集落をみると、それぞれの生活領域の外縁には、人為的な大溝、あるいは自然的な河川や湿地帯が存在しており、これらが可視的な外縁施設としての役割をはたしていたことがうかがわれる。そして、それらに相前後して、遺構分布の希薄な幅10～数10mの空間帯がみられる場合もある。

機能空間とその範囲 機能空間とは、基本的な生活領域にすまう人々が、みずからの意志と労力により、狭義の意味での衣食住という生活行動以外の施設を設け、それにかかる行動をおこなう空間である。たとえば、水田や畑に代表される生産のための施設、土器棺、土壙墓、方形周溝等に代表される埋葬のための施設、祭祀行為のための広場、あるいは用水にかかる水路、人々の共同の倉庫群に代表される貯蔵施設、各種の道具を製るための場、その他さまざまな機能のための施設や行動があげられる。これらの施設が設定される空間は、いずれの集落址を観察しても、生活領域と重複しつつも、さらにそれをこえた外側にも拡大した範囲で広がっていることがわかる。埋葬施設を例にとると、亀井・瓜生堂・池上遺跡とも、生活領域のなかにも設定されるだけでなく、さらにその外側にも幾群かにわかつて設定されている。発掘調査が、従来では生活領域の主として内側にのみ実施されたことが多かったことに起因して、こうした機能空間が、各地の集落の外側にどの程度広がるのかはあきらかではない。現時点では、生活領域の外側におよぶ墓

域や水田址の分布状況、あるいは遺跡範囲から推察して、径700m、面積にして384,650m²と理解しておこう。すなわち、生活領域のさらに外側200mにまでおよぶものである。

生活領域を核とする環境体とその範囲 大阪湾沿岸のいわゆる拠点集落とよばれる遺跡の分布状況を観察すると、その間隔が5Km前後のものが多いことに気づく。

たとえば、和泉における池上遺跡と隣の四ツ池遺跡の間隔は5.5Km、南河内における喜志遺跡と国府遺跡は5.1Km、北河内における亀井遺跡と恩智遺跡は4.6Km、また亀井遺跡と瓜生堂遺跡は5.2Km、国府遺跡と恩智遺跡は4.5Km、瓜生堂遺跡と鬼虎川遺跡は4.1Km、そして、西摂津における垂水遺跡と勝部遺跡は5.2Km、垂水遺跡と宮の前遺跡は5.9Km、宮の前遺跡と摂津加茂遺跡は4.3Km、などがあげられる。

もちろん、これらの他にはより間隔の大きいものや小さいもの、という多様な数値が実際にはえられるし、遺跡の広がりの未確定なものについての間隔は正確に測定できないとしても、概して5Kmという数値は確かに目安となる。

この観点から、隣在する拠点的集落との間隔を二分し、たがいに重複しない程度の空間、すなわち生活領域の中心を核として半径2.5Kmの円周を理論上えがく。この円形範囲を、内在する生活集団の観念的領域と理解する、この径5Km、面積にして19,625,000m²は、さきにあげたように、実際の遺跡分布から割りだされたもので、内在する生活集団がみずから機能すべくエネルギーを吸収できる一環境体である。もちろん、この環境体だけで拠点的集落の一つが存在しうるというのではなく、他の多くの生活集団と相互にむすびついてより大きな社会——大社会——を構成しつつも、そのなかで役割をはたす個性となるものである。弥生時代中期という時代における拠点的集落にあたえられた一般的な規模の環境体と理解する。

拠点的集落の理論的枠組 以上のような考え方だから、拠点集落はつぎのような理論的枠組をもつ。(第183図)

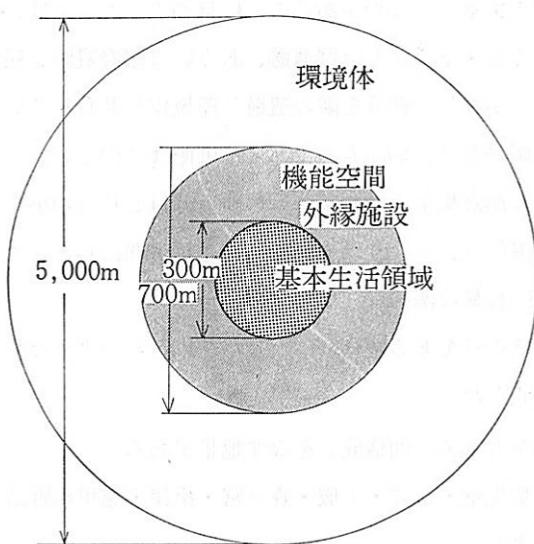
先ず、核として径300m、面積70,650m²の基本的な生活領域が存在する。そこでは、生活を構成する25の行為類型にかかわる行為がおこなわれる。それぞれの類型には、一般的なもの、特別なもの、男女のもの、男のもの、女のもの、そして、その他のもの、がその主体となる可能性を考慮すると、総計150の行為類型にのぼる。すなわち、生活領域の場では、150の行為類型にかかわる行動の痕跡(遺構・遺物)が本来みいだせることになろう。

その外縁には、人為的な大溝や空間、あるいは自然的な湿地・河川・傾斜地などの可視的な外縁施設がとりまく。柵、ヘイ、土壠、林なども想定できるが、まだ検証された事例はすくない。

生活領域に重複し、さらにその外側にもおよぶ機能空間は、径700m、面積にして2,384,650m²程度が想定される。そこでは、水田や畑あるいは墳墓といったものをはじめとして、種々の機能的な施設が設定され、それにかかる行動がおこなわれる。生活集団自身による人為的な機能空間である。

生活領域を核とする径5Km、面積にして19,625,000m²の範囲は、内在する生活集団の観念的

領域である。この範囲は、隣在する別の生活集団のそれとは、基本的には重複しない。



第183図 基本生活領域を核とする環境体

なお、本稿では触れないが、一個の生活集団は、複数の下位集団により構成されている。それぞれの下位集団は、生活領域内部において、住居をはじめとする生活諸施設および墓域の設定に独自の区域をもっており、他とは区別される。従来の調査では、下位単位の数は2～3個とみられる。複数の下位単位は、分節型線形構造をもって結合している。ちなみに、典型的な縄文集落は、求心型円形構造による1個の生活集団により構成されることが一般的であった。

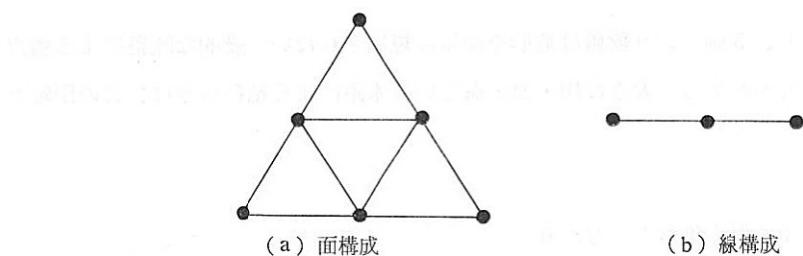
2 抛点集落による空間構成

大社会は、各地に点在する抛点集落により空間的に構成される。構成のありかたは、「面構成」と「線構成」の二者がある。(第184図)

抛点集落の等質性 従来の知見によるかぎり、大阪湾沿岸地域に点存する抛点集落は、規模・構造・機能について基本的な隔差はない。特定の集落や集団を頂点とする社会のヒエラルキーを想定する意見があるとすれば、これまでの調査結果にもとづかない。すくなくとも、他を圧する特定の集落・集団・個人の存在を貴極的に肯定するいかなる考古学的データは、弥生時代中期における畿内の集落址にはこれまでみいだせていないし、その存在を説明しうる論議もない。

たとえば、河内平野に位置する瓜生堂遺跡が、各種生産物の未成品の出土がすくないこと、および大型の方形周溝墓の発見されたことを理由に、他の諸集落と比較してなんらかの政治的傑出性をもつと評価する意見があれば、データの実状と大社会の構造から判断して妥当ではない。

抛点集落の間隔 大阪湾沿岸各地に点在する抛点集落の間隔は、基本的には5kmの間隔をあけて点在する。



第184図 抛点集落による構成

5 Kmという基準値を設定した場合、それ以上離れて存する集落間の関係は、ただちに問題となるないにしても、別に、きわめて近接して存する集落がいくつかあることに気づく。たとえば、摂津における勝部遺跡と田能遺跡、河内における瓜生堂遺跡と巨摩遺跡、あるいは国府遺跡と船橋遺跡、などがあげられる。これらは、いずれもかなりの部分を隣の遺跡と環境体と共有していくことになり、5 Km程度離れて存する集落間の関係とは、別のものであった可能性はつよい。

本稿では論じることはないが、時代におおじて拠点集落の周囲に、いわゆる分村としての小集落が派生する動向も生じるけれども、これらの事例は、かなりはやい時点から長時間にわたって同一環境体のなかで、隣接・共存しており、その特異な関係は注目される。

拠点集落による空間構成 拠点集落あるいは、その役をある時代にはたしたとみられるような集落の分布状況を概観すると、次のような空間構成となる。

旧河内湾の北側および南側には、複数の集落をもって「面構成」をなす地帯がある。

河内平野では、鬼虎川・縄手・恩智・国府・瓜生堂・亀井・瓜破・森ノ宮・桑津・遠里小野遺跡などにより構成され、これを「河内面帶」とよぶ。

摂津平野では、安満・津之江・東奈良・柱本・太秦・垂水・崇禪寺・森小路・田ノ口の遺跡などにより構成され、これを「東摂津面帶」とよぶ。これらは、この面帶の中央部を流れる淀川は、その南北を二分する役ははたさない。

南北の面体は、生駒山脈の西麓の太秦——中垣内——鬼虎川遺跡の「旧河内湾東側の線帶」で結ばれる。両者の中央に広がる旧河内湾（市原・梶山1972年）は、埋積の過程であり、当然遺跡の分布はすくない。

河内面帶の南西端は、遠里小野——四ツ池——池上——畠 → という「大阪湾東側沿岸の線帶」を構成する諸遺跡により、南方の紀伊へとむかう。畠遺跡と男の里遺跡間の実態は、未確定。

また南東端は、国府——喜志 → という「石川沿岸帶」の遺跡により、南方へとむかう。

東摂津面帶の西側には、勝部・田能・宮ノ前・摂津加茂・上津島・不ノ田・武庫莊をはじめとした諸遺跡により構成される「西摂津面帶」がつながる。

東摂津面帶の北東側へは、安満を起点として山城の遺跡群へとづく。

生駒山脈の東側・大和盆地には10余遺跡程度（推定）の拠点集落による面構成「大和面帶」がある。

分布状況を観察すると、5 Kmという数値は地形や面積に規制されない一般的な陸路による拠点集落間の間隔であることがわかる。大きな川・潟・海という水路による結びつきは、この距離とはことなるだろう。

3 生産物の移動による拠点集落のつながり

生産物の移動には、「極部的移動」、「地域的移動」、「社会的移動」、そして「越社会的移動」の

四種（酒井1976）があり、また「相互移動」と「一方的移動」の基本的区別が必要である。

拠点集落間は、このうち生産物の社会的・相互移動により結びつく。（第185図）

生産物移動の諸レベル 先ず、自らの環境体の中で素材が産出し、製作すべき諸道具がその生活領域内で出土する場合は、その生産物が集団内で生産されたと判断してよいだろう。例えば、池上遺跡では、花粉分析や種子・葉の同定結果から周辺に大型樹木の植生が推定され、各種木器の未成品が大量に出土し、その製作に必要な太型蛤刃石斧・方柱片刃石斧・扁平片刃石斧もまた大量に出土する。これらのことから、ここで木製品の製作がおこなわれた可能性は、事実に近い度合で認めうる。

同じく亀井遺跡でも、同様に花粉分析の結果から周辺にカシ等の植生が想定され、やはり太型蛤刃石斧・方柱片刃石斧・扁平片刃石斧の出土がかなりある。池上遺跡における状況を踏え、亀井遺跡での観察事項を評価すれば、ここでも木器の製作がおこなわれた可能性を認めることができよう。河内平野の鬼虎川遺跡も同様である。

ところが、同じ河内平野にあっても、瓜生堂遺跡では、周辺が草地であった可能性を花粉分析等より示唆され、また太型蛤刃石斧の出土数も他遺跡と比べて極端に少ない（酒井1981年）。この現象を認めるるとすると、少なくとも瓜生堂遺跡の生活集団が自らの環境体の中で大型の樹木を伐採した蓋然性は極めて低いことになる。もちろん少数ながら太型蛤刃石斧の出土をみており、その作業は時としておこなわれたことは考えられる。ただし、その頻度は少ないだろう。対して、方柱片刃石斧と扁平片刃石斧は、太型蛤刃石斧と比べて出土する数は多く、また完成した木器も多数出土する。このことは、他環境体から素材となる材木・板材あるいは半成品を搬入し、その最終的な加工・調整作業はこの集落内でなされた可能性を示唆している。こうした観点でみれば、池上遺跡における木器は自らの環境体内で生みだされたものであるに対して、瓜生堂遺跡における同じ木器は他の集団からもたらされた可能性が考えられる。ここで、ある工程以前の未成品が出土しないこと、石庖丁や大型の石槍（石剣）のように半成品として畿内各地を移動するものがあること等を考えあわせれば、瓜生堂の木器についても同様な加工段階で搬入されたとみるのも妥当性がある。この区別を認めて、池上遺跡の事例のように一環境体の中で製作され（その内部の集団、たとえ分村に住まう集団であっても）、使用されるべく移動するものを「極部的移動」、対して、瓜生堂遺跡の事例のように他の環境体に住まう集団の手により搬出され、地域社会を越えて搬入されるものを「社会的移動」するものと呼ぶ。

この他、径5Kmの環境体の中には産出しないけれども、他の集団の手をわざわざしたとは考えられない可能性のある、例えば、太型蛤刃石斧の素材のような事例もみられる。すなわち、ある生活集団が自らの環境体を越えて独自で入手し搬入した可能性のもので、これを「地域的移動」したものと呼ぶことになる。

これらの生産物とは別に、畿内の地に全く素材が産出しないにもかかわらず、大量の製品のみが出土するものがある。例えば、鉄器や青銅器にかかる素材である。既に、剣、戈、鐸といった

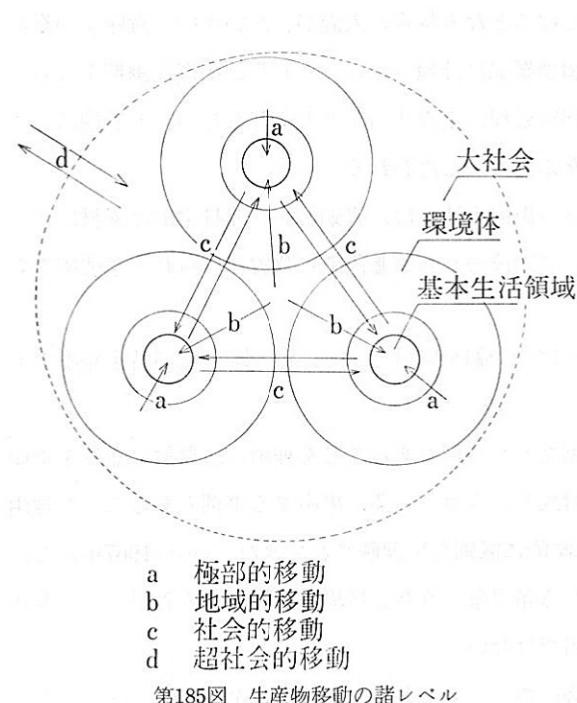
青銅祭器については、畿内の各地で鋳型の出土をみており、その製作のかなりがこの地でおこなわれたことは明らかである。また、製品の分布が畿内大社会内部、およびそれを核とする広範囲におよんでいるとともに、各地の集落内でそれらの細片の出土例も増加しつつあり、その消費の主体がここにあったことも示唆している。このように大社会外部の遠隔地、すなわち日常生活レベルで結びつきのない他の大社会からもたらされた製品や素材を、「超社会的移動」と呼ぶことになる。もちろん、畿内大社会個有の生産物が、他の大社会へ移動したものについても同様である。

生産物の相互移動と一方的移動 各地の拠点集落は、その地理的諸条件にもとづいて、それぞれ個有の環境体をもつことになる。例えば、河内平野の厚い沖積土壌上に立地する全集落は、石器用素材のすべてを他地域から搬入せざるをえない条件が当初より与えられる。また、大型樹木のない地域にあっては、やはり木器用素材についても同様の条件が与えられる。サスカイトを産する二上山地域に近接する集団は、それを大量に入手できる機会が大であり、結晶片岩を産する紀ノ川流域の集団も同様の状況をうる。粘板岩や頁岩を産する円波山地に近接する集団も、また同様の機会をえるであろう。

このような地理的状況のもとにあって、素材の产出の豊富な地域から、それを全く产出しない地へ素材や半成品が移動しておれば、それが交易のような両地域の集団による交換行為による理解することは、あながち不当ではない。もちろんこの可能性を想定するには、产出地に近接して当該集落地がみいだせることが前程となる。さらに、別の物品が逆方向に移動している事実が検証できれば、その蓋然性はまた高くなる。再び、瓜生堂遺跡を例にとれば、なおまだ木器や石器用素材の搬入を、ある意味の政治性を想定し理解するむきもあるけれど、こうした考えにもとづいて、地理的条件に起因した交換の結果とみても妥当の範囲にある。むしろ、瓜生堂集団の社会的傑出性を説明する方がむつかしい。とすれば、ただちに思いおこされるのは、畿内各地に大量に搬出されたいわゆる河内の土器である。必ずしも、瓜生堂遺跡にてそれらが製作されたとはいえないとしても、沖積平野上に立地している集団から由来していることは既に指摘されるところである。神経質にまで調整・加飾されたこれらの土器は、またそれにふさわしい薄く硬く焼きあがるべく摘切な粘土をも使用している。生駒山脈を形成する岩脈の風化バイラン土壌による粘土の产出は、この地に所在する諸集団のもつ地理的特質である。すぐれた土器製作をおこなった河内の地にも、また他地方からのすぐれない土器も相当量搬入されている事実もあることから、搬出された河内の土器そのものがすべて交換品であったといいがたいとしても、各種の素材を大量に搬入せざるをえない条件のもとでは、何か搬出すべき特産品を創りださねばならぬ必然性が、かれらに課せられていた。

このような考え方により、ある生産物の移動が一方方向だけでなく、逆の方向にも確認されていれば、交換という相互行為によるものと理解できる。ただし、この考え方には、いずれの遺物ともそれぞれの生活領域に出土があることを考古学的に検証できる、という条件がつく。

それでは、移動する生産物の出土が先の生活領域以外の地にあるものについては、どのように考えればよいのだろうか。仮に、ある特定の物品について、幾度となくそうした出土の状態が確かめられれば、それは生産地の集団がみずからだけの意志で搬出させたか、あるいは、その近辺の集団が何かとの交換でそれを入手した後、離れた地へ再び搬出したか、いずれかの理由が考えられる。ただし、出土地の近辺に該当する集落がない場合、および、逆方向の生産物の移動が確かめられない場合は、前者の理由にもとづく移動と認められる。例えば、人里離れた地にて出土する銅鐸については、こうした理解が可能であろう。



第185図 生産物移動の諸レベル

また、いずれにも所属しない空白の環境からの生産物の採集および搬入も、(諸)集団独自の手でおこなわれたこともあろう。このようなものを「一方的移動」されたとみなし、交換により相互方向に移動するものとは区別しておく。

生産物の交換による関係体（大社会）の構成 以上の観点にもとづいて、畿内各地における拠点集落での生産物の生産と消費のありかたを概観すれば、各種の生産物の大量移動の事実が確認され、一つのネットワークともいべき相互関係を、弥生時代中期には構成していることがわかる。その範囲は、摂津・河内・山城、大和・和泉・紀伊の諸地方をおおう。

そのなかでは、地域性として、南辺から産する生産物を主に使用する「南部型」と、北辺から産するものを主に使用する「北部型」に区別されるが、それは生産地からの地理的条件にもとづく相補現象で、中央部の生産物はあまねく大社会全域に移動する。これまでの知見によるかぎり、まんべんなく移動しており、極端なたよりはみとめられない。

各地に点在する拠点集落の等質性、規模の画一性、文化的類似性、変化の同時性など、畿内の弥生集落間の関係を特徴づける諸現象はすべてこのスムースな生産物の移動ネットワークの存在をもってのみ説明が可能である。

3 畿内大社会の祭祀イデオロギー

各地に点在する拠点集落と、それらを結びつける生産物の相互移動のネットワークにより構成される大社会は、個有の祭祀イデオロギーにより個性づけられ、他の大社会と区別される。畿内

大社会は、銅鐸という特定祭器を媒介とする祈願型の祭礼型態をもって特徴づけられる。

祭祀イデオロギーの諸段階 生産物の移動が、拠点集落間を具体的に結合さすものであるに対し、祭祀イデオロギーは、また拠点集落間を観念的に結合さす。歴史的にみれば、不特定多数の諸物や環境があいまいな意味での祭器の役割をはたした段階（第Ⅰ段階）——石、木、その他日常に使用する物品と同素材による特定形状のものが祭器の役割をはたした段階（第Ⅱ段階）——青銅その他、日常生活物とはことなった素材による特定形状のものが祭器の役割をはたした段階（第Ⅲ段階）——一般諸成員のなかの特定の人間が、あいまいな意味での祭器の役割をはたした段階（第Ⅳ段階）——そして、一般諸成員とはことなる特定の人間が、あいまいな意味での祭器の役割をはたした段階（第Ⅴ段階）——に、訴願型祭祀は分類される。それぞれ明確な画期をもってかならずしも転換するものではなく、その移行過程に重複することもありうるが、一般的に言えば歴史的経過としては順次それぞれの段階をふむものと思われる。

この観点からみれば、弥生時代中期における畿内大社会は、青銅という非日常的な素材によりつくられた銅鐸をその特定祭器としており、諸段階のうち第Ⅲ段階に位置づけられる祭祀型態をもつ。参考文献：著者固有の資料

ちなみに、同時代の北九州の大社会も、やはり青銅を素材とする戈、鉾、剣が特定祭器であり、同祭祀型態をもつ。

從来、銅鐸を、鐸身に農耕にかかわる絵画をもつ事例のあることを理由に、農耕の豊穣を祈願する祭器と、対する銅鉾・銅戈・銅剣を、対馬という海上の島に集中する事例のあることを理由に、海上航海の安全を訴願する祭器と、基本的に区別して理解されてきた。（小林1967年）ただし、この推論は、銅鐸・鉾・戈・剣にかかわる諸現象のうち、特異な事例にのみ着目して、全体を評価したものであって、かならずしも妥当ではない。

これらの特定青銅器類は、いずれの大社会にあっても、共通なありかたをしめす。すなわち、素材はいずれの大社会内部の自然環境では産出しない。ところが素材を大量に搬入し、両大社会の独自の主体性をもって、各地で製作し、大社会内部の各地にくわえて、それを核とする広範囲に搬出する。これらの祭器の社会的特徴は、特定集団により保有されることにあるのではなく、集落や大社会の外側へ搬出されることにある。また、実際に出土する諸地には、かならずしも有力な当該集落や集団が存するとはかぎらず、またそれぞれの地から、青銅器類の製作地への逆方向の生産物の大量移動の事実もみとめられない。さきにのべた考え方からすれば、こうした特定青銅祭器類は、いずれも主体的意識にもとづいて、なんらかの理由で、一方的に搬出がなされたものである。すくなくとも、銅鐸・鉾・戈・剣の性格に、基本的な区別はなく、考古学的にも、鐸と武器類の共存する事例をもってそれを説明できる。かようなありかたと、歴史的経過とは、共通の現象をみせており、その社会的、歴史的にはたした役割はおなじと理解することが妥当である。

銅鐸および銅鉾・戈・剣といった青銅器類は、別稿で論じられるとおり、集落や大社会を、外

から浸してくる悪靈・害敵などから観念的にふせぎとめるための結界行為に供されたものと理解している（春成1978年、酒井1978年、1980年）。

おわりに

このたび調査がなされた亀井遺跡は、以上のような畿内大社会を構成する拠点集落の一例である。

〔文献〕

- 瓜生堂遺跡調査会 1972 「瓜生堂遺跡（資料編）」
- 1973 「瓜生堂遺跡Ⅰ」
- 1981 「瓜生堂遺跡Ⅲ」
- 大阪府教育委員会
1975 「池上遺跡発掘調査概要Ⅴ」
- 大阪府教育委員会（財）大阪文化財センター
1981 「亀井遺跡現地説明会資料Ⅱ」
- 1981 「亀井・城山」（寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書）
- 1980 「瓜生堂」（近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書）
- 小林行雄 1967 「国民の歴史1」（女王国の出現）
- 梶山彦太郎・市原実
1972 「大阪平野の発達史」「地質学論集」7
- 酒井龍一 1976 「弥生社会の体系的理義に関する認識論」「大阪文化誌」第5号
- 1978 「銅鐸・その内なる世界」「摂河泉文化資料」第3巻第2号
- 1980 「銅鐸（邪氣と封じこめたオブジェ）論」「摂河泉文化資料」第5巻第3号
- 1981 「亀井遺跡の石器生産」（前掲）「亀井・城山」
- 1982 「集落址からみる人間の精神構造」「歴史公論」第八卷第九号
- 第2阪和国道内遺跡調査会
1971 「池上・四ツ池」
- 1971 「第2阪和国道内遺跡調査報告書4」
- 春成秀爾 1976 「銅鐸の埋納と分布の意味」「歴史公論」第4巻3号
- 安田喜憲 1973 「瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析」（前掲）「瓜生堂遺跡Ⅱ」

